

茨城県教育財団文化財調査報告第475集

那 珂 市

下大賀遺跡 4

一般県道静常陸大宮線道路整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和 7 年 1 月

茨城県常陸大宮土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

公益財団法人
大塚教育財団

跡本

遺賀

太下

市

現

那

集

55

第

茨城県教育財団文化財調査報告第475集

那 珂 市

しも おお が
下大賀遺跡 4

一般県道静常陸大宮線道路整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和 7 年 1 月

茨城県常陸大宮土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者からの委託を受けて埋蔵文化財の調査と整理作業を実施する組織として、昭和52年に調査課を設置して以来、数多くの遺跡の調査を実施し、その成果として調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県常陸大宮土木事務所による一般県道静常陸大宮線道路整備事業に伴って実施した、那珂市下大賀遺跡の調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、古墳時代と奈良・平安時代の竪穴建物跡や中世以降の方形竪穴遺構などが確認できました。また、古墳時代中期の竪穴建物跡からは鉄剣が出土しました。古墳に副葬されることが多い鉄剣が、竪穴建物跡から出土したことが何を意味しているのかを考えなければなりません。これらの成果は、当地域の社会の成り立ちや歴史を知る上での貴重な資料となります。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として、広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県常陸大宮土木事務所に対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、那珂市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和7年1月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 森 作 宜 民

例 言

- 1 本書は、茨城県常陸大宮土木事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が令和4年度に調査を実施した、茨城県那珂市下大賀字静賀1945番地ほかに所在する下大賀遺跡の調査報告書である。
- 2 調査期間と整理期間は以下のとおりである。
調査 令和4年4月1日～10月31日
整理 令和6年4月1日～10月31日
- 3 調査は、調査課長駒沢悦郎のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 塙 厚宣
次席調査員 柳瀬 彬 令和4年8月1日～10月31日
調査員 皆川貴之
調査員 松田俊太 令和4年4月1日～7月31日
- 4 整理と本書の執筆・編集は、整理課長櫻井完介のもと、嘱託調査員高田和宏が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、鉄剣については、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 副主幹 内山敏行氏に御指導いただいた。金属製品の保存処理については、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 6 当遺跡の出土遺物と実測図・写真などは、茨城県埋蔵文化財センターで保管されている。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 57240 \text{ m}$ 、 $Y = + 52360 \text{ m}$ の交点を基準点 (I A 1a1) とした。なお、この原点は、世界測地系 (測地成果 2011) による基準点である。

この基準点を基に県遺跡地図 (2022) に基づく遺跡範囲全てを包括するように東西・南北各々 400 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、40 m 四方の中調査区を設定した。さらに、この中調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、ローマ数字を用い、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ・・・と呼称し、中調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A、B、C・・・、西から東へ 1、2、3・・・とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a、b、c・・・j、西から東へ 1、2、3、・・・0 と小文字を付し、名称は、大調査区・中調査区の名称を冠して「I A 1 a 1 区」のように呼称した。

- 2 実測図、遺構・遺物一覧などで使用した記号は、次のとおりである。

遺構 HT - 方形堅穴遺構 P - ビット PG - ビット群 SA - 柱穴列 SB - 掘立柱建物跡
SD - 溝跡 SE - 井戸跡 SI - 堅穴建物跡 SK - 土坑
土層 K - 撹乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は、原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩・施釉・被熱痕		炉・火床面・黒色処理・磨痕
	竈部材・粘土範囲		柱痕跡・柱穴硬化部分
	須臾器断面		凝灰質泥岩
● 土器	○ 土製品	□ 石器・石製品	△ 金属製品
----- 硬化面			

- 4 土層解説と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物の量、粘性・締まりの表示は、次のとおりである。

ローム・ロームブロック 焼土・焼土ブロック 粘土・粘土ブロック

A - 多量 B - 中量 C - 少量 D - 微量 ○' - 極めて

サイズは「大・中・小・粒」で、炭化物については「材・物・粒」で表記した。

粘 - 粘性 締 - 締まり

A - 強い B - 普通 C - 弱い ○' - 極めて

- 5 遺構・遺物一覧の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m、cm、g で示した。なお、現存値は () を、推定値は [] を付して示した。

(2) 遺物番号は遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、遺物一覧、写真図版に記した番号と同一とした。

(3) 遺物一覧の備考欄は、残存率、写真図版番号とその他必要と思われる事項を記した。

- 6 堅穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸 (径) 方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した (例 N - 10° - E)。

- 7 本書の作成にあたり、遺構名を変更したものは、以下のとおりである。

変更 PG41 → PG46 PG42 → PG47 PG43 → PG48

SB26 → PG46 SB27 → PG48

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 位置と地形	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	8
第1節 調査の概要	8
第2節 基本層序	8
第3節 遺構と遺物	10
1 古墳時代の遺構と遺物	10
(1) 堅穴建物跡	10
(2) 土 坑	44
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	48
(1) 堅穴建物跡	48
(2) 掘立柱建物跡	73
(3) 井戸跡	74
(4) 溝 跡	79
3 中世以降の遺構と遺物	80
(1) 方形堅穴遺構	81
(2) 溝 跡	82
4 その他の遺構と遺物	84
(1) 掘立柱建物跡	84
(2) 方形堅穴遺構	89
(3) 井戸跡	97
(4) 土 坑	99
(5) 溝 跡	106
(6) 柱穴列	107
(7) ビット群	107
(8) 遺構外出土遺物	109
第4節 総 括	111

写真図版 PL 1 ~ PL22

抄 録

付 図

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

令和2年4月17日、茨城県常陸大宮土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道静常陸大宮線道路整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取扱いについて照会した。これを受けて、茨城県教育委員会は令和2年5月14日に現地踏査を、令和3年3月3日及び12日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。令和3年3月25日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県常陸大宮土木事務所長あてに、事業地内に下大賀遺跡が所在すること、その取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

令和3年7月6日、茨城県常陸大宮土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。令和3年9月1日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県常陸大宮土木事務所長あてに現状保存が困難であることから、記録保存のための調査が必要であると決定し、工事着手前に調査を実施するよう通知した。

令和4年2月7日、茨城県常陸大宮土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに一般県道静常陸大宮線整備事業に係る埋蔵文化財調査の実施について協議書を提出した。令和4年2月15日、茨城県教育委員会教育長は、発掘調査の範囲と面積などについて回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県常陸大宮土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、令和4年4月1日から10月31日まで調査を実施した。

第2節 調査経過

下大賀遺跡の調査は、令和4年4月1日から10月31日までの7か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月
調査準備 表土除去 遺構確認							
遺構調査							
遺物洗浄 写真整理							
補足調査 撤 収							

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

下大賀遺跡は、茨城県那珂市下大賀字静賀 1945 番地ほかに所在している。

那珂市は、県の中央部の北寄りに位置し、北西は常陸大宮市、北東は常陸太田市、東はひたちなか市、南は水戸市、西は城里町に接している。

地域の地形は、西から南部にかけて八溝山系から延びる標高 90 m 前後の瓜連丘陵、中央部には那珂台地、北部には久慈川によって形成された額田段丘、久慈川沿いには沖積低地が広がっており、当遺跡は那珂台地の北部に位置している。那珂台地の地質は、更新世後期の見和層とこれを覆う茨城粘土層で構成され、その上に堆積している関東ローム層は、瓜連丘陵、那珂台地と縁辺部の段丘面を厚さ 2 ～ 3 m で広く覆っている。この中には 20 ～ 30 cm の鹿沼軽石層を挟んでいるのが特徴である¹⁾。

当遺跡は、市域北部を東流する久慈川と玉川が合流する地点から西へ約 2 km の標高 40 ～ 45 m の台地上に立地している。台地は、那珂市と常陸大宮市が接する北西側の境界付近から始まり、瓜連丘陵と並行して緩やかに傾斜しながら南東側に広がり、中央部から東側にかけて広がっている。また、北側の台地縁辺部は急な崖地形になっており、低地との比高差は約 25 m である。遺跡の調査前の現況は、畑地と宅地である。

第2節 歴史的環境

下大賀遺跡(①)が所在する瓜連地域は、旧石器時代から近世までの遺跡が多数分布している。ここでは当該地域の主な遺跡を時代ごとに概観する²⁾。

旧石器時代の遺跡は、当遺跡周辺では鹿島台遺跡(23)で確認されている。また、東側の旧那珂町地域では、額田大宮遺跡や森戸遺跡、西組遺跡、北坪遺跡、八石遺跡(29)、飛内遺跡(32)などが確認されている。なかでも額田大宮遺跡では、発掘調査によって、細石刃や彫刻刀形石器、スクレイパーなどの良好な資料が出土しており、後期旧石器細石刃文化の最終末期の遺跡として注目される³⁾。森戸遺跡でも、チョッパーや削器、掻器、石核、剥片などが出土している⁴⁾。

縄文時代の遺跡は、大塚遺跡、鹿島台遺跡、石井戸遺跡などから早期の戸田下層式や子母口式の土器が、南酒井塙遺跡からは前期中頃の黒浜式期の遺構や土器が、坪井上遺跡(11)からは中期の加曽利E式、谷津向遺跡(26)からは中期の加曽利E式や大木 8a・8b 式、後期の堀之内式の土器が出土している⁵⁾。その他にも権現下遺跡(40)、野田遺跡(41)、西室家遺跡(42)、辻後遺跡(44)、原前遺跡、石尊宮遺跡、寄居B遺跡、下新地B遺跡、地天館跡などから縄文土器が採集されている⁶⁾。特に、大塚遺跡から出土した子母口式の土器は、当地域で最も古いものとされている⁷⁾。このように瓜連地域の縄文時代の集落は、玉川と久慈川が合流する地点の右岸台地上の縁辺部を中心に分布している⁸⁾。

弥生時代の遺跡は、下大賀遺跡⁹⁾、瓜連遺跡(21)、十林寺遺跡、大塚遺跡¹⁰⁾、鹿島遺跡、海後遺跡などから後期の東中根式や十王台式土器などが出土している。また、瓜連遺跡では後期の堅穴建物跡が7棟確認されている¹¹⁾。また、常陸大宮市の久慈川沿いにも小祝後田B遺跡、梶巾遺跡、坪井上遺跡、上岩瀬富士山遺跡(13)、棟塚遺跡、鷹巣A追跡などが確認されている¹²⁾。

古墳時代の遺跡は、十林寺古墳群〈2〉、新宿古墳群〈3〉が玉川右岸台地上に、大塚古墳〈22〉、鹿島台古墳群などが久慈川に面する台地北縁部に分布している¹³⁰。十林寺古墳群は当遺跡の北東端に位置し、3基の古墳が確認されている¹⁴⁰。新宿古墳群は、当遺跡の西端に所在する8基からなる古墳群であったが、現在は第5号墳の権現塚古墳とその南側に点在する4基の古墳が残存するのみである¹⁵⁰。集落跡は調査によって、水戸海道遺跡〈43〉で前期から後期にかけての堅穴建物跡8棟¹⁶⁰が確認されている。当遺跡と同様に久慈川流域に位置する森戸遺跡では、前期に築造された居館跡（堀）や前期から後期にかけての堅穴建物跡が83棟確認されている。居館跡は、祭祀的性格をもつ地方の部族首長クラスのものであった可能性があると報告されている¹⁷⁰。当遺跡では、平成24年度から令和元年度の当財団による発掘調査で、前期から後期にかけての堅穴建物跡24棟と前期の方形周溝墓4基が報告されている¹⁸⁰。

奈良・平安時代の集落跡は、鹿島台遺跡で堅穴建物跡11棟¹⁹⁰、権現下遺跡で堅穴建物跡27棟²⁰⁰、西坪井遺跡（旧下村田遺跡）〈12〉で堅穴建物跡17棟が確認されている²¹⁰。特徴的な出土遺物としては、権現下遺跡から鉄製紡錘車と、紡輪部の上面に鋸歯文が線刻された滑石製紡錘車をはじめ、「□東日」「太倉」「東一」「餅」「田」「子栗」「羊」などの墨書土器12点が出土している²²⁰。鹿島台遺跡では、「寺」「高月郷」「高」などの墨書土器9点が出土しており、「寺」の墨書土器から私度僧や村落内寺院が存在した可能性が指摘されている²³⁰。また、「高月郷」の墨書土器は、『倭名類聚抄』では「筈月」を「高月」とし²⁴⁰、『新編常陸国誌』では「蜜月」の誤写として「蜜月ヲ以テ名トスルモノハ、即水城ノ意」としており²⁵⁰、水城は現在の日立市水木にあたることから、倭文郷と高月（蜜月）郷の交流がうかがわれる資料である²⁶⁰。なお、『常陸国風土記』久慈郡の条に「郡西□里静織里、上古之時、織綾之機未在人知、平時此村初織、因名、北有小水、丹石交錯、色似編碧、火□鑽尤好、故以号玉川」と記載されており、静織の里、すなわち倭文郷に比定されている。当遺跡の北側を東流する玉川は瑠璃が産出されることで知られており、倭文部や玉造部などの専業集団との関係も興味深い²⁷⁰。常陸大宮市上村田小中遺跡では、石製・土製紡錘車や「中子」「日□田（屋）」「子子」「口□田」「千万」「六万」「万合」「丈」「曹」などの墨書土器が34点出土している。「丈」の焼印も出土しており、印面の大きさから牛馬などに押すための焼印と考えられている²⁸⁰。現在は常陸太田市栗谷町に所在し、久慈郡家に比定されている長者屋敷遺跡あたりが田後駅とされているが²⁹⁰、『増補大日本地名辞書』では、那珂市下大賀や静、常陸大宮市下村田付近が田後駅にあたるとしており³⁰⁰、焼印との関連性もうかがえる。平成24年度から令和元年度の当財団による発掘調査では、「馬」「□長」「馬長」「永」「心月」「永富来」「前子家」「徳」「大□家」「仲家」などと墨書された土器167点が出土している³¹⁰。さらに、平成29年度に那珂市教育委員会によって行われた発掘調査では、「東」「倭文田長」などと墨書された土器も出土しており、注目される遺跡である³²⁰。

南北朝時代になると、楠木正成の代官として遣わされた楠木正家が常陸の南朝方拠点として瓜連城を築き、北朝方の佐佐竹氏の軍勢と久慈川を挟んで対峙した。瓜連城跡は現在の常福寺境内を本丸とし、旧町城を含む490,000㎡の規模を誇っていた。現在も土器や内堀が残っている³³⁰。瓜連城落城後、丁実上人が草地山蓮華院常福寺を開山し、二世了尊上人によって現在の地に常福寺が再建され、佐竹氏と江戸氏の保護を受けて発展し、江戸期には徳川家康から百石の寺領が与えられ、早くから檀林として格付けされた。寛永十二（1635）年には、当寺は常陸国の浄土宗の総本山となり、近隣の人々より厚い信仰を受け現在に至っている³⁴⁰。

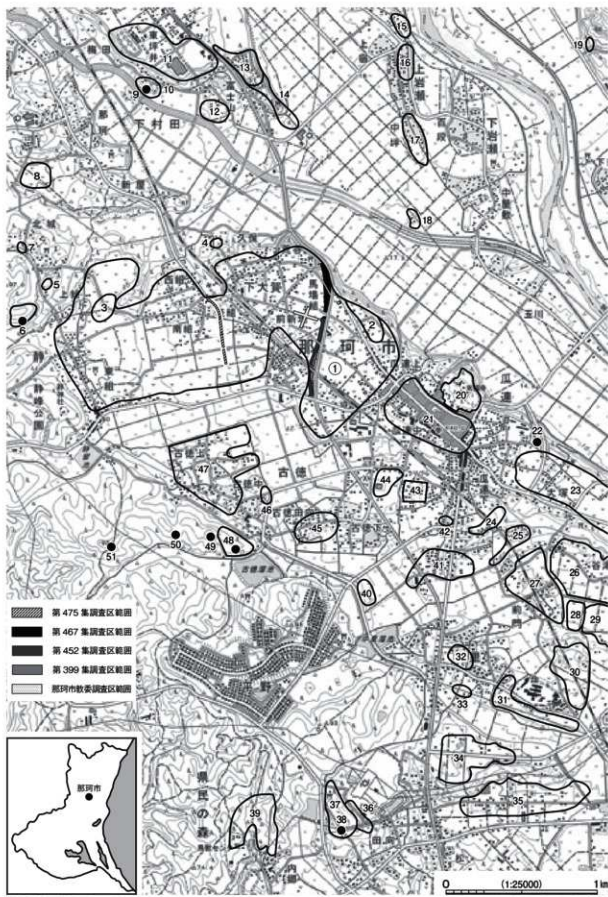
※本章は、既刊の茨城県教育財団調査報告第467集ほかを基にし、加除修正した。

註

- 1) a 大山年次監修 1977 年『茨城県 地質のガイド』コロナ社
b 日本の地質 2007 年『関東地方』編集委員会『日本の地質 3 関東地方』共立出版株式会社
- 2) 第 1 表と第 1 図は、茨城県教育委員会刊行の『茨城県道跡地図』などを参考に作成した。
茨城県教育庁文化課編 2001 年『茨城県道跡地図』茨城県教育委員会
- 3) 川崎純徳ほか 1978 年『額田大宮道跡』那珂町史編さん委員会
- 4) 加藤雅美ほか 1990 年『一般国道 349 号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 北郷 C 道跡・森戸道跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 55 集
- 5) 千種重樹 2000 年『山王原道跡 県営那珂北部畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』那珂町教育委員会
- 6) 瓜連町史編さん委員会 1985 年『瓜連町史』瓜連町
- 7) 註 6 に同じ
- 8) 那珂市教育委員会 2017 年『発掘調査で蘇る古代の那珂市』那珂市史編さん委員会
- 9) 横倉要次 2001 年『那珂郡瓜連町下大賀道跡採集の弥生土器について』茨城県考古学協会誌 第 13 号
- 10) 横倉要次 1995 年『那珂郡瓜連町大塚道跡採集の弥生土器と紡錘車・石器について』婆良岐考古 第 17 号
- 11) 加藤雅美ほか 1996 年『瓜連城跡地内埋蔵文化財発掘調査報告書 No. 1 ～ No. 4 地点』瓜連町教育委員会
- 12) 渡邊浩実 2006 年『上岩瀬富士山道跡 17 国補道第 17 - 03 - 068 - 0 - 053 号埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第 260 集
- 13) 宮崎剛 2012 年『鹿島台道跡 保土通道跡 都市計画道路平野杉本線道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第 355 集
- 14) 藤原均ほか 2007 年『茨城県那珂市十林寺古墳群第 1 号墳・下大賀道跡内埋蔵文化財調査報告書』那珂市教育委員会・常総考古学研究所
- 15) 註 9 に同じ
- 16) 那珂市教育委員会 2008 年『水戸海道道跡』那珂市埋蔵文化財調査報告 第 1 集
- 17) 註 4 に同じ
- 18) 野田良直ほか 2023 年『下大賀道跡 3 一般国道 118 号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』茨城県教育財団文化財調査報告第 467 集 ほか茨城県教育財団文化財報告第 399 集・第 452 集を参照された。
- 19) 註 8 に同じ
- 20) 藤原均 2002 年『茨城県那珂郡瓜連町権現下道跡調査報告書』瓜連町教育委員会
- 21) 荒井保雄 1996 年『一般河川玉川改修工事地内埋蔵文化財調査報告書 下村田道跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 110 集
- 22) 註 13 に同じ
- 23) 註 13 に同じ
- 24) 茨城県立歴史館編 1968 年『茨城県史料 古代編』茨城県
- 25) 註 24 に同じ
- 26) 註 13 に同じ
- 27) 註 6 に同じ
- 28) 大宮町教育委員会 1988 年『上村田小中道跡』大宮町教育委員会
- 29) 古代交通研究会 2004 年『日本古代道路辞典』八木書店
- 30) 吉田東伍 1970 年『増補大日本地名辞書』第 6 巻 坂東 富山房
- 31) 註 18 に同じ
- 32) 平石尚和ほか 2018 年『下大賀道跡Ⅱ』那珂市文化財調査報告
- 33) 註 6 に同じ
- 34) 註 6 に同じ

第1表 下大賀遺跡周辺遺跡一覧（茨城県遺跡地図一部改編）

番号	遺 跡 名	時 代						番号	遺 跡 名	時 代							
		旧 石 器	縄 文 器	弥 生 墳	古 墳	奈良・ 平安	鎌倉・ 桃山			江 戸	旧 石 器	縄 文 器	弥 生 墳	古 墳	奈良・ 平安	鎌倉・ 桃山	江 戸
①	下大賀遺跡	○	○	○	○	○	○	○	27	高 後 遺 跡		○		○	○	○	
2	十林寺古墳群					○			28	榎戸遺跡					○		
3	新宿古墳群					○			29	八石遺跡	○	○		○	○		
4	久保遺跡						○	○	30	孫目遺跡		○		○	○	○	
5	滝前遺跡		○						31	前谷津遺跡		○			○	○	
6	城菩提城跡							○	32	飛内遺跡	○	○		○	○		
7	上坪遺跡					○			33	十文字遺跡					○		
8	堂山A遺跡			○	○	○			34	戸崎井尻遺跡					○	○	
9	念仏塚							○	35	戸崎木戸遺跡		○		○	○		
10	念仏塚遺跡				○				36	台久保遺跡	○	○		○	○	○	
11	坪井上遺跡		○	○	○	○			37	戸崎鹿島神社前遺跡		○		○	○	○	
12	西坪井遺跡 (田下村田遺跡)			○	○	○			38	戸崎鹿島館跡						○	
13	上岩瀬富士山遺跡			○	○	○			39	椿遺跡		○			○		
14	富士山古墳群				○				40	櫛現下遺跡		○			○		
15	川岸遺跡					○			41	野田遺跡		○		○	○	○	○
16	岩瀬城跡		○			○	○		42	西室家遺跡		○		○	○	○	
17	上岩瀬中坪遺跡				○	○			43	水戸海道遺跡		○	○	○	○	○	
18	本宮遺跡		○		○	○			44	辻後遺跡		○		○	○	○	○
19	二階穴（横穴）				○				45	田向前遺跡		○		○	○		
20	瓜連城跡						○		46	新屋遺跡					○		○
21	瓜連遺跡		○	○	○	○	○	○	47	中坪遺跡		○			○	○	○
22	大塚古墳				○				48	古徳城跡						○	
23	鹿島台遺跡	○	○	○	○	○	○	○	49	小屋塚							○
24	保土通遺跡				○		○		50	前長田塚群							○
25	熊ノ堂遺跡		○	○		○	○		51	中山塚							○
26	谷津向遺跡		○		○	○											





第2図 下大賀遺跡調査区設定図(郡珂市都市計画図2,500分の1に加筆)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

下大賀遺跡は、那珂市の北部に位置し、玉川右岸の標高約44mの台地上に立地している。調査面積は7,044㎡で、調査前の現況は畑地と宅地である。

調査の結果、竪穴建物跡24棟（古墳時代10、平安時代14）、掘立柱建物跡5棟（平安時代1、時期不明4）、方形竪穴遺構15基（中世以降2、時期不明13）、井戸跡7基（奈良・平安時代3、時期不明4）、土坑52基（古墳時代4、時期不明48）、溝跡6条（平安時代2、中世以降1、時期不明3）、柱穴列1条（時期不明）、ピット群3か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に58箱出土している。主な遺物は、弥生土器（広口壺）、土師器（坏・高台付坏・碗・高台付皿・埴・高坏・鉢・壺・甕・瓶・ミニチュア土器・手捏土器）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・甕・甕）、陶器（碗・皿・甕）、土師質土器（皿・火鉢）、土製品（管状土鍾・紡錘車）、石器（石鎌・磨石・敲石・紡錘車・砥石・台石）、石製品（管玉・有孔門板・剣形模造品・支脚）、金属製品（鉄剣・刀子・鎌・火打金）、銭貨、自然遺物（人骨）などである。

第2節 基本層序

調査区が南北に長いので、調査区北部の平坦面（ⅪI 6 c3区）にテストピット1、中央部の平坦面（ⅪC 7 c1区）にテストピット2、調査区南部の平坦面（ⅪD 6 a0区）にテストピット3を設定した。

第I層は、黒褐色を呈する表土層である。層厚は22～74cmである。

第II層は、黒褐色を呈する旧表土である。層厚は7～26cmである。

第Ⅲa層は、明黄褐色を呈する漸移層で、今市・七本桜軽石粒子を中量含み、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は10～20cmである。

第Ⅲb層は、暗褐色を呈する今市・七本桜軽石層への漸移層で、七本桜軽石粒子を多量に含み、粘性・締まりとも普通である。層厚は6～17cmである。

第IV層は、にぶい黄褐色を呈する七本桜軽石層で、今市軽石粒子を微量に含み、粘性は弱く、締まりは強い。層厚は10～18cmである。

第V層は、明褐色を呈する今市軽石層で、七本桜軽石粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりは強い。層厚は13～33cmである。

第VI層は、にぶい黄褐色を呈するローム層への漸移層で、七本桜軽石粒子を少量、今市軽石粒子を微量に含み、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は3～30cmである。

第Ⅶa層は、明黄褐色を呈するソフトローム層で、黒色粒子・赤色粒子を微量に含み、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は6～28cmである。

第Ⅶb層は、にぶい黄褐色を呈するソフトローム層で、黒色粒子を微量、赤色粒子を極めて微量に含み、粘性・締まりとも強い。層厚は8～26cmである。

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

堅穴建物跡 10 棟、土坑 4 基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 堅穴建物跡

第 253 号堅穴建物跡（第 4・5 図 第 2 表 PL 2・12）

位置 A 区中央部の XI H 5b6 区、標高 45 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 44 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西部が調査区域外のため、確認できた規模は北西・南東軸 8.70 m、北東・南西軸 3.70 m である。方形か長方形と推定できる。主軸方向は N-25°-W である。壁は高さ 50cm ほどで、ほぼ直立している。

床 確認できた範囲は平坦で、壁際を除いて硬化している。壁溝は、確認できた壁下を全周している。

ピット 5 か所。P 1～P 5 は、長径 20～63cm、短径 18～52cm、深さ 8～36cm で、性格は不明である。

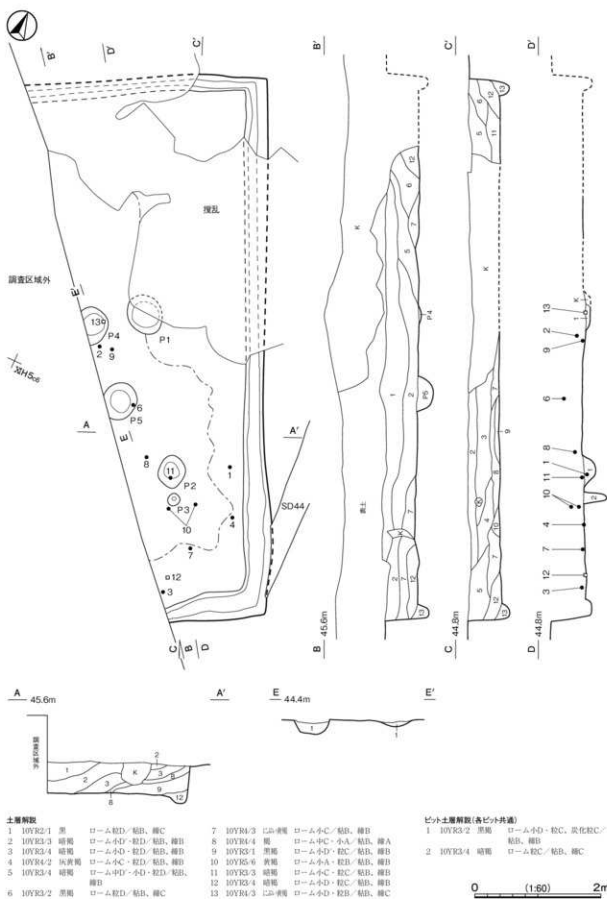
覆土 13 層に分類できる。第 1～6 層は、黒色土や黒褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第 7～13 層は、ロームブロックを含んでいることや不規則な堆積状況を呈することから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 456 点（坏 19、碗 73、高坏 5、鉢 1、甕 357、瓶 1）、石器 1 点（凝灰質泥岩製砥石）、石製品 1 点（滑石製剣形模造品）、金属製品 1 点（鎌）が出土している。ほかに混入した縄文土器片 3 点、弥生土器片 16 点、陶器片 5 点、礫 2 点が出土している。遺物は主に南東部から中央部にかけて散在した状態で出土している。1 は南東部、4・12 は南東コーナー寄り、9 は中央部の床面から、それぞれ出土している。11 は横位で P 2 の上面、13 は P 4 の上面から、それぞれ出土している。3 は南東コーナー寄り、14 は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。

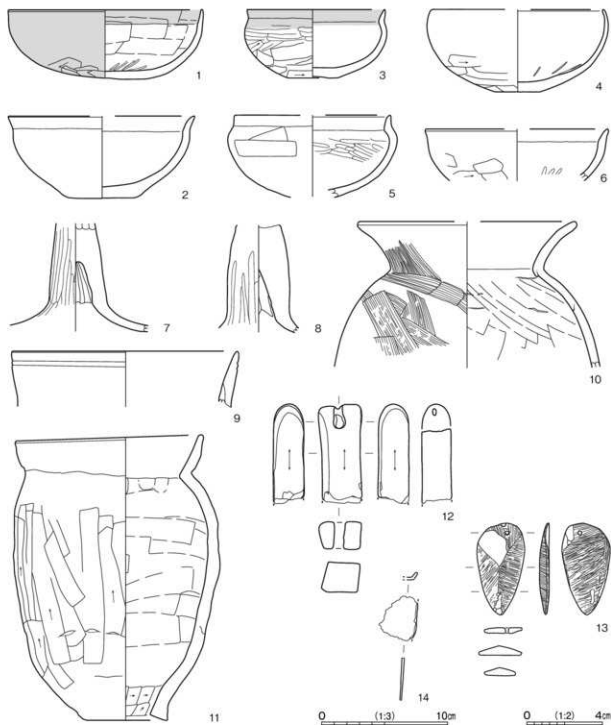
所見 時期は、出土土器から 5 世紀中葉と考えられる。

第 2 表 第 253 号堅穴建物跡出土遺物一覧（第 5 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	153	5.5	—	長石・石英・針状物質	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ 内面ヘラナデ 赤彩 体部外面下地へう張り 赤彩 内面ヘラナデ	床面	80% PL12
2	土師器	坏	[148]	6.5	5.5	長石・石英・赤色砂子・細礫	にぶい黄緑	普通	口縁部横ナデ 体部内・外面準直	覆土下層	50%
3	土師器	碗	109	5.5	3.9	長石・石英・赤色砂子・細礫	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 赤彩 体部外面上平へう磨き 下平へう張り 内面ナデ	覆土下層	96% PL12
4	土師器	碗	[135]	6.5	3.4	長石・石英・針状物質・細礫	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面ヘラナデ	床面	80% PL12
5	土師器	碗	[124]	(6.5)	—	長石・石英・細礫	にぶい黄緑	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へう磨き	覆土下層	30%
6	土師器	碗	[145]	(4.1)	—	長石・石英・針状物質	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へう磨き	覆土中層	10%
7	土師器	高坏	—	(8.6)	—	長石・石英	橙	普通	脚部外面へう磨き 内面ナデ	覆土下層	30%
8	土師器	高坏	—	(8.5)	—	長石・石英	明赤褐	普通	脚部外面へう磨き 内面ナデ	覆土下層	20%
9	土師器	鉢	178	(4.4)	—	長石・石英・細礫	明赤褐	普通	外面横位沈澱文	床面	10%
10	土師器	甕	(170)	(11.6)	—	長石・石英・赤色砂子	灰褐	普通	口縁部ナデ 頸部・体部外面へう張り 内面ナデ 輪模みね	覆土下層～中層	20%
11	土師器	瓶	147	22.7	6.7	長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面ヘラナデ 下地へう張り 輪模みね 煎直模	P 2 覆土上面	96% PL12



第4図 第253号堅穴建物跡実測図



第5図 第253号竪穴建物跡出土遺物実測図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	紙石	(7.9)	3.4	2.5	(97.75)	凝灰質泥岩	凝灰石 紙面3面 孔0.8～1.0cm	床面	PL12
13	銅形模造品	4.9	2.6	0.5	8.42	滑石	全面研磨調整 片面縞 基部穿孔1か所 一方向からの穿孔	下4層土上面	PL12
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
14	鎌	(3.1)	(3.5)	(0.2)	(4.20)	鉄	端部L字状に屈折	覆土下層	

第254号竪穴建物跡 (第6～11図 第3表 PL 2・12・13)

位置 A区中央部のXH5d8区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西部が調査区域外のため、確認できた規模は北西・南東軸8.76m、北東・南西軸6.45mである。方形と推定できる。主軸方向はN-37°-Wである。壁は高さ37～66cmで、ほぼ直立している。

床 確認できた範囲は平坦で、壁際を除いて硬化している。壁溝は、確認できた壁下を全周している。壁溝から主柱穴に向かって延びる深さ15～20cmで断面形がU字状の間仕切り溝を、北東壁側で3条、南東壁側で1条確認した。

炉 中央北寄りに位置している。長径88cm、短径46cmの不整楕円形をした地床炉で、床面からの深さ5cmほどの皿状を呈している。底面は赤変硬化している。

ピット 15か所。P1～P4は長径45～55cm、短径30～50cm、深さ6～85cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5～P10は長径32～74cm、短径30～70cm、深さ10～54cmで、補助の壁柱穴と考えられる。P11～P15は不明である。

貯蔵穴 南東壁際に位置し、周囲が床面より5cmほど低くなっている。長軸93cm、短軸73cmの隅丸方形で、深さは68cmである。底面は皿状を呈し、壁は外傾している。5層に分層でき、いずれの層も含有物の少ない暗褐色土や黒褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

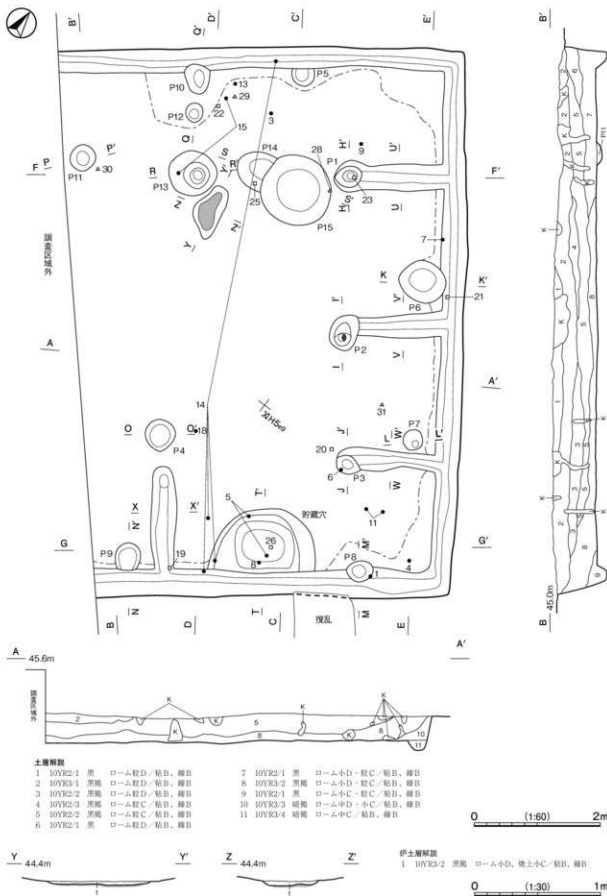
覆土 11層に分層できる。いずれの層も黒色土や黒褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片1864点(坏7、碗337、埴4、高坏11、壺14、甕1,489、甌2)、須恵器片2点(甕)、石器5点(砂岩製敲石1、砥石3〔砂岩製2、凝灰質泥岩製1〕、砂岩製台石1)、石製品4点(滑石製管玉・有孔円板、凝灰質泥岩製刺形模造品、滑石製模造品)、金属製品4点(刀子、鏃、鏃、不明工具)、礫11点(砂岩5、凝灰質泥岩3、石英2、滑石1)が出土している。ほかに混入した縄文土器片10点、弥生土器片66点、須恵器片1点、陶器片2点が出土している。遺物の大半は、壁際から出土している。1は逆位で東コーナー部、3は正位で北西壁寄り、20は東コーナー寄り、29は北西壁寄り、31は北東壁寄りの床面から、それぞれ出土している。6は横位でP3の覆土上層から、8は斜位で貯蔵穴の覆土上層から、19は間仕切り溝、21は壁溝、23はP1の上面から、それぞれ出土している。4は東コーナー部の床面から出土した破片と南部の覆土下層から出土した破片が、5は貯蔵穴の覆土下層と上層から出土した破片が、14は北西壁寄りの覆土下層から出土した破片と南東壁寄りの覆土下層から出土した破片が、それぞれ接合したものである。

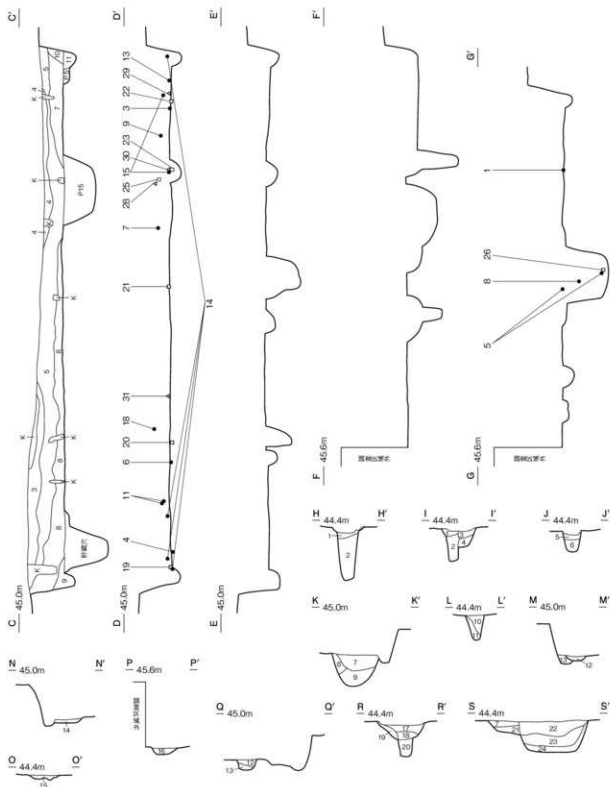
所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。床面から磨痕や敲打痕のある石器や未製品の刺形模造品が出土しており、石製品の製作を行っていた可能性がある。

第3表 第254号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第8～11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	102	43	29	長石・石英・赤色砂子・細礫	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 赤彩 体部外面下端へう張り	床面	100% PL12
2	土師器	坏	137	51	29	長石・石英・赤色砂子・赤色砂子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面下端へう張り	覆土下層・中層	70% PL12
3	土師器	坏	142	57	43	長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 赤彩 体部外面下端へう張り	床面	80%
4	土師器	坏	[148]	66	-	長石・石英・細礫	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面下端へう張り 内面へう張り	床面 覆土下層	80% PL12
5	土師器	坏	[170]	67	43	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面下端へう張り 内面摩滅	貯蔵穴 覆土下層・上層	60%
6	土師器	埴	74	128	39	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 外面へう張りナデ 体部外面へう張り 体部下端外面からの穿孔2カ所	P3 覆土上層	95% PL12
7	土師器	埴	-	(6.5)	-	長石・石英・針状物質	にぶい赤褐	普通	体部外面へう張り 内面へう張り 輪軸みね	覆土中層	10%



第6図 第254号堅穴建物跡実測図(1)



ピット1~3・6~15土層解説

- 1 10YR3-3 暗褐色 コーーム主床/粘土、緑B
- 2 10YR4-4 黒 コーーム主床/粘土、緑A
- 3 10YR3-3 暗褐色 コーーム中C・小C/粘土、緑B
- 4 10YR4-4 黒 コーーム中C/粘土、緑B
- 5 10YR4-4 黒 コーーム大B/粘土、緑B
- 6 10YR4-6 黒 コーーム大A/粘土、緑B
- 7 10YR3-2 黒褐色 コーーム中C/粘土、緑B
- 8 10YR3-3 暗褐色 コーーム中C・粒D/粘土、緑B

- 9 10YR3-3 暗褐色 コーーム小C・粒D/粘土、緑B
- 10 10YR2-1 黒 コーーム小C・粒C/粘土、緑B
- 11 10YR2-1 黒 コーーム小C・粒D/粘土、緑B
- 12 10YR3-3 暗褐色 コーーム小C/粘土、緑B
- 13 10YR4-4 黒 コーーム小D/粘土、緑B
- 14 10YR2-2 黒褐色 コーーム小C/粘土、緑B
- 15 10YR3-3 暗褐色 コーーム粒C/粘土、緑B
- 16 10YR3-3 暗褐色 コーーム粒D/粘土、緑B

- 17 10YR3-2 黒褐色 コーーム小D・粒C/粘土、緑B
- 18 10YR3-4 暗褐色 コーーム小D・粒D/粘土、緑B
- 19 10YR3-2 黒褐色 コーーム中C/粘土、緑B
- 20 10YR3-3 暗褐色 コーーム主床/粘土、緑C
- 21 10YR3-1 黒褐色 コーーム小D/粘土、緑B
- 22 10YR2-1 黒 コーーム粒D/粘土、緑B
- 23 10YR2-3 黒褐色 コーーム小D・粒C/粘土、緑B
- 24 10YR3-3 暗褐色 コーーム中D・小C/粘土、緑B

第7図 第254号堅穴建物跡実測図(2)



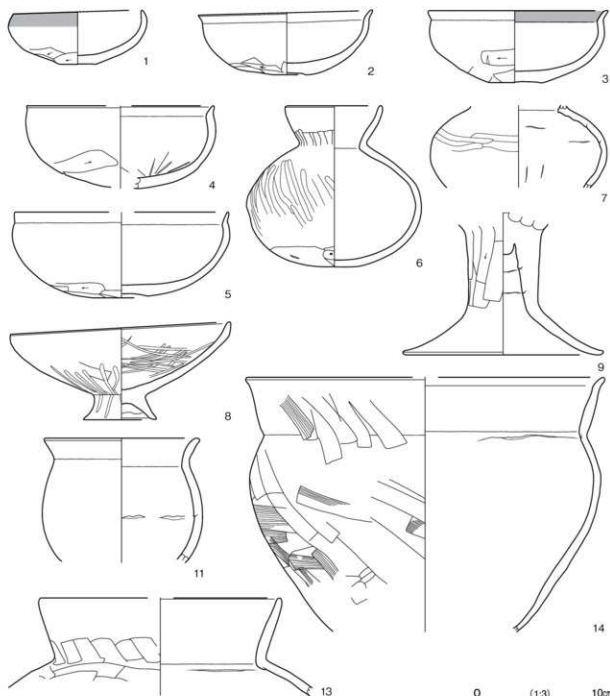
貯蔵穴土層解説

- 1 10YR3-3 暗褐色 ローム粒D/粘土、礫B
- 2 10YR2-2 黒褐色 ローム小D/粘土、礫B
- 3 10YR3-1 黒褐色 ローム中D・粒C/粘土、礫B
- 4 10YR3-2 黒褐色 ローム中D・小C/粘土、礫A
- 5 10YR3-2 黒褐色 ローム小D/粘土、礫B

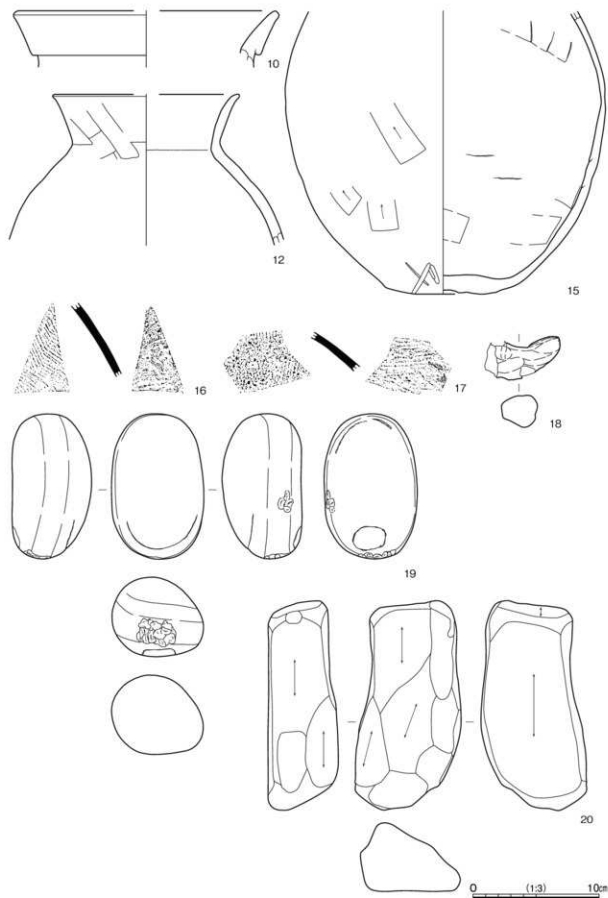
間仕切り溝土層解説

- 1 10YR3-3 暗褐色 ローム小D・粒C/粘土、礫B
- 2 10YR4-4 褐色 ローム中D/粘土、礫B
- 3 10YR3-3 暗褐色 ローム小D・粒D/粘土、礫B
- 4 10YR4-4 褐色 ローム主体、ローム大B、黒色土粒C/粘土、礫B
- 5 10YR3-3 暗褐色 ローム中C/粘土、礫B
- 6 10YR4-4 褐色 ローム大B/粘土、礫B
- 7 10YR3-2 黒褐色 ローム粒C/粘土、礫B
- 8 10YR3-3 暗褐色 ローム小D/粘土、礫B
- 9 10YR4-4 褐色 ローム小C/粘土、礫B

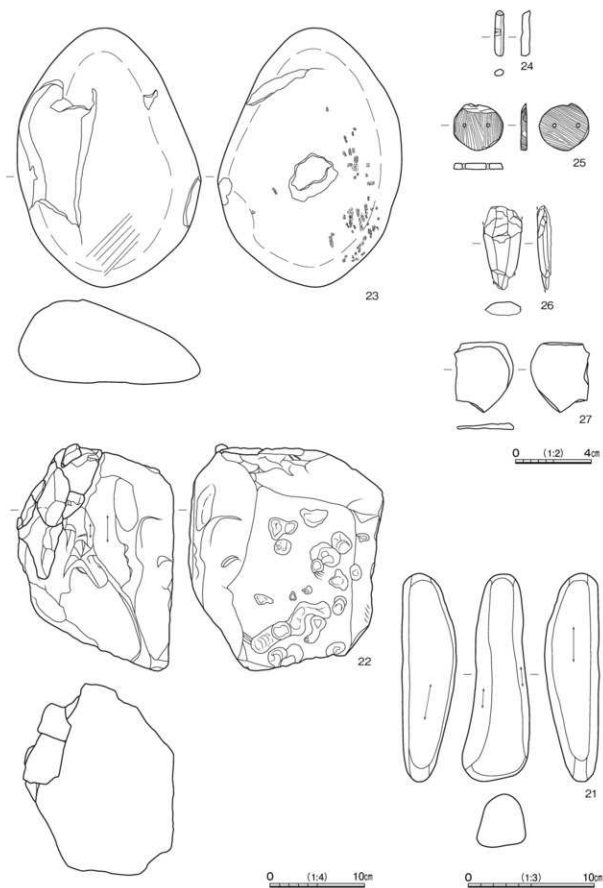
0 (1:60) 2m



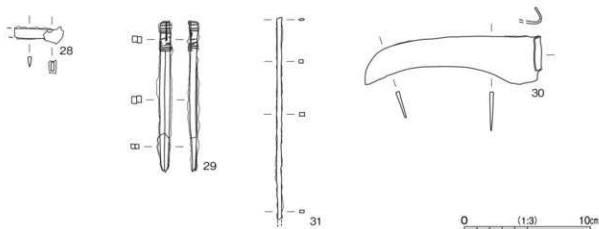
第8図 第254号堅穴建物跡・出土遺物実測図



第9图 第254号竖穴建物跡出土物実測图(1)



第10图 第254号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)



第 11 図 第 254 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (3)

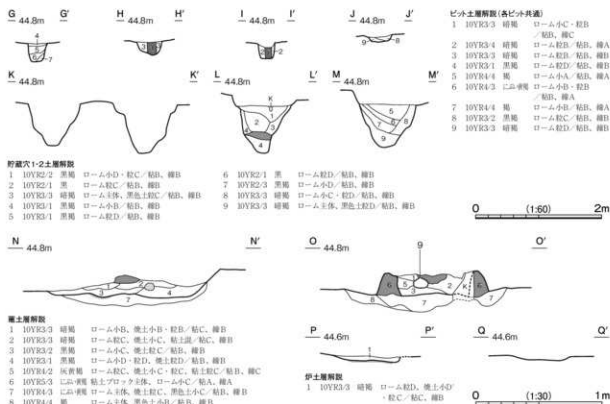
番号	種 別	器 種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
8	土器部	脚付杯	17.4	7.8	5.7	長石・石英・細砂	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ 杯部ヘラ磨き 脚部外面ヘラ磨	野藏穴 覆土上層	95% PL12
9	土器部	高杯	—	(11.3)	[159]	長石・石英・赤色砂子	明赤褐色	普通	脚部外面ヘラ磨り 輪轆み痕 ホゾによる接合	覆土中層	30%
10	土器部	壺	[20.4]	(4.5)	—	長石・石英	にぶい褐色	普通	折り返し口縁 横ナデ	覆土下層～中層	5%
11	土器部	壺	12.1	(9.9)	—	長石・石英・赤色砂子	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ 輪轆み痕	覆土下層	40%
12	土器部	壺	[14.7]	(12.0)	—	長石・石英・赤色砂子	にぶい褐色	普通	口縁部横ナデ 頭部外面ヘラナデ	覆土下層～中層	10%
13	土器部	壺	[19.0]	(7.8)	—	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ 頭部・体部外面ヘラナデ 内面ナデ	床面	10%
14	土器部	壺	[28.3]	(20.2)	—	長石・石英・細砂	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ 頭部・体部外面ハケ目 内面ナデ 輪轆み痕 外面塗付痕	覆土下層	40%
15	土器部	壺	—	(22.4)	9.0	長石・石英	褐色	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ 輪轆み痕	覆土下層～中層	30%
16	須恵器	壺	—	(5.8)	—	緻密	灰	良好	体部外面平行叩き 内面同心円状の当て具痕	覆土下層	5% TK216
17	須恵器	壺	—	(3.1)	—	緻密	灰	良好	体部外面平行叩き 内面同心円状の当て具痕 自然剥付痕	覆土中層～上層	5% TK216
18	土器部	瓶	—	(3.4)	—	長石・石英	明赤褐色	普通	把手部指頭痕	覆土中層	5%

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
19	敲石	11.5	7.3	6.3	807.93	砂岩	下端部敲打痕	開仕切り溝 上層	
20	砥石	16.6	8.4	5.6	1079.1	砥面 6 面		床面	
21	砥石	16.5	5.4	4.3	458.30	砂岩	砥面 2 面	磨溝 上層	
22	砥石	24.0	16.5	20.6	4810.6	凝灰質泥岩	砥面 1 面	床面	PL13
23	台石	27.5	19.5	8.9	(5840.0)	砂岩	両面磨痕 表面縦状痕 裏面敲打痕	P 1 上層	

番号	器 種	長さ	径	口径	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
24	管玉	2.4	0.5	—	0.95	滑石	未製品 孔なし	覆土上層	PL13

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
25	有孔円板	2.5	2.6	0.3	3.16	滑石	孔 2 か所 一方方向からの穿孔 両面・側面に研磨痕	覆土中層	PL13
26	胡形 模造品	(4.4)	(2.0)	(0.7)	(6.90)	凝灰質泥岩	未製品 表面磨	野藏穴 覆土下層	
27	石製 模造品	(3.8)	(3.1)	(0.4)	(5.27)	滑石	有孔円板未製品。	覆土下層	

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
28	刀子	(39)	(1.5)	(0.3～0.6)	(4.19)	鉄	両端欠損 基部本質残存	覆土中層	
29	鋸	11.9	1.0	0.9	28.77	鉄	断面長方形 2 本を糸状の繊維で結束	床面	PL13
30	鎌	14.0	3.9	0.3	46.48	鉄	曲刃 端部 L 字状に屈折	覆土下層	PL13
31	不明工具	(16.1)	0.4	0.3	(7.17)	鉄	断面長方形	床面	PL13



第13図 第255号竪穴建物跡実測図(2)

床 平坦で、貯蔵穴1・2の間から竈にかけて硬化している。西壁際の南部で、床面上に高さ10cmほどの平坦な高まりがあり、その上面は硬化している。壁溝は、北東コーナー部と南壁の中央部を除いて確認できた壁下を巡っている。

竈 北壁のやや東寄りに位置している。規模は焚口部から煙道部まで120cm、燃烧部幅は50cmである。竈は地山を10cmほど掘りくぼめ、第7・8層を埋土して整地している。袖部は粘土ブロック主体で、ロームブロックを含む第6層を積み上げ構築している。火床部は不整形を呈し、床面よりややくぼんでいる。火床面は第7層の上面で、赤変硬化している。煙道部は壁外に5cmほど張り出し、火床面から緩やかに立ち上がっている。

炉 中央部に位置している。長軸51cm、短軸45cmの不定形をした地床炉で、深さ3~5cmの皿状を呈している。底面は赤変硬化している。

ピット 4か所。P1~P3は長径30~42cm、短径27~31cm、深さ20~28cmで、配置から主柱穴と考えられる。覆土は第1層が柱痕跡、第2・3層が掘方埋土、第4~7層は柱抜き取り後の流入土である。P4は平坦な高まりを掘り込んでいる。性格は不明である。

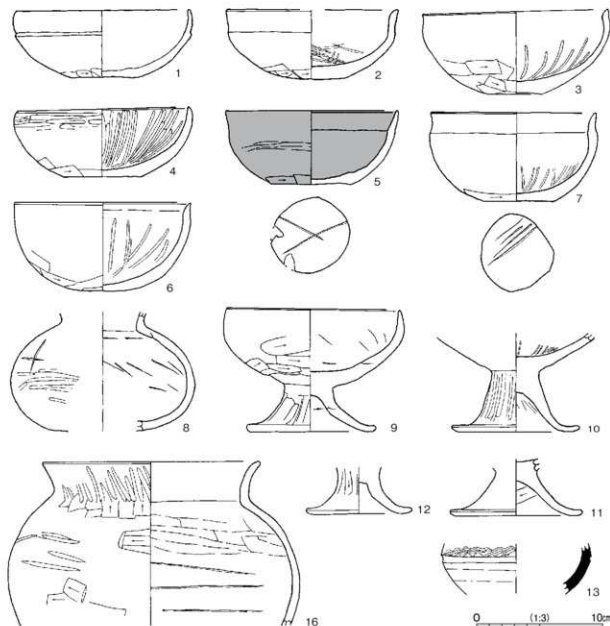
貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1・2ともに南壁際に位置している。貯蔵穴1は、長径100cm、短径89cmの楕円形で、深さは85cmである。覆土下層で、白色粘土の塊を確認した。貯蔵穴2は、長径90cm、短径85cmの円形で、深さは68cmである。いずれも底面は皿状を呈し、壁は中位に段を有して外傾している。貯蔵穴1・2の覆土中には、ローム主体の層があることから、人為堆積である。

覆土 8層に分層できる。ローム主体の層が不規則に堆積していることから、人為堆積である。

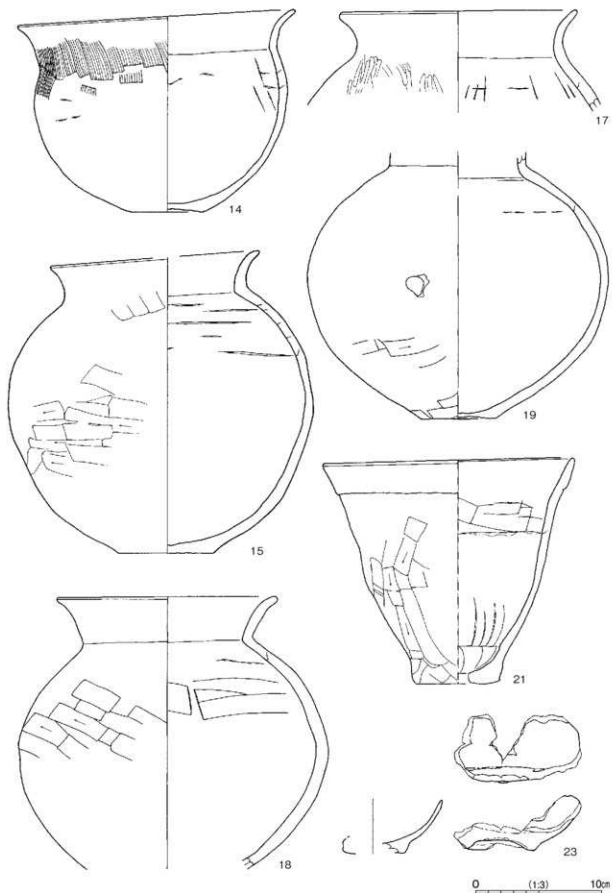
遺物出土状況 土師器片1,148点(環7、埴119、埴4、高坏19、壺11、甕963、瓶23、手捏土器2)、須恵器片1点(甕)、石器2点(砂岩製・凝灰質泥岩製砥石各1)、石製品1点(滑石製有孔円板)、焼成粘土塊13

点 (181.89 g)、礫3点 (砂岩2、瑪瑙1) が出土している。ほかに混入した縄文土器片5点、弥生土器片3点も出土している。遺物は主に北西部と南部の床面から覆土中層にかけて出土している。北西部から出土した遺物は破片が多く、本跡を埋め戻す過程で廃棄したものと考えられる。また、南部から出土している遺物は、床面から逆位で出土しており、廃絶時に遺棄したものと考えられる。2・7は南東コーナー寄りの覆土下層から、それぞれ正位で2の上に7が重なった状態で出土している。4・6は貯蔵穴1の覆土下層から、6の上に4が重なった状態で出土している。3は正位で北壁際、5は正位で北西コーナー寄りの覆土中層から、9は逆位で竈の覆土中層から、16は逆位で南東コーナー部の床面から、17は逆位で西壁際の平坦な高まり上面から、それぞれ出土している。14は斜位で貯蔵穴2の覆土中層から、19は斜位で南東コーナー部の床面から、21は斜位で底部を上にした状態で、南壁際の覆土下層から、それぞれ出土している。

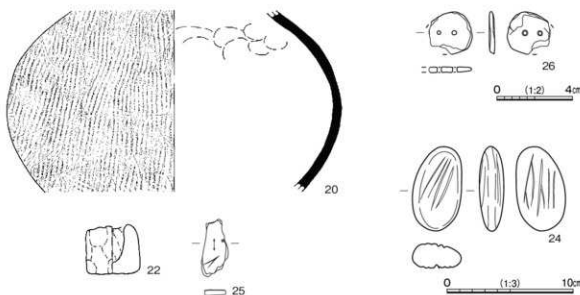
所見 時期は、出土土器から5世紀末葉から6世紀初頭と考えられる。炉と竈が併設されていることから、竈の導入期の建物跡と推定できる。



第14図 第255号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第15図 第255号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)



第 16 図 第 255 号堅穴建物跡出土遺物実測図 (3)

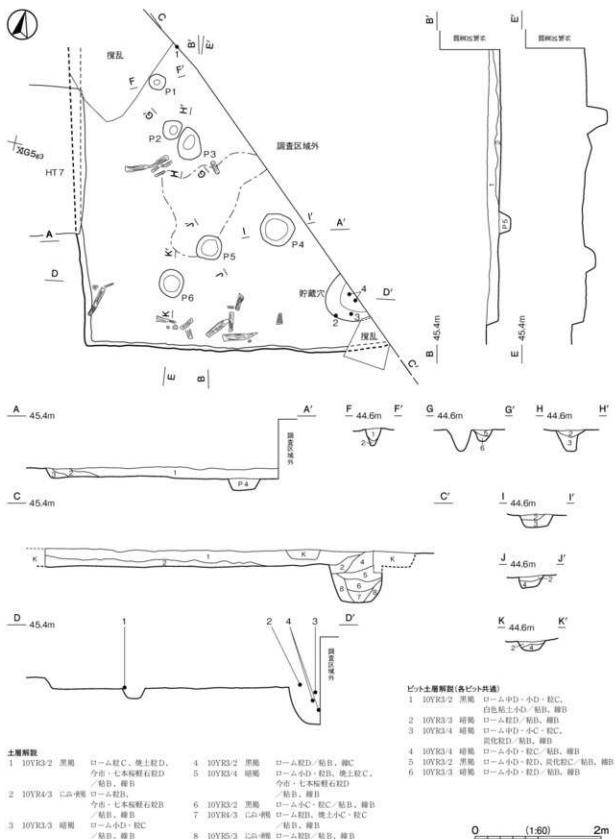
第 4 表 第 255 号堅穴建物跡出土遺物一覧 (第 14 ~ 16 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	137	5.3	5.3	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面下端へう張り	覆土下層	90% PL13
2	土師器	坏	[135]	5.5	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面下端へう張り 内面へう張り	覆土下層	60%
3	土師器	坏	14.5	6.8	4.1	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へう張り	覆土中層	90% PL13
4	土師器	坏	13.6	5.5	6.1	長石・石英	橙	普通	口縁部外面へう張り 体部外面下端へう張り	貯蔵穴1 覆土下層	90% PL13
5	土師器	坏	137	5.9	6.2	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう張り 下端へう張り 底部外面へう張り 工具による焼成面「X」字状の痕跡 赤彩 炭焼痕	覆土中層	90% PL13
6	土師器	碗	14.0	7.0	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面下平へう張り 内面へう張り	貯蔵穴1 覆土下層	100% PL13
7	土師器	碗	13.0	7.1	5.7	長石・石英・細砂	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面下端へう張り 内面へう張り 底部外面筋状の結晶痕	覆土下層	90% PL13
8	土師器	埴	-	(9.5)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面へう張り へう張りによる焼成面「+」字状の痕跡 内面へうナデ 輪積み痕	覆土下層	50%
9	土師器	高坏	137	9.8	10.3	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へうナデ 脚部外面へうナデ 輪積み痕	覆土中層	96% PL14
10	土師器	高坏	-	(7.9)	[10.2]	長石・石英	橙	普通	体部外面へうナデ 内面へう張り 脚部外面へう張り	覆土中層	40%
11	土師器	高坏	-	(4.6)	[10.4]	長石・石英	橙	普通	脚部内面へう張り	覆土下層	30%
12	土師器	高坏	-	(3.7)	[8.4]	長石・石英	明赤褐	普通	脚部外面へう張り 内面ナデ	北部覆土	20%
13	灰土器	甕	-	(4.0)	-	長石	灰	良好	縄文工具による成状文	覆土中層	5%
14	土師器	甕	21.8	16.1	5.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 頸部外面へう張り 体部内面ナデ 輪積み痕	貯蔵穴2 覆土下層	100% PL14
15	土師器	甕	[16.3]	24.0	7.5	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 頸部外面へうナデ 体部外面へう張り 内面へうナデ 輪積み痕	覆土下層	70%
16	土師器	甕	17.0	(13.0)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部へう張り 頸部外面へう張り 体部外面へう張り 内面へうナデ 輪積み痕	床面	40% PL14
17	土師器	甕	18.5	(8.0)	-	長石・石英・細砂	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へうナデ 輪積み痕	島状硬化面土	10%
18	土師器	甕	17.2	(21.6)	-	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へうナデ 輪積み痕	島状硬化面土	60% PL14
19	土師器	甕	-	(21.1)	6.0	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面へう張り 内面ナデ 体部外面からの穿孔1箇所 輪積み痕	床面	50%
20	灰土器	甕	-	(14.4)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部外面平行叩き 指頭痕	覆土下層	20%
21	土師器	甕	19.8	17.8	6.7	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう張り 内面へうナデ 輪積み痕 工具痕 穿孔式	覆土下層	80% PL14
22	土師器	手捏土器	3.1	3.9	3.7	長石・石英	にぶい橙	普通	体部ナデ	貯蔵穴1 覆土上層	100% PL15
23	土師器	手捏土器	-	4.3	[4.8]	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	体部ナデ	貯蔵穴1 覆土下層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
24	砥石	6.7	3.9	1.9	64.34	砂岩	表面筋状の結晶痕	覆土下層	PL15
25	砥石	(4.6)	2.1	(0.4)	(7.30)	凝灰質泥岩	砥面1面	覆土上層	
26	有孔円板	(2.3)	(2.3)	0.3	(2.57)	滑石	孔2か所 一方両からの穿孔	覆土下層	PL15

第256号竪穴建物跡 (第17・18図 第5表 PL 3・4・15)

位置 A区北部のⅩG 5g3区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。



第17図 第256号竪穴建物跡実測図

重複関係 第7号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が調査区域外、北部が攪乱のため、確認できた規模は南北軸4.85m、東西軸4.53mで、方形か長方形と推定できる。主軸方向はN-12°-Wである。壁は高さ15～20cmで、外傾している。

床 確認できた範囲は平坦で、P3とP5の間から中央部にかけて硬化している。

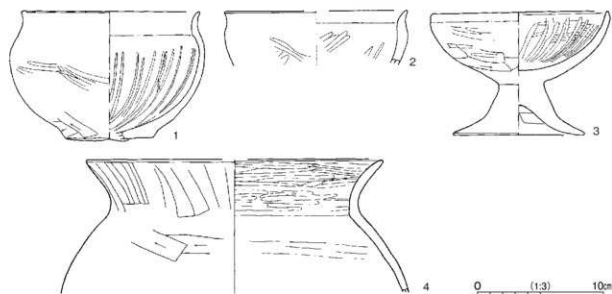
ピット 6か所。P1～P6は長さ27～55cm、短径25～51cm、深さ14～33cmで、いずれも掘り込みが浅く、柱痕跡なども確認できなかったため、性格は不明である。

貯蔵穴 南壁近くに位置している。東部が調査区域外のため、確認できた規模は北西・南東軸80cm、北東・南西軸50cmの楕円形と推定でき、深さ57cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。6層に分層でき、いずれの層も暗褐色土や黒褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

覆土 3層に分層できる。いずれの層も黒褐色土や暗褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片56点（碗13、高杯1、壺6、甕36）が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片8点が出土している。1は北部の覆土下層から、3は貯蔵穴の覆土上層から、それぞれ斜位で出土している。4は貯蔵穴の覆土中層から出土した破片同士が接合したものである。南壁際と中央部西壁寄りの覆土下層から炭化材が出土している。壁際の方がより高い位置から出土していることや焼土を伴わないことから、埋没の過程で炭化材を廃棄したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から5世紀末葉から6世紀初頭と考えられる。



第18図 第256号竪穴建物跡出土遺物実測図

第5表 第256号竪穴建物跡出土遺物一覧（第18図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	碗	140	102	70	長石・石英・針状物混	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ磨き 下縁へラ磨き 内面へラ磨き	覆土下層	95% PL15
2	土師器	碗	[144]	(44)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部内・外面へラ磨き	覆土下層	10%
3	土師器	高杯	139	98	102	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 杯部内・外面へラ磨き 外面下縁へラ磨き 杯部内面へラ磨き	貯蔵穴覆土上層	95% PL15
4	土師器	甕	[234]	(106)	-	長石・石英・胡麻	橙	普通	口縁部外面へラ磨き 内面へラ磨き 胴部外面へラナデ 体部外面へラ磨き 内面ナデ	貯蔵穴覆土中層	10%

第 257 号竪穴建物跡 (第 19・20 図 第 6 表 PL 4)

位置 A区中央部のⅪ I 6a3区、標高 45 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 46 号溝に掘り込まれている。

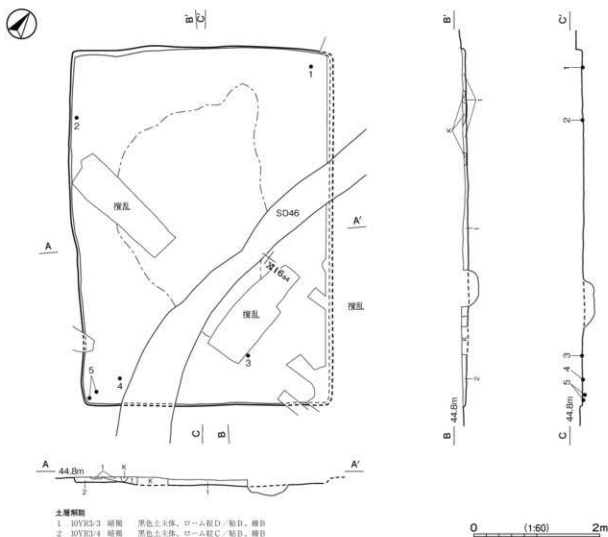
規模と形状 北東部が削平のため、確認できた規模は北西・南東軸 5.71 m、北東・南西軸 4.20 mで、長方形と推定できる。主軸方向は N-35°-W である。壁は高さ 10 cm ほどで、外傾している。

床 平坦で、中央部が硬化している。

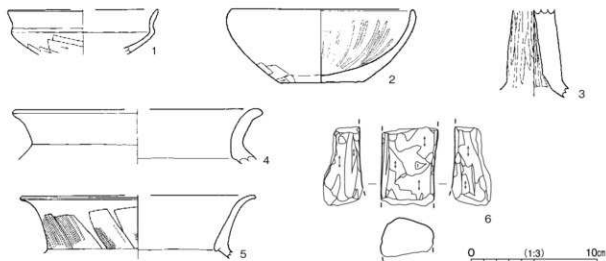
覆土 2 層に分層できるが層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片 356 点 (坏 13、碗 6、埴 4、高坏 4、甕 329)、石器 1 点 (砂岩製砥石) が出土している。ほかに混入した須恵器片 2 点、土師質土器片 2 点、陶器片 1 点が出土している。遺物の大半は南東壁寄りから出土している。1 は北コーナー部、2 は西コーナー近くの壁際、3 は南東部、4・5 は南コーナー部の覆土下層から、6 は南部の覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 5 世紀後葉と考えられる。炉がないことから倉庫の可能性がある。



第 19 図 第 257 号竪穴建物跡実測図



第20図 第257号竪穴建物跡出土遺物実測図

第6表 第257号竪穴建物跡出土遺物一覧(第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[119]	(35)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り	覆土下層	10%
2	土師器	坏	144	60	6.5	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外面ヘラ削き 体部下縁ヘラ削り 内面ヘラ削き	覆土下層	70%
3	土師器	高坏	-	(69)	-	長石・石英	橙	普通	脚部外面ヘラ削き 内面ヘラナデ	覆土下層	30%
4	土師器	甕	[191]	(43)	-	長石・石英	にぶい黒	普通	口縁部横ナデ	覆土下層	5%
5	土師器	甕	[183]	(50)	-	長石・石英	にぶい赤黒	普通	口縁部横ナデ 胴部外面ハケ目	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	砥石	(62)	4.6	(31)	(101.55)	砂岩	砥面3面	覆土	

第258号竪穴建物跡(第21～23図 第7表 PL 4・15・16)

位置 A区中央部のXH 5g0区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.10m、短軸5.05mの方形である。主軸方向はN-40°-Wである。壁は高さ28～37cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が硬化している。壁溝は、北壁を除いて壁下を巡っている。

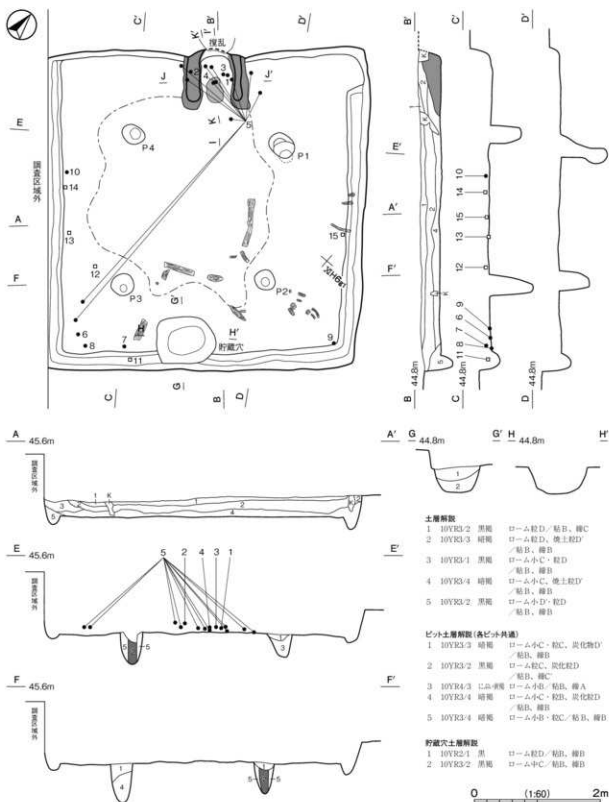
竈 北西壁の中央部に位置している。規模は焚口から煙道部まで100cmで、燃烧部幅は52cmである。竈は地山を7cmほど掘りくぼめ、第5～8層を埋土して整地している。袖部は整地面の上に、砂質粘土主体の第4層を積み上げ構築している。火床部は楕円形を呈し、床面とはほぼ同じ高さである。火床面は第5層の上面で、赤変硬化している。煙道部は壁内に15cmほど張り出し、外傾している。

ピット 4か所。P1～P4は長径34～43cm、短径30～36cm、深さ48～70cmで、配置から主柱穴と考えられる。覆土は第2層が柱痕跡、第5層が掘方埋土、第1・3・4層は柱抜き取り後の流入土である。

貯蔵穴 南壁下の中央部に位置している。長径95cm、短径75cmの楕円形で、深さ43cmである。底面は皿状で、壁は外傾している。2層に分層でき、どちらの層も含有物の少ない黒色土と黒褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

覆土 5層に分層できる。いずれの層も黒褐色土や暗褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

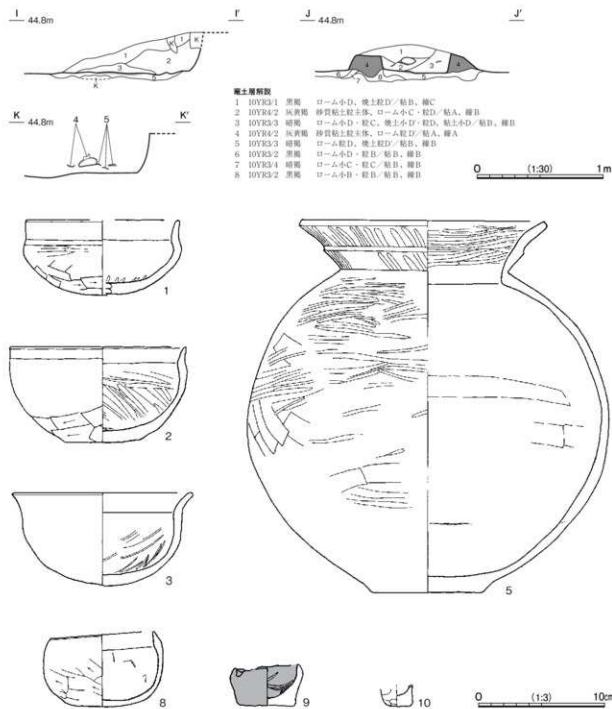
遺物出土状況 土師器片 403 点（椀 73、高坏 3、鉢 3、壺 5、甕 316、ミニチュア土器 2、手捏土器 1）、石器 2 点（砂岩製敲石、滑石製紡錘車）、石製品 3 点（滑石製有孔円板 1・剣形模造品 2）、剥片 1 点（滑石）が出土している。ほかに混入した弥生土器片 12 点が出土している。遺物は覆土下層から上層にかけて散在した



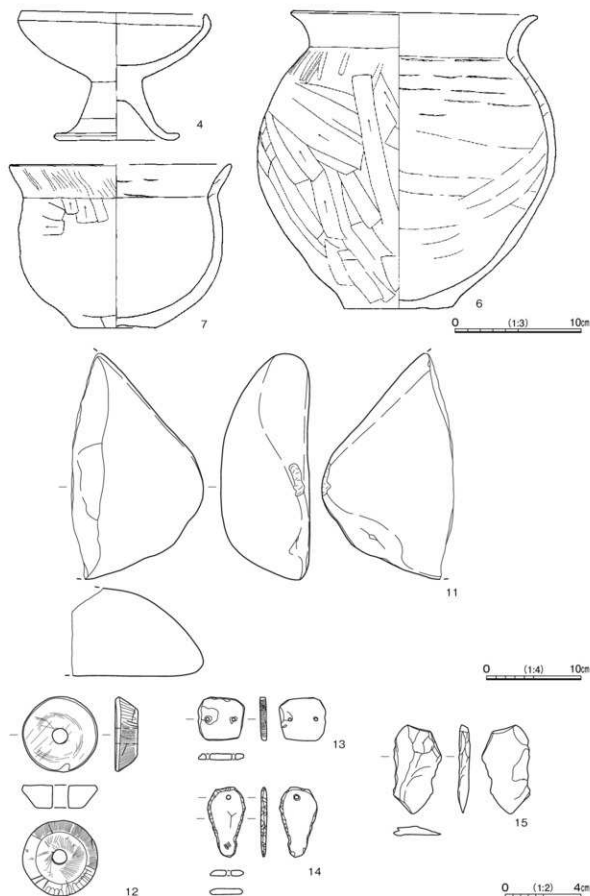
第 21 図 第 258 号竪穴建物跡実測図

状態で出土している。1・3～5は竈の覆土下層から、1と3は斜位で、4は逆位で5の上から、それぞれ出土している。5は南西壁際の覆土下層から出土した口縁部の一部と、竈の覆土中やその周辺から出土した破片が接合したものである。2は斜位で竈左袖上から、6は斜位で南コーナー部の床面から、11～14は南部の壁際の床面と覆土下層から、それぞれ出土している。東部と南部の覆土下層から炭化材が出土している。床面が火熱を受けていないことや焼土を伴わないことから、埋没の過程で炭化材を廃棄したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。敲石や未製品の有孔円板と剣形模造品、滑石の剥片が出土しており、本跡やその周辺で石製品の製作を行っていた可能性がある。



第22図 第258号竈穴建物跡・出土遺物実測図



第 23 図 第 258 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第7表 第258号竪穴建物跡出土遺物一覧(第22・23図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	土師器	碗	[120]	59	[26]	長石・石英・雲母	明赤釉	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう磨き 下半へう磨り 内面へう磨き	覆土下層	30%
2	土師器	碗	139	76	61	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口縁部横ナデ 体部下縁へう磨り 内面へう磨き	覆土地上面	95% PL15
3	土師器	碗	140	74	-	長石・石英・雲母	明赤釉	普通	口縁部横ナデ 体部内面へう磨き	覆土下層	95% PL15
4	土師器	高坏	145	104	[100]	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口縁部横ナデ 細部横ナデ 内・外面部面荒れ 縦横直	覆土下層	90% PL15
5	土師器	壺	191	296	86	長石・石英・赤色粘土	にぶい青釉	普通	口縁部へう磨き 体部外面へう磨り後へう磨き 内面ナデ	覆土下層	80% PL15
6	土師器	甕	191	236	87	長石・石英・細粒	にぶい赤釉	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう磨り 内面へうナデ 輪縁み直	床面	100% PL15
7	土師器	甕	[175]	130	67	長石・石英・細粒	明赤釉	普通	口縁部横ナデ 外面へう磨き 体部外面へう磨り 縦横直	覆土下層	70%
8	土師器	ヒナツア土師	82	60	20	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう磨り 内面へうナデ	床面	95% PL16
9	土師器	ヒナツア土師	51	33	44	長石・石英	明赤釉	普通	内面へう磨き 赤彩	覆土下層	95% PL16
10	土師器	手捏土師	-	(17)	16	長石・石英	にぶい橙	普通	鉋頭直	覆土下層	95% PL16

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
11	磁石	(239)	(139)	(94)	(37100)	砂岩	細線溝部磁打痕	覆土下層	

番号	器 種	径	孔径	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
12	紡錘車	4.0	0.8	1.2	28.24	滑石	全面磨き 上面弧状の縦刻 側面直線状の縦刻・周り直 下面多方向の縦刻 一方向からの穿孔	覆土下層	PL16

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
13	有孔円板	23	24	0.3	(4.08)	滑石	未製品 孔2ヶ所 一方向からの穿孔	床面	PL16
14	割板製品	3.7	2.0	0.3	(4.13)	滑石	未製品 表面面平滑 端なし 側面未加工	覆土下層	PL16
15	割板製品	4.7	2.5	0.6	7.48	滑石	未製品	床面	

第259号竪穴建物跡(第24・25図 第8表 PL4・16・17)

位置 A区中央部のXH6d1区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第260号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東部が調査区域外のため、確認できた規模は北東・南西軸3.78m、北西・南東軸2.90mで、長方形と推定できる。主軸方向はN-63°-Eである。壁は高さ27～38cmで、ほぼ直立している。

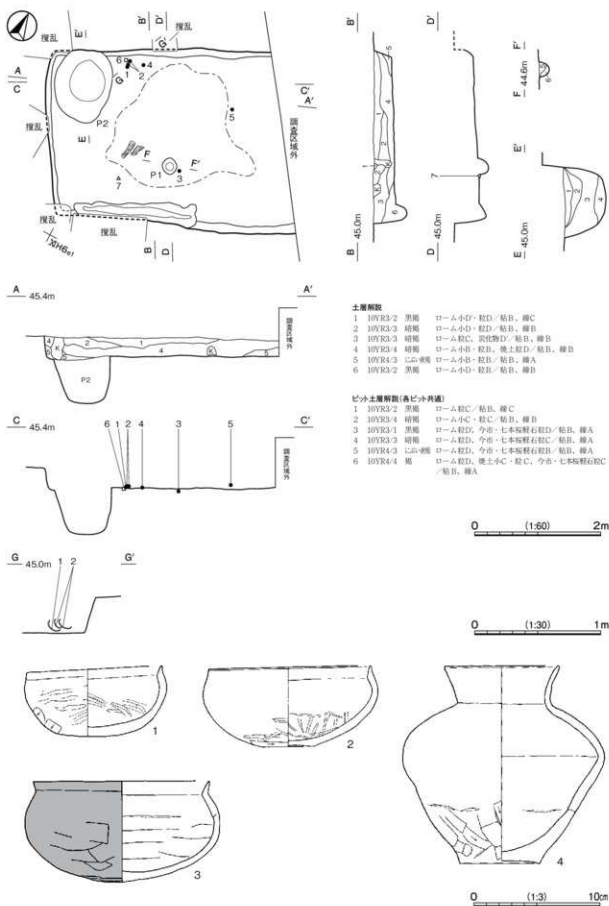
床 はほぼ平坦で、中央部が硬化している。壁溝は南壁下の一部で確認できた。

ピット 2か所。P1は長径27cm、短径24cm、深さ16cmで、中央部南東寄りに位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P2は長径116cm、短径90cm、深さ72cmで、西コーナー部に位置している。同時期の貯蔵穴とは様相が異なり、覆土の締りが強く、遺物も出土していないため、性格は不明である。

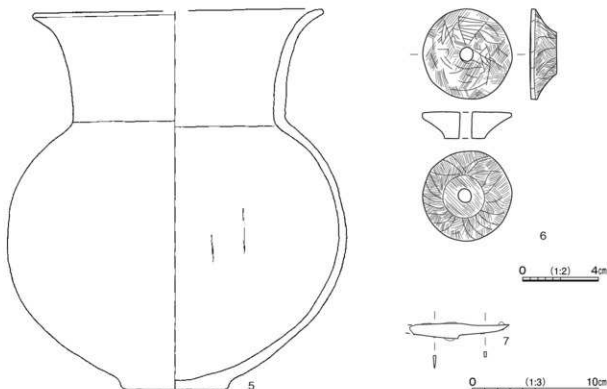
覆土 6層に分層できる。いずれの層も黒褐色土や暗褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片96点(碗13、増2、高坏2、壺1、甕78)、石器1点(滑石製紡錘車)、金属製品1点(刀子)、礫1点が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、弥生土器片1点が出土している。遺物は主に北部の覆土中から出土している。1・2・4は北西壁際の覆土下層から、2は1の上に重なった状態で、4は横位で、それぞれ出土している。3は正位で中央部南寄り、6は北西壁際、7は中央部南東壁寄りの床面から、5は斜位で中央部北東壁寄りの覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。炬がないことから第257号竪穴建物跡と同様に、倉庫の可能性がある。



第24図 第259号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第 25 図 第 259 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 8 表 第 259 号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第 24・25 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	使 成	特 徴	出土位置	備 考
1	土師器	椀	107	5.6	2.8	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう磨き 内面へう磨き	覆土下層	95% PL16
2	土師器	椀	129	6.4	4.0	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう磨き 内面へう磨き	覆土下層	95% PL16
3	土師器	椀	139	8.1	—	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう磨き 内面ナデ	床面	100% PL16
4	土師器	壺	90	15.7	6.4	長石・石英・細砂	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面下半へう磨き 内面灰化物質着	覆土下層	95% PL16
5	土師器	甕	[227]	30.3	8.2	長石・石英・赤色粘土	赤褐	普通	口縁部・頸部横ナデ 体部外面焼熱 内面へう	覆土下層	90% PL16
番号	器 種	径	孔径	厚さ	重量	材 質	特 徴			出土位置	備 考
6	紡錘車	4.7	0.7	1.4	40.26	滑石	全面磨光 上面・側面に直線文状の彫刻			床面	PL17
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴			出土位置	備 考
7	刀子	(7.9)	1.2	0.2	(6.63)	鉄	刃部先端欠損 断面三角形 基部断面長方形			床面	PL17

第 260 号竪穴建物跡 (第 26 図 第 9 表 PL 5)

位置 A区中央部のXH5d0区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第259号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 掘削と重複のため南東部の一部が失われているが、長軸4.50m、短軸3.40mの長方形である。主軸方向はN-24°-Wである。壁は高さ12cmほどで、外傾している。

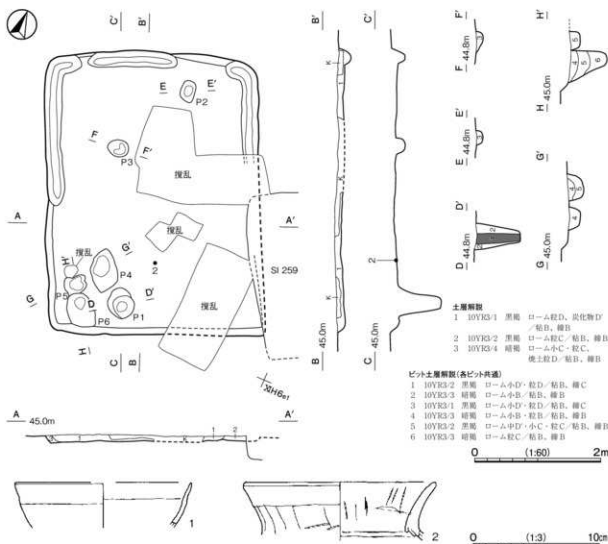
床 は平坦で、硬化していない。壁溝は、南東壁を除いて各壁下の一部で確認できた。

ピット 6か所。P1は長径49cm、短径40cm、深さ70cmの柱穴である。覆土は第1層が柱痕跡、第2層は掘方埋土である。P2～P6は長径35～53cm、短径28～42cm、深さ10～59cmで、性格は不明である。

覆土 3層に分层できるが層厚が薄いので、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片 69 点（坏 16、高坏 1、甕 52）が出土している。ほかに混入した縄文土器片 1 点、弥生土器片 3 点が出土している。1 は北西部の覆土中から、2 は中央部南寄りの覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から 5 世紀中葉と考えられる。炉がないことから第 257・259 号竪穴建物跡と同様に倉庫の可能性がある。



第 26 図 第 260 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

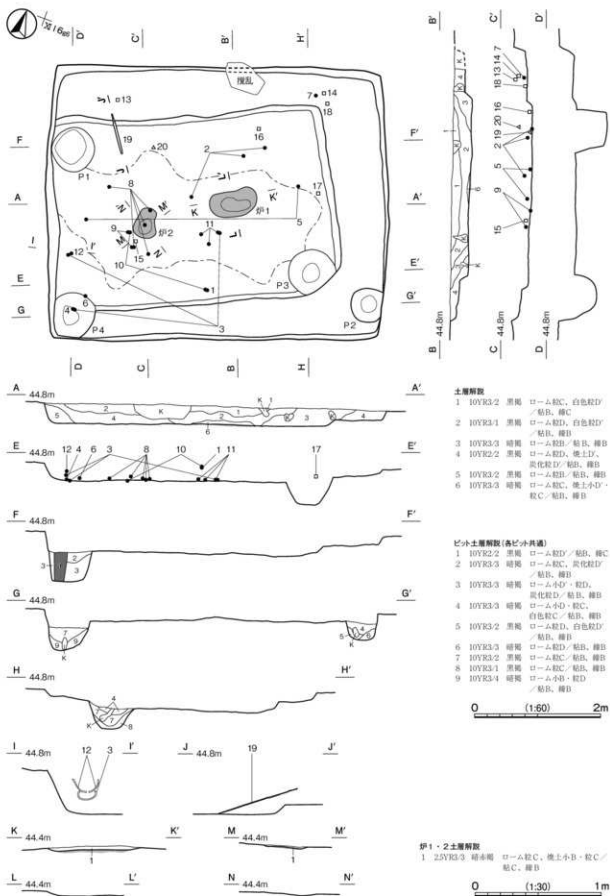
第 9 表 第 260 号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第 26 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[140]	(36)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	横ナデ	覆土	10%
2	土師器	甕	152	(46)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ 胴部外面ヘラナデ 内面工具痕 輪組み痕	覆土下層	20%

第 261 号竪穴建物跡 (第 27～31 図 第 10 表 PL 5・17・18)

位置 A 区南部の XI I 6 g 区、標高 45 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北・東・南側の三方に高床部を有する竪穴建物跡で、長軸 5.42 m、短軸 4.34 m の長方形を呈する。主軸方向は N - 70° - E である。壁は高さ 10～31 cm で、外傾して立ち上がっている。



第 27 図 第 261 号堅穴建物跡実測図

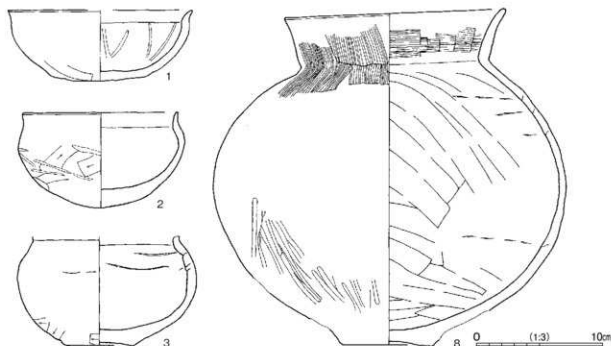
床 上段・下段の2段構造となっており、上段から下段に向かって緩やかに下り傾斜している。その比高差は10cmほどである。下段は、長軸4.62m、短軸3.10mの長方形を呈する。両段ともにほぼ平坦で、下段の中央部が硬化している。

炉 2か所。中央部に位置している。炉1は下段のほぼ中央部に位置し、長径77cm、短径40cmの不整楕円形をした地床炉で、深さ5cmほどの皿状を呈している。底面は赤変硬化している。炉2は下段の中央部西寄りに位置し、長径48cm、短径38cmの不整楕円形をした地床炉で、深さ3cmほどの皿状を呈している。底面は赤変硬化している。炉1・2ともに同じような遺存状況であることから、同時に使用されていたと考えられる。

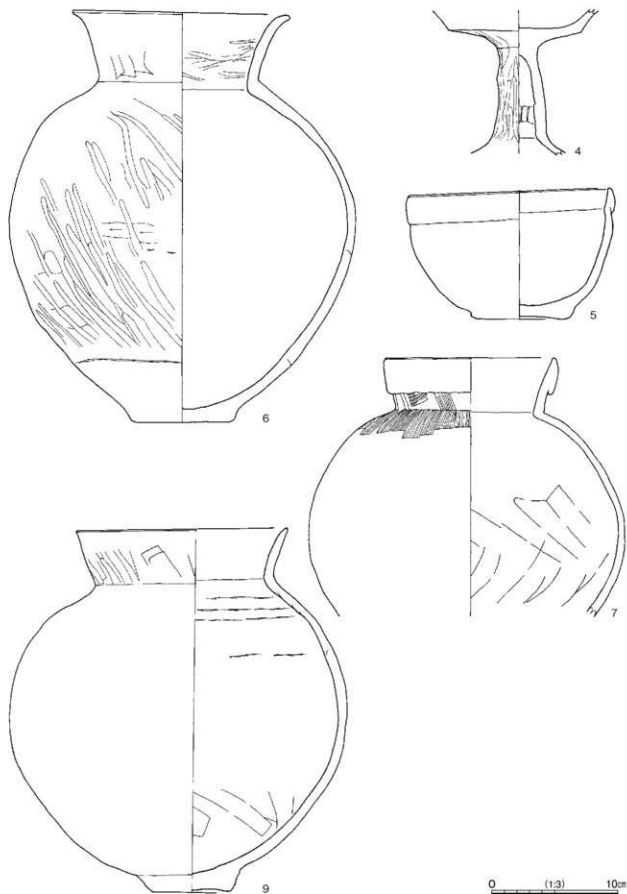
ピット 4か所。P1は径70cmほど、深さ48cmで、覆土の第1層は柱痕跡、第2・3層は掘方埋土の様相を呈しているため、柱穴と考えられる。P2～P4は長径53～75cm、短径50～70cm、深さ30～40cmで、性格は不明である。

覆土 6層に分層できる。いずれの層も黒褐色土や暗褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

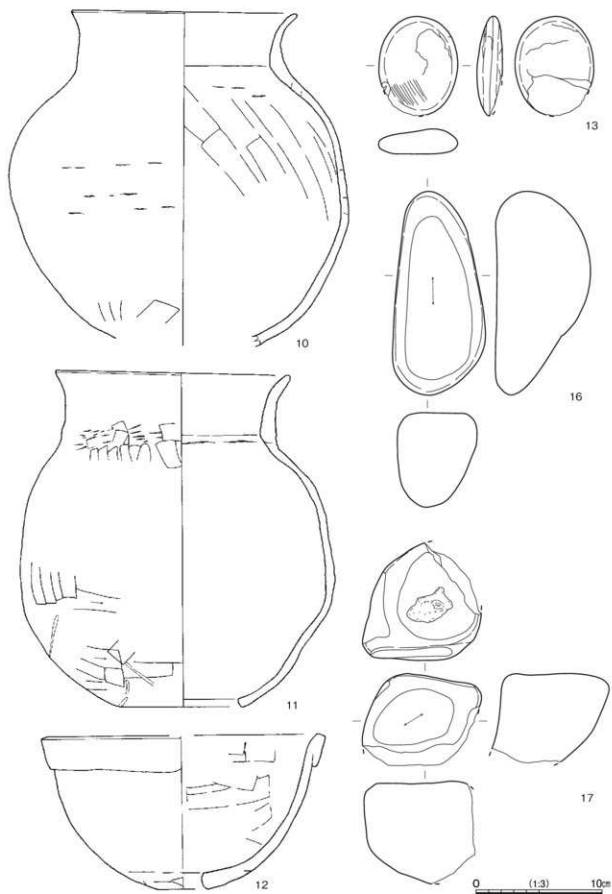
遺物出土状況 土師器片1,043点（碗82、高坏8、鉢1、壺8、甕939、瓶5）、石器6点（ホルンフェルス製磨石1、石英斑岩製敲石1、砥石4〔粘板岩製1、砂岩製2、石英斑岩製1〕）、礫16点（粘板岩9、石英斑岩4、砂岩1、安山岩1、閃緑岩1）、金属製品2点（鉄剣、釘）が出土している。ほかに混入した縄文土器片3点、弥生土器片4点、須恵器片2点が出土している。遺物の大半は北東コーナー付近と、西壁際から中央部にかけての覆土下層と中層から出土している。これらの遺物は、本跡が廃絶されて埋没していく過程で廃棄したものと考えられる。3・12は正位で西壁際の覆土下層から、3の上に12が重なった状態で出土している。5は西壁寄りと東部の覆土下層から出土した破片同士が接合したものである。6は斜位で南西コーナー寄りの覆土下層から、8～10は西壁寄りの覆土下層から多数の破片の状態で、それぞれ出土している。19は北西部の上段から下段にかけての覆土下層から、切先を下にした状態で出土している。P1の底面からは碗と甕の破片が出土しているが、細片のため図示できなかった。



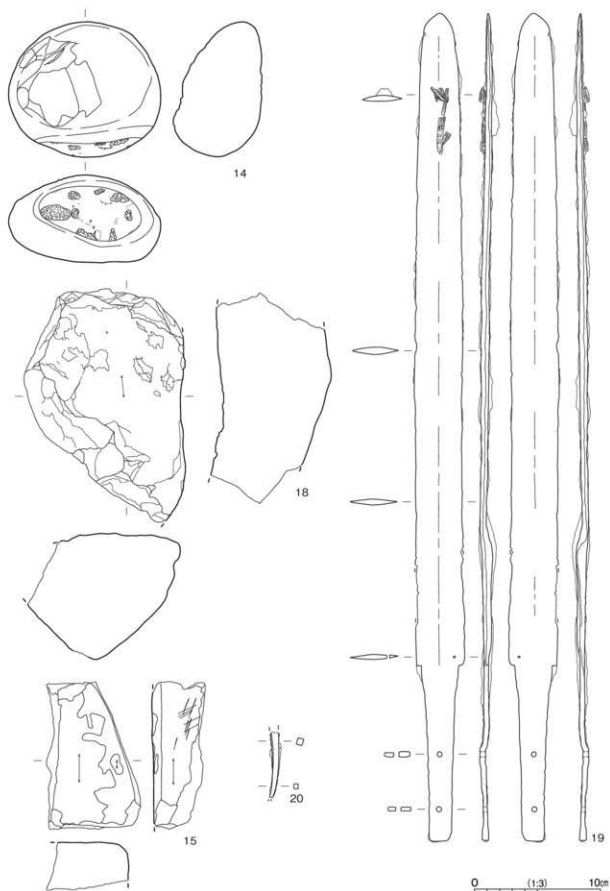
第28図 第261号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 29 图 第 261 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)



第30図 第261号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)



第31图 第261号竖穴建物跡出土遺物実測図(4)

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。本跡は、北・東・南側の三方に高床部を有する竪穴建物跡と考えられ、当遺跡で初めて確認されたものである。鉄剣をはじめ、被熱した石器と礫が多く出土しているなど、建物の構造と出土遺物の様相などが特異である。

第10表 第261号竪穴建物跡出土遺物一覧(第28～31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土器	坏	[146]	5.6	—	長石・石英・赤色粒子	明赤陶	普通	口縁部横ナデ 体部外面下縁へう割り 内面へう割り	覆土下層—中層	50%
2	土器	碗	12.2	7.6	—	長石・石英・赤色粒子	明赤陶	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう割り後へう割り 内面ナデ	覆土下層—中層	80% PL17
3	土器	碗	—	(8.6)	5.5	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	体部外面下縁へう割り 内面ナデ 輪轆み痕	覆土下層	90% PL17
4	土器	高坏	—	(11.4)	—	長石・石英・赤色粒子	明赤陶	普通	頸部外面へう割り 内面へうナデ	覆土中層	70%
5	土器	鉢	16.0	10.4	7.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤黄	普通	持ち返し口縁 口縁部横ナデ 内面ナデ 体部厚底 被熱痕	覆土下層	90% PL17
6	土器	壺	17.0	32.7	7.5	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 頸部内面へう割り 体部外面へう割り後へう割り 内面厚底 輪轆み痕	覆土下層	90% PL18
7	土器	壺	13.2	(20.5)	—	長石・石英・赤色粒子・細礫	明赤陶	普通	持ち返し口縁 口縁部横ナデ 頸部外面ハケ目 体部外面へう割り	覆土下層	70% PL18
8	土器	壺	17.4	26.7	7.0	長石・石英	明赤陶	普通	口縁部横ナデハケ目 頸部外面ハケ目 体部外面へう割り 内面ナデ 輪轆み痕	覆土下層	70% PL17
9	土器	壺	16.7	29.1	6.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 頸部外面へう割り 体部外面被熱による変色 内面ナデ 輪轆み痕	覆土下層	90% PL17
10	土器	壺	17.6	(26.6)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面厚底 内面へうナデ 輪轆み痕 被熱痕	覆土下層—中層	80% PL18
11	土器	瓶	18.4	26.8	9.4	長石・石英・細礫	明赤陶	普通	無底式 口縁部横ナデ 頸部外面へう割り 体部下縁へう割り 内面厚底 輪轆み痕	覆土中層	90% PL17
12	土器	瓶	[21.5]	12.2	4.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	準礼式 持ち返し口縁 体部外面下縁へう割り 内面へうナデ 輪轆み痕	覆土下層	80%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
13	磨石	7.9	6.3	2.0	(130.57)	ホルンフェルス	上面微細な格状擦痕	覆土上層	
14	敲石	10.7	12.1	7.0	105.7	石英燧岩	下端面敲打痕	覆土中層	
15	砥石	(11.7)	(7.5)	(4.3)	(481.68)	粘板岩	砥面2面 磨索痕	覆土下層	PL18
16	砥石	16.2	7.4	7.5	1071.8	砂岩	砥面1面	覆土下層	
17	砥石	(7.3)	(9.5)	(9.4)	(806.18)	砂岩	砥面1面 側面敲打痕	覆土中層	
18	砥石	(18.6)	(12.8)	11.1	(2580.0)	石英燧岩	砥面1面 被熱痕	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
19	鉄剣	65.8	3.8	1.1	(317.17)	鉄	刃部長51.8 茎部長14.0 両側 側面に孔あり	覆土下層	PL18
20	釘	(5.2)	(0.7)	(0.3～0.5)	(5.40)	鉄	先端部・頭部欠損 脚部断面長方形	覆土中層	PL18

第262号竪穴建物跡(第32・33図 第11表 PL5・19)

位置 A区南部のⅩI E 6区、標高45 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外のため、確認できた規模は北東・南西軸5.90 m、北西・南東軸5.25 mで、長方形と推定できる。主軸方向はN-50°-Wである。壁は高さ34～53 cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、壁際を除いて硬化している。壁溝が北東壁下の一部に確認できた。

炉 中央部北寄りに位置している。長径43 cm、短径32 cmほどの楕円形をした地床炉で、床面からの深さ8 cmほどの皿状を呈している。底面は赤変硬化している。

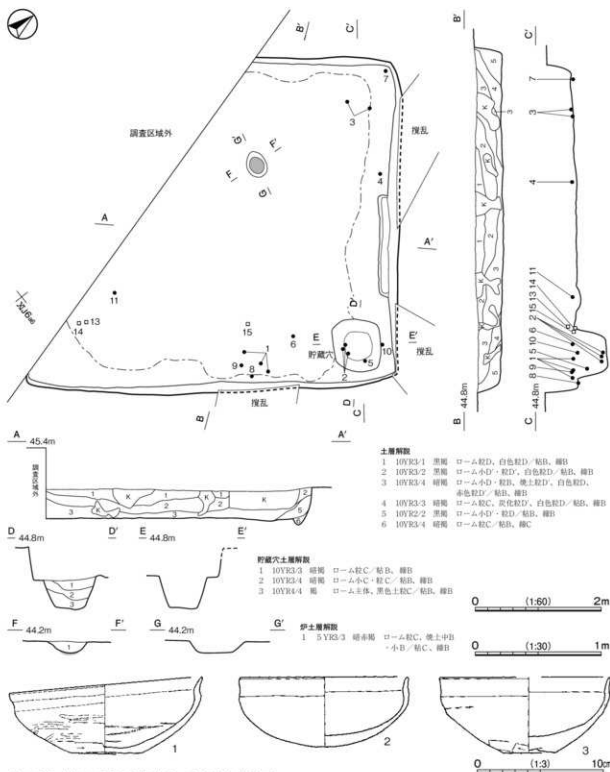
貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長軸83 cm、短軸77 cmの方形で、深さ47 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。3層に分層でき、いずれの層も含有物の少ない暗褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

覆土 6層に分層できる。黒褐色土や暗褐色土が壁際からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

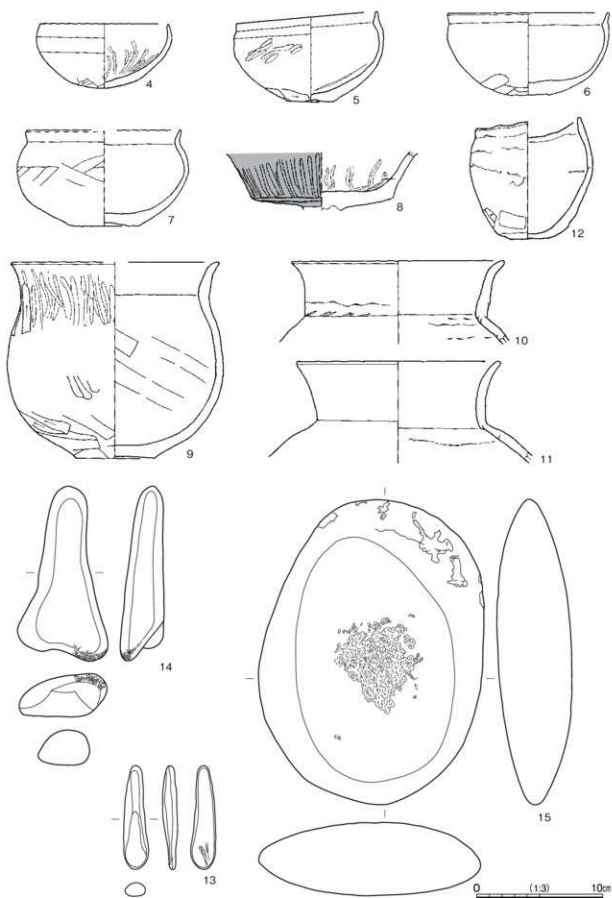
遺物出土状況 土器器片256点(坏7、碗68、高坏7、甕173、手捏土器1)、石器4点(炭灰質泥岩製砥石、砂岩製磨石・敲石・台石)が出土している。ほかに混入した弥生土器片6点、石器1点が出土している。遺物

は主に南部の覆土中から散在した状態で出土している。1・9は南東壁際の床面付近から、それぞれ出土している。2・5は貯蔵穴の覆土下層と中層から、3・7は北コーナー部の床面と覆土下層から、それぞれ出土している。10は東コーナー部、11・13・14は南部の覆土下層から、15は南東壁寄りの床面から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。床面から磨痕や敲打痕のある石器が出土しており、石製品の製作を行っていた可能性がある。



第32図 第262号堅穴建物跡・出土遺物実測図



第 33 図 第 262 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第11表 第262号竪穴建物跡出土土物一覧（第32・33図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	土師器	坏	153	62	57	灰石・石英・赤色 粘土・緑泥	橙	普通	口縁部横ナデ 内部半環 体部外面へう磨き 下端へう磨き 工具痕	床面直上	90% PL19
2	土師器	坏	133	55	-	灰石・石英・赤色 粘土・緑泥	橙	普通	口縁部横ナデ 体部半環 被熱痕	貯蔵穴 覆土下層	90% PL19
3	土師器	坏	[134]	60	40	灰石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面下端へう磨り 内面ナ	床面	60%
4	土師器	碗	102	51	-	灰石・石英	明赤褐	良好	口縁部横ナデ 体部下端へう磨り 内面へう磨	覆土下層	80% PL19
5	土師器	碗	112	72	37	灰石・石英・緑 泥	明黄褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面工具による刮状痕 下 端へう磨り 内面ナデ 工具痕	貯蔵穴 覆土中層	95% PL19
6	土師器	碗	126	65	29	灰石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面下端へう磨り 内面ナ	覆土下層	70%
7	土師器	碗	[121]	76	56	灰石・石英・緑 泥	にぶい黄褐	普通	口縁部横ナデ 体部ナデ	覆土下層	70%
8	土師器	高坏	-	(45)	-	灰石・石英	にぶい黄褐	普通	坏部へう磨き 赤彩 輪積み痕	覆土下層	25%
9	土師器	甕	[162]	156	62	灰石・石英	赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう磨り 内面ナデ	床面直上	50%
10	土師器	甕	169	(66)	-	灰石・石英	明黄褐	良好	口縁部横ナデ 輪積み痕	床面	10%
11	土師器	甕	160	(81)	-	灰石・石英・緑 泥	明褐	良好	口縁部横ナデ 輪積み痕	床面	15%
12	土師器	手捏土器	81	96	-	灰石・石英・緑 泥	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面下端へう磨り 輪積み痕	覆土中	70% PL19

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
13	磨石	82	20	1.1	239.1	砂岩	上面下半部磨面 下面下部磨面	覆土下層	
14	砥石	139	7.1	3.5	288.24	砂岩	下端面鋭打痕	床面	
15	台石	242	179	5.9	3235.0	砂岩	上面中央部鋭打痕 被熱痕	床面	

第12表 古墳時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設					覆土	主な出土土物	時 期	備 考
				長軸×短軸(m)					柱穴	土間	土間	土間	土間				
253	XH566	N-25°-W	[円形]	8.70×(3.70)	50	平坦	全周	-	-	5	-	-	人為 自然	土師器 砥石 磨石 土師器 砥石 磨石	5世紀中葉	本跡→SD44	
254	XH568	N-37°-W	[円形]	8.76×(6.45)	37~66	平坦	全周	3	-	12	伊1	1	自然	土師器 灰土 磨石 土師器 砥石 磨石	5世紀中葉		
255	XH661	N-19°-W	方 形	5.73×5.47	15~30	平坦	一部	3	-	1	覆1 伊1	2	人為	土師器 灰土 磨石 砥石 有孔内版	5世紀末葉 6世紀初葉	本跡→SE 9 SK 1696→1698	
256	XG523	N-12°-W	[円形]	(4.85)×(4.53)	15~20	平坦	-	-	-	6	-	-	自然	土師器	5世紀末葉 6世紀初葉	本跡→HT 7	
257	XI16a3	N-35°-W	[長方形]	5.71×(4.20)	10	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器 砥石	5世紀後葉	本跡→SD46	
258	XH569	N-40°-W	方 形	5.10×5.05	28~37	平坦	一部	4	-	-	覆1	1	自然	土師器 砥石 磨石 土師器 有孔内版	6世紀前半		
259	XH661	N-63°-E	[長方形]	(3.78)×2.90	27~38	平坦	一部	-	1	1	-	-	自然	土師器 磨石 磨石 土師器 有孔内版	5世紀中葉	SD360→本跡	
260	XH569	N-24°-W	長方形	4.50×3.40	12	平坦	一部	1	-	5	-	-	不明	土師器	5世紀中葉	本跡→SE259	
261	XI16a6	N-70°-E	長方形	5.42×4.34	10~31	平坦	-	1	-	3	伊2	-	自然	土師器 磨石 砥石 砥石 磨石 磨石	5世紀中葉		
262	XI16a6	N-50°-W	[長方形]	(5.90)×5.25	34~53	平坦	一部	-	-	-	伊1	1	自然	土師器 磨石 砥石 砥石 磨石 磨石	5世紀中葉		

(2) 土 坑

第1678号土坑（第34図 第13表）

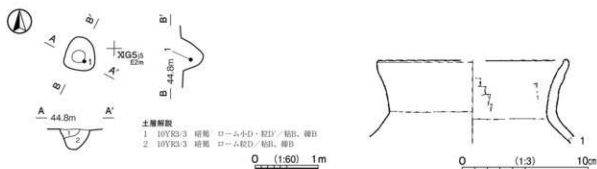
位置 A区北部のXIG 5j5区、標高45 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.56 m、短径0.50 mの不整楕円形で、長径方向はN-23°-Eである。深さは32 cmで、壁は外傾している。底面は皿状である。

覆土 2層に分層できる。ロームブロック・粒子を含んでいることから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片8点(欠)が出土している。1は中央部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第34図 第1678号土坑・出土遺物実測図

第13表 第1678号土坑出土遺物一覧(第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	[149]	(66)	—	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外面横ナデ 内面ヘラナデ	覆土中層	5%

第1692号土坑(第35・36図 第14表 PL 6・21)

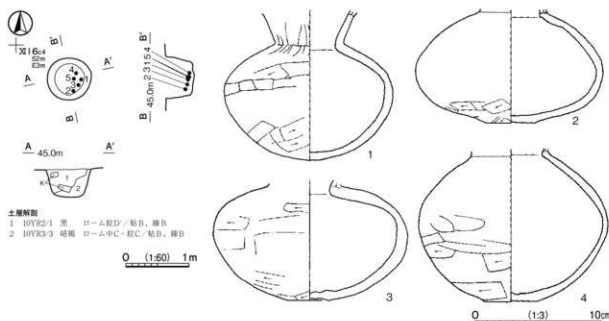
位置 A区中央部のXI I 6c4区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 0.70mほどの円形である。深さは43cmで、壁は外傾している。底面は若干の凹凸がある。

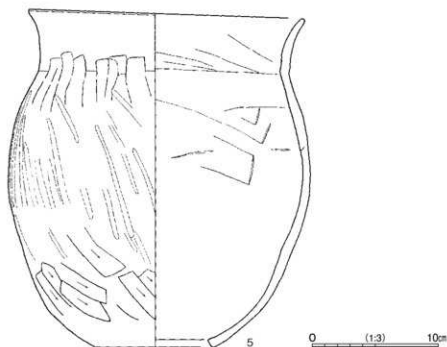
覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含む層があることから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片26点(碗1、埴4、甕20、瓶1)が出土している。1～4はいずれも横位で並べられた状態で、東壁際の覆土下層から出土している。5は体部の半分はどずつが逆位の状態で中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。出土した土師器埴は、いずれも口縁部を打ち欠いており、土師器瓶の破片も含めて、埋納したような状況である。



第35図 第1692号土坑・出土遺物実測図



第 36 図 第 1692 号土坑出土遺物実測図

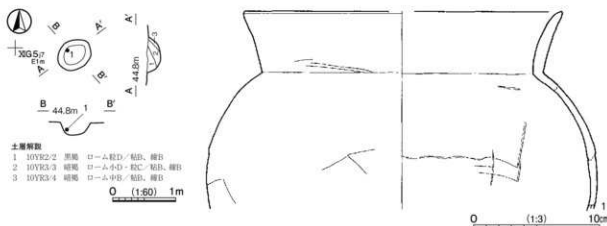
第 14 表 第 1692 号土坑出土遺物一覧 (第 35・36 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	-	(119)	-	長石・石英・細 にぶい砂	普通	普通	胴部外面ヘラナデ 体部外面ヘラ削り後ナデ	覆土下層	90% PL21
2	土師器	埴	-	(89)	4.0	長石・石英・細 砂	赤	普通	体部外面下半ヘラ削り 被熱のため外面摩滅	覆土下層	90% PL21
3	土師器	埴	-	(95)	3.0	長石・石英	明赤釉	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ 被熱のため外面摩滅	覆土下層	90% PL21
4	土師器	埴	-	(121)	4.0	長石・石英	にぶい赤釉	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ 被熱のため外面摩滅	覆土下層	90% PL21
5	土師器	瓶	21.6	26.8	9.2	長石・石英	明赤釉	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ磨き 下半ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪襷み肌	覆土下層	96% PL21

第 1695 号土坑 (第 37 図 第 15 表)

位置 A区北部のXIG 57区、標高 45 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径 0.57 m、短径 0.47 mの楕円形で、長径方向はN-51°-Eである。深さは 19cmで、壁は外傾している。底面は皿状である。



第 37 図 第 1695 号土坑・出土遺物実測図

覆土 3層に分層できる。ロームブロック・粒子を含んでいることから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 10点（甕）が出土している。1は北西壁際の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。

第15表 第1695号土坑出土遺物一覧（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	[25.0]	(15.6)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部堆ナデ 輪積み痕	体部外面ヘラ刮り 内面ヘラナ	覆土中層 30%

第1702号土坑（第38図 第16表）

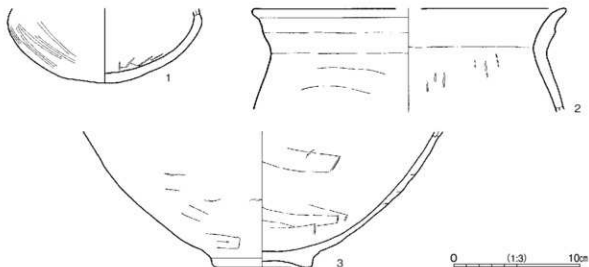
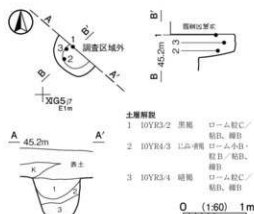
位置 A区北部のXIG 517区、標高45 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北東部が調査区域外のため、確認できた規模は、北西・南東軸0.75 m北東・南西軸0.36 m、円形か楕円形と推定できる。深さは59 cmで、壁は外傾している。底面は平坦である。

覆土 3層に分層できる。ロームブロック・粒子を含んでいることから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 6点（埴1、高坏1、甕4）が出土している。1～3はいずれも覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第38図 第1702号土坑・出土遺物実測図

第16表 第1702号土坑出土遺物一覧（第38図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	-	(5.9)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ナデ 工具痕	覆土中層	40%
2	土師器	甕	[24.6]	(8.1)	-	長石・石英	灰褐色	普通	口縁部堆ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 工具痕	覆土中層	5%
3	土師器	甕	-	(10.7)	7.6	長石・石英	にぶい赤黄	普通	体部外面下半ヘラ刮り 内面ヘラナデ 輪積み痕 粘石痕	覆土中層	30%

第17表 古墳時代土坑一覧

番号	位置	長短方向	平面形	縦 横		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	時 期	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)						
1678	XIG 5J5	N-23°-E	不整形円形	0.56×0.50	32	外傾	屈状	人為	土師器	5世紀中葉	
1682	XI 16c4	-	円形	0.70×0.67	43	外傾	平坦	人為	土師器	5世紀中葉	
1685	XIG 5J7	N-51°-E	楕円形	0.57×0.47	19	外傾	屈状	人為	土師器	5世紀中葉	
1702	XIG 5I7	-	[円形・楕円形]	(0.75)×(0.36)	59	外傾	平坦	人為	土師器	5世紀中葉	

2 奈良・平安時代の遺構と遺物

竪穴建物跡14棟、掘立柱建物跡1棟、井戸跡3基、溝跡2条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

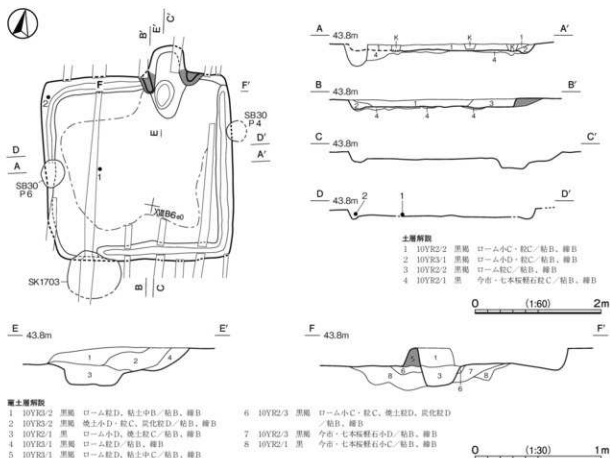
(1) 竪穴建物跡

第263号竪穴建物跡（第39・40図 第18表 PL 6）

位置 B区中央部のⅢB 6d9区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第30号掘立柱建物、第1703号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.99m、短軸2.93mの方形で、主軸方向はN-11°-Wである。壁は高さ10～12cmほどで、外傾している。



第39図 第263号竪穴建物跡実測図

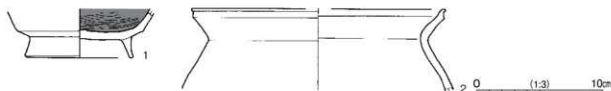
床 平坦で、壁際を除いて硬化している。貼床は、今市・七本桜軽石粒子を含む第4層を5～15cmほど埋土して構築している。壁溝は、北東壁下と南西コーナー部を除いて巡っている。

竈 北壁のやや東寄りに位置している。規模は焚口から煙道部まで115cmで、燃焼部幅は45cmである。燃焼部・袖部は地山を18cmほど掘りくぼめ、第6～8層を埋土して整地している。袖部は整地面の上に、ローム粒子を微量に含む第5層を積み上げ構築している。火床部は楕円形で、床面を15cmほど掘りくぼめている。赤変硬化していない。煙道部は壁外に44cmほど張り出し、緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックを不規則に含んでいることから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片22点（坏3、高台付坏2、甕17）、須恵器片2点（坏、甕）が出土している。1は中央部西寄りの覆土下層から、2は北西コーナー部の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第40図 第263号竈穴建物跡出土遺物実測図

第18表 第263号竈穴建物跡出土遺物一覧（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	—	(3.9)	8.7	長石・石英	橙	普通	体部内面横位へう磨き 右貼り付け 黒色基理	高	40%
2	土師器	甕	[20.2]	(6.4)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部内面ナデ	覆土下層	5%

第264号竈穴建物跡（第41～43図 第19表 PL 6・19・20）

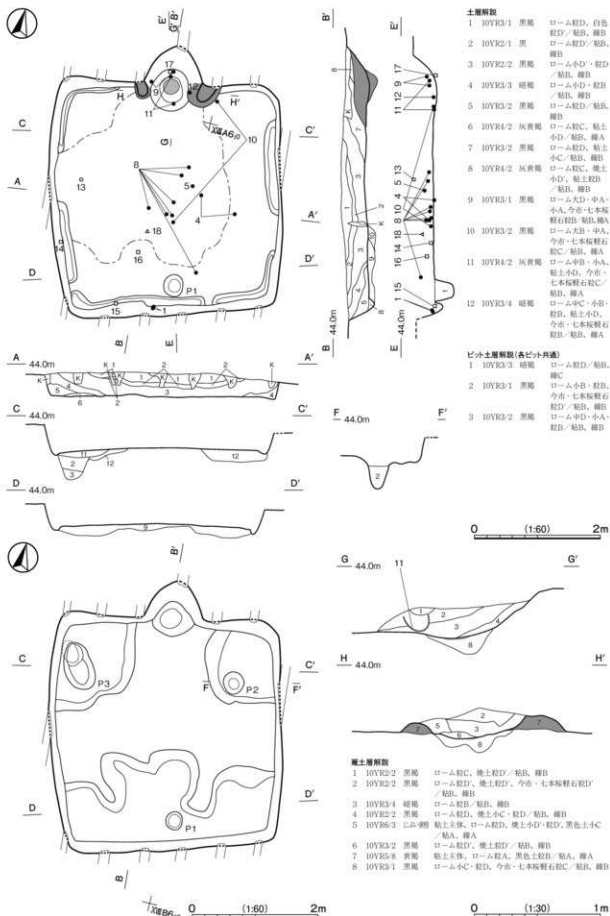
位置 B区中央部のⅧA 69区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.70m、短軸3.65mの方形で、主軸方向はN-14°-Wである。壁は高さ25～45cmほどで、外傾している。

床 中央部がやや高く、周囲が低い。壁際を除いて硬化している。壁溝は、北東コーナー部を除いて壁下を巡っている。貼床は、北東・北西コーナー部下と、南壁に沿って、帯状にそれぞれ深く掘り込み、ロームブロックを含む第9～12層を3～20cm埋土して構築している。

竈 北壁の中央部に位置している。規模は焚口から煙道部まで108cmで、燃焼部幅は58cmである。燃焼部・袖部は地山を13cmほど掘りくぼめ、第8層を埋土して整地している。袖部は地山の上に、粘土を主体とする第7層を積み上げて構築している。火床部は円形で、床面を5cmほど掘りくぼめている。火床面は第8層の上面で、赤変硬化している。煙道部は壁外に60cmほど張り出し、緩やかに立ち上がっている。

ピット 3か所。P1は長径35cm、短径31cm、深さ28cmで、竈に対峙した南壁に位置していることや床面の硬化状況から、出入口施設に伴うピットと考えられる。P2・P3は長径35・77cm、短径33・45cm、深さ35・45cmで、掘方調査で貼床の下から確認されたことから、廃絶時には柱穴として機能していなかったと考えられる。

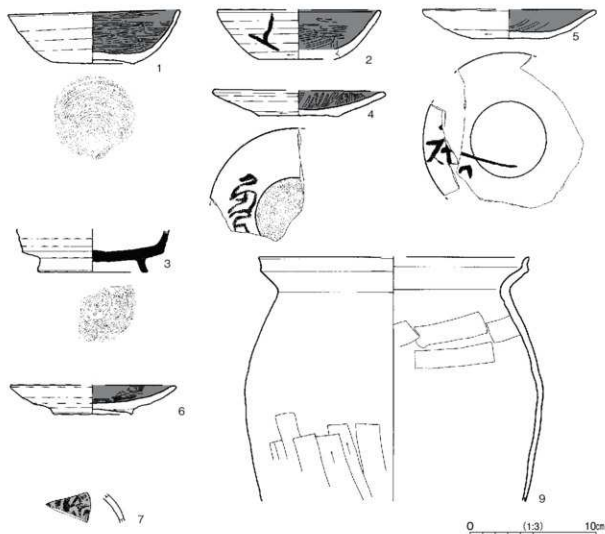


第41図 第264号竪穴建物跡実測図

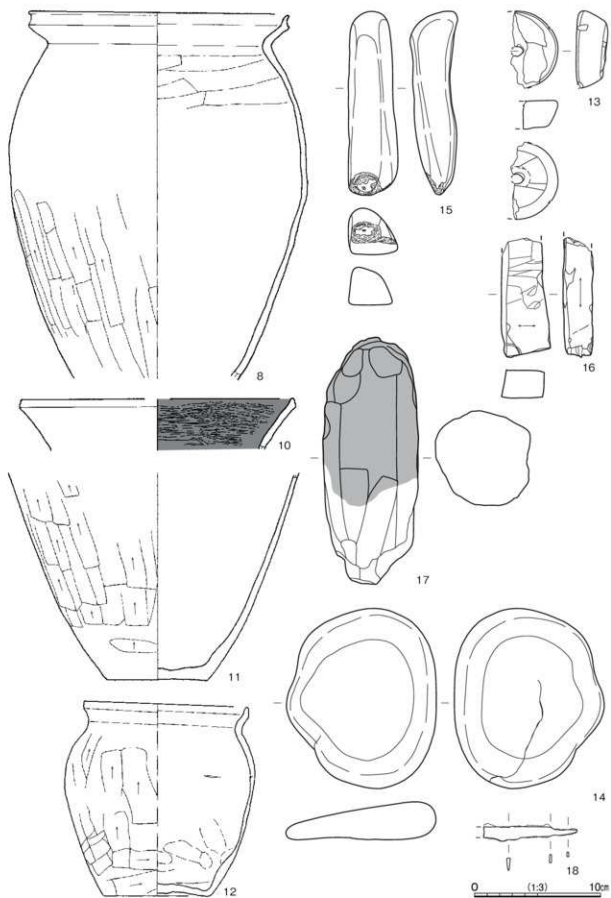
覆土 8層に分層できる。いずれの層も黒褐色土や暗褐色土で周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 636点（坏81、高台付坏1、皿5、高台付皿1、鉢1、甕547）、須恵器片 21点（坏4、高台付坏2、甕15）、灰釉陶器片 1点（瓶₉）、土製品 1点（紡錘車）、石器 3点（砂岩製磨石・敲石、粘板岩製砥石）、石製品 1点（凝灰質泥岩製支脚）、金属製品 1点（刀子）が出土している。ほかに混入した土師質土器片 5点、陶器片 2点が出土している。遺物は主に中央部の覆土下層から各壁際の覆土上層にかけて散在して出土している。出土した遺物は破片の状態のものが多く、本跡の埋没の過程で廃棄されたものと考えられる。2は北部の覆土中層から、3は南東部の覆土上層から、7は北東部の貼床埋土中から、それぞれ出土している。4は中央部の床面から出土した破片と東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。8は中央部の覆土下層と南部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。9・11は竈の覆土下層から出土しており、同一個体と考えられる。竈の燃焼部から 12 は逆位で、17 は倒れた状態で、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉と考えられる。



第42図 第264号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第43图 第264号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

第19表 第264号竪穴建物跡出土遺物一覧(第42・43図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼 成	特 徴	出土位置	備 考
1	土師器	環	13.5	4.3	6.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面横位へラ磨き 底部回転糸切り 黒色処理	覆土下層	70% PL19
2	土師器	環	[128]	3.9	[6.3]	長石・石英	灰褐色	普通	体部外面下端回転へラ磨り 内面横位へラ磨き 黒色処理	覆土中層	20% PL19 形書「人」上
3	須恵器	高台付杯	-	[3.3]	[8.6]	長石・石英・針状物	褐色	普通	底部回転へラ磨り 高台貼り付け	覆土上層	30%
4	土師器	皿	[133]	2.0	[6.4]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面下端回転へラ磨り 内面へラ磨き 黒色処理	覆土下層	30% PL19 形書「南」
5	土師器	皿	[136]	2.3	6.0	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面下端回転へラ磨り 内面へラ磨き 黒色処理	覆土中層	20% PL19 形書「水」
6	土師器	高台付皿	[130]	2.3	[6.2]	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	内面横位へラ磨き 高台貼り付け 黒色処理	覆土中層	20%
7	灰釉陶器	瓶	-	[2.4]	-	長石	灰オリーブ	普通	体部外面輪軸	胎土堆土	5%
8	土師器	甕	20.4	[29.1]	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ磨り 内面ヘラナデ	覆土下層へ中層	80% PL19
9	土師器	甕	[21.4]	[19.3]	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ磨り 内面ヘラナデ 11と同一個体	覆土下層	20%
10	土師器	甕	[21.5]	[4.0]	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面横位へラ磨き 黒色処理	覆土上層	5%
11	土師器	甕	-	[16.4]	8.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ磨り 9と同一個体	覆土下層	40%
12	土師器	甕	12.7	15.4	8.4	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面へラ磨り 内面ナデ 断面直 輪軸直	甕焼残部	80% PL19
番号	器 種	径	厚さ	孔径	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考	
13	紡錘車	[6.2]	2.5	0.9	[52.30]	長石・石英	にぶい橙	上面直磨 頻度使用による光沢 一方からの穿孔	覆土下層		
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考		
14	磨石	14.3	11.9	3.0	650.68	砂岩	両面中央部平滑	覆土下層			
15	砥石	14.6	3.9	3.7	293.44	砂岩	下端に敲打痕	覆土下層			
16	砥石	(9.5)	3.9	2.4	[13.28]	粘板岩	砥面2面	覆土下層	PL20		
17	支脚	19.6	7.6	7.5	814.10	燧灰質泥岩	切石 被熱痕	甕焼残部			
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考		
18	刀子	(7.4)	(1.1)	0.3	(5.86)	鉄	切先部・基部欠損 刃部断面三角形 刃間	覆土中層	PL20		

第265号竪穴建物跡(第44図 第20表 PL 6・20)

位置 B区中央部のⅢB 6b9区、標高44 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1710号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.83 m、短軸2.68 mの方形である。主軸方向はN-28°-Wである。壁は高さ3～8 cmほどで、外傾している。

床 平坦で、中央部が硬化している。

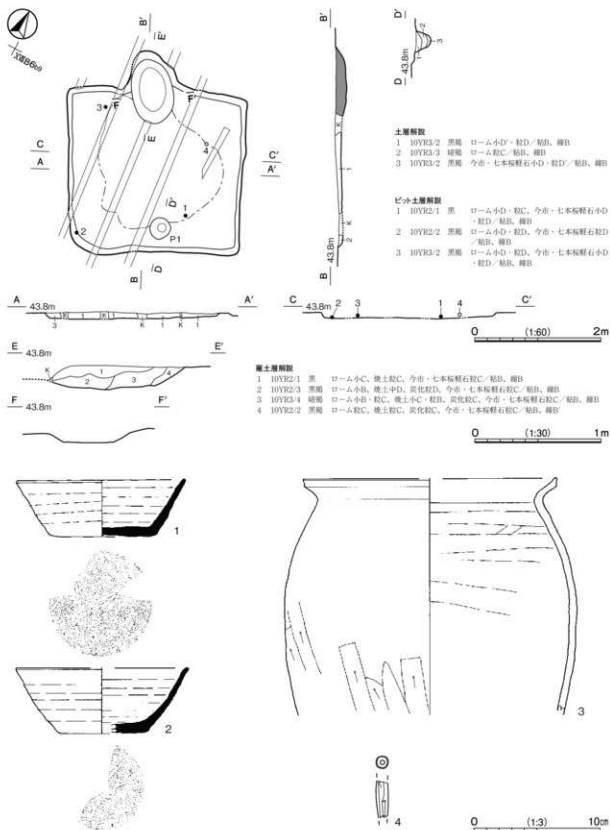
竈 北西壁の中央部に位置している。遺存状態が悪く、袖部は残存していない。確認できた規模は、焚口から煙道部まで115 cmで、燃焼部幅は65 cmである。火床部は楕円形で、床面を8 cmほど掘りくぼめている。赤変硬化していない。煙道部は壁外に59 cmほど張り出し、緩やかに立ち上がっている。

ピット 1か所。P 1は径35 cmほど、深さ23 cmで、竈に対峙した南東壁際に位置していることや床面の硬化状況から、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層できる。含有物の少ない黒褐色土が主体であることから、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片32点(環1、甕31)、須恵器片5点(環3、甕2)、土製品1点(管状土錘)が出土している。遺物は主に北部から散在して出土している。1は南東部、2は南西コーナー部、3は北西部、4は北東部の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第 44 図 第 265 号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第20表 第265号竪穴建物跡出土遺物一覧(第44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	132	4.5	8.0	長石・石英・針状物質	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り痕ナデ	覆土下層	70% PL20
2	須恵器	坏	[136]	5.2	6.8	長石・石英・針状物質	黄灰	普通	底部ヘラ削り	覆土下層	30% ヘラ記号「-」
3	土師器	甕	[200]	[186]	-	長石・石英・赤色粘土・磁器	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	30%

番号	器種	長さ	径	口径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
4	管状土師	(29)	1.0	0.35	(2.38)	長石・石英	にぶい橙	外面ナデ 両端破損	覆土下層	

第266号竪穴建物跡(第45図 第21表 PL6・7・20)

位置 B区中央部のⅧB 6c8区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外のため、確認できた規模は、南北軸3.48m、東西軸0.95mである。南北軸方向はN-19°-Wで、方形か長方形と推定できる。壁は高さ30cmほどで、ほぼ直立している。

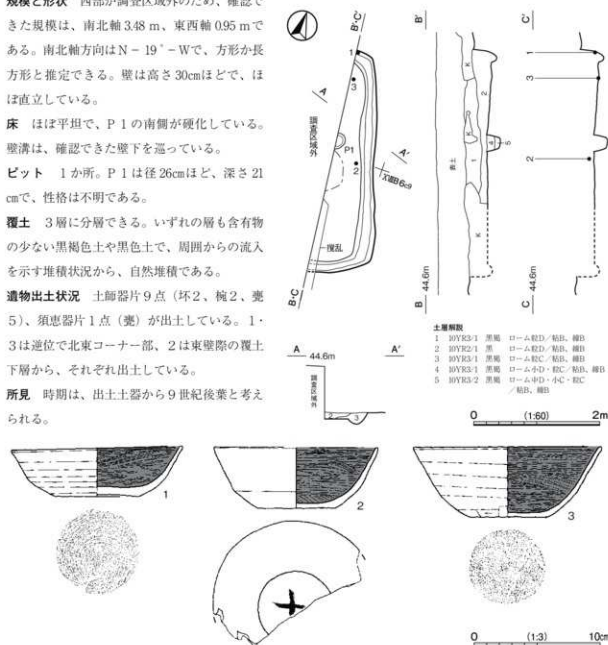
床 ほぼ平坦で、P1の南側が硬化している。壁溝は、確認できた壁下を巡っている。

ピット 1か所。P1は径26cmほど、深さ21cmで、性格は不明である。

覆土 3層に分層できる。いずれの層も含有物の少ない黒褐色土や黒色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片9点(坏2、碗2、甕5)、須恵器片1点(甕)が出土している。1・3は逆位で北東コーナー部、2は東壁際の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第45図 第266号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第21表 第266号竪穴建物跡出土遺物一覧(第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	13.6	4.0	6.5	灰白・石英・赤色粘土	青褐色	普通	内面横位へう磨き 底部90度切り 黒色処理	覆土下層	70%
2	土師器	碗	[128]	4.8	6.0	灰白・石英・赤色粘土	橙	普通	内面横位へう磨き 底部90度へう磨き 黒色処理	覆土下層	50% PL20 遺書「十」
3	土師器	碗	14.8	5.6	6.0	灰白・石英・赤色粘土	橙	普通	体部下端手持ちへう磨き 内面横位へう磨き 底部へう磨き後ナデ 黒色処理	覆土下層	95% PL20

第267号竪穴建物跡(第46・47図 第22表 PL 7)

位置 B区北部のⅧA 6和区、標高44 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸330 m、短軸305 mの方形で、主軸方向はN-16°-Wである。壁は高さ20~24 cmで、外傾している。北壁の東側は西側に比べて30 cmほど三角形状に張り出している。

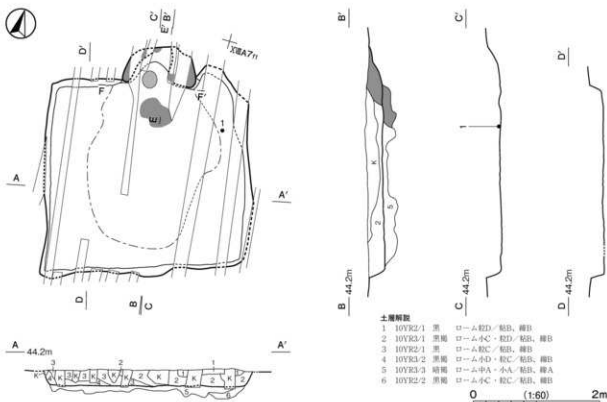
床 は平坦で、壁際を除いて硬化している。貼床は、地山を複数の楕円形や不定形の土坑状に掘り込み、ロームブロックを含む第5・6層を5~23 cm埋土して構築している。

竈 北壁の中央部に位置している。攪乱のため遺存状態が悪く確認できた規模は、焚口から煙道部まで80 cm、燃焼部幅は55 cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は楕円形に赤変硬化している。煙道部は壁外に50 cmほど張り出し、緩やかに立ち上がっている。右袖部の先端からは砂岩礫が出土しており、竈の補強材として利用したと考えられる。

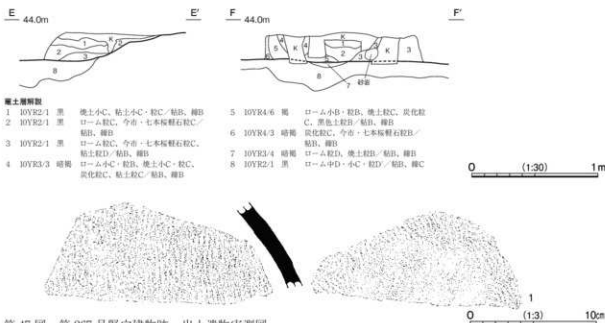
覆土 4層に分層できる。ロームブロックが不規則に含まれていることから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片5点(欠)、須恵器片1点(欠)、礫4点(砂岩3、石英斑岩1)、不明金属製品1点が出土している。1は北東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器や隣接する竪穴建物跡と主軸方向を同一にすることから9世紀代と考えられる。



第46図 第267号竪穴建物跡実測図



第47図 第267号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第22表 第267号竪穴建物跡出土遺物一覧(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	甕	—	(6.8)	—	長石・石英・針状物質	灰	普通	体部外面縦方向に凹凸	竪穴下層	5%

第268号竪穴建物跡(第48図 第23表 PL 7)

位置 B区中央部のⅢB 6 b0区、標高44 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第29号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.57 m、短軸3.48 mの方形で、主軸方向はN-28°-Wである。壁は高さ5~11 cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が硬化している。貼床はローム粒子を含む第3層を5 cmほど埋土して構築している。

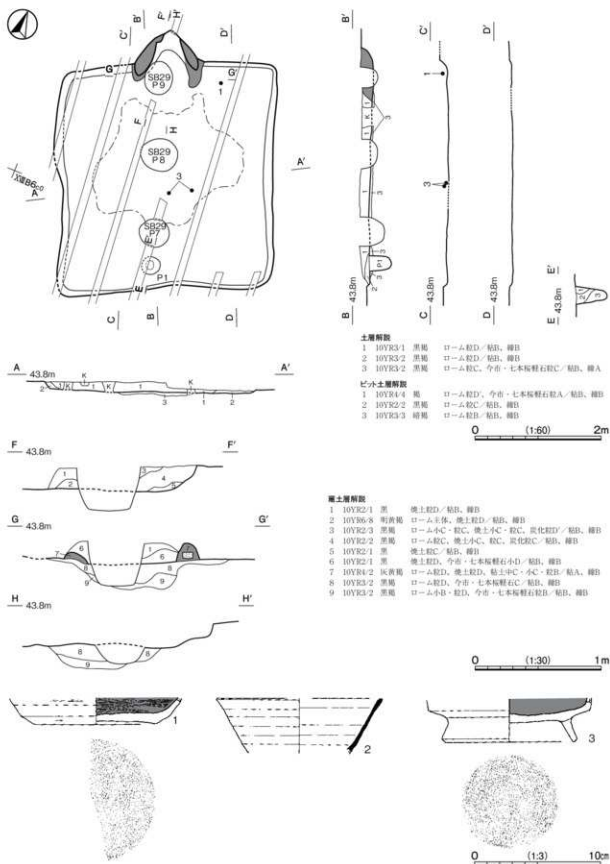
竈 北壁の中央部に位置している。規模は焚口から煙道部まで133 cmで、燃烧部幅は73 cmである。燃烧部・袖部は地山を20 cmほど掘りくぼめ、第8・9層を埋土して整地している。袖部は整地面の上に、第7層を積み上げ構築している。右袖部には芯材として凝灰質泥岩の切石を埋設している。火床部は床面とほぼ同じ高さである。赤変硬化していない。煙道部は壁外に52 cmほど張り出し、緩やかに立ち上がったのち、奥壁で直立している。

ピット 1か所。P 1は径30 cmほど、深さ45 cmで、竈に對峙した南東壁際に位置していることや床面の硬化状況から、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層に分層できる。いずれの層も含有物の少ない黒褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片64点(坏21、高台付坏2、甕41)、須恵器片11点(坏10、甕1)、切石1点(凝灰質泥岩)が出土している。遺物は全域から散在して出土している。1・2は北部、3は中央部の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第 48 図 第 268 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第23表 第268号竪穴建物跡出土遺物一覧(第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	—	(21)	9.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面横穴へう磨き・外面下縁回転へう磨り・底部回転へう磨り後ナデ 黒色発色	覆土下層	20%
2	須恵器	坏	(130)	(44)	—	長石・石英・針状物質	黄灰	普通	ロクロナデ	覆土下層	20%
3	土師器	高台付坏	—	(34)	10.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転へう磨り後高台貼り付け 黒色発色	覆土下層	30%

第269号竪穴建物跡(第49・50図 第24表 PL 7)

位置 D区南部のⅧG 7h7区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外のため、確認できた規模は、南北軸2.94m、東西軸2.52mである。主軸方向はN-71°-Eで、方形と推定できる。壁は高さ32~44cmで、ほぼ直立している。

床 硬化した中央部がやや高く、壁に向かって緩やかに下っている。貼床は、地山を楕円形や不定形の土坑状に掘り込み、ロームブロックを含む第4・5層を6~15cmほど埋土して構築している。

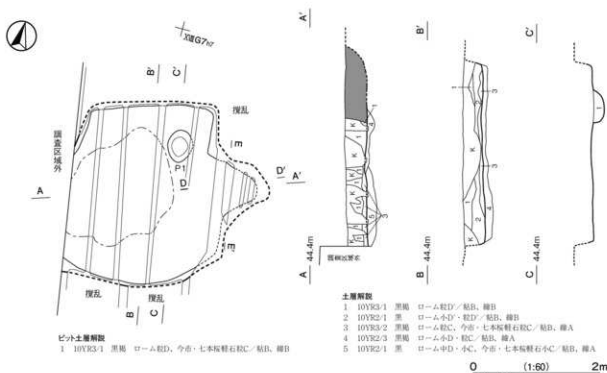
竈 東壁の中央部に位置している。攪乱のため燃焼部幅が80cmほど、煙道部の壁外への張り出しは70cmほどと推定できる。袖部は確認できず、火床部は床面とほぼ同じ高さである。赤変硬化していない。

ピット 1か所。P1は長径52cm、短径40cm、深さ15cmで、性格は不明である。

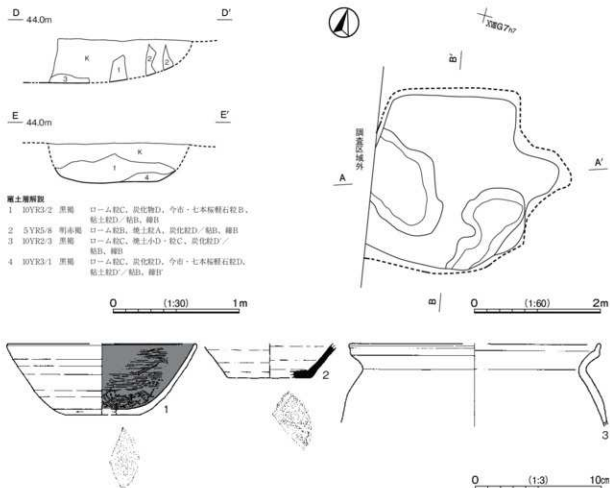
覆土 3層に分層できる。いずれの層も含有物の少ない黒褐色土や黒色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片341点(坏15、高台付坏1、皿1、甕324)、須恵器片18点(坏7、蓋1、瓶1、甕9)、灰釉陶器片2点(瓶)、礫14点(凝灰質泥岩)が出土している。遺物は主に北部の覆土中から出土している。1・2は北東部の覆土下層から、3は竈の覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第49図 第269号竪穴建物跡実測図



第50図 第269号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第24表 第269号竪穴建物跡出土遺物一覧(第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	使用	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[148]	5.6	[60]	長石・石英・赤色粘土	にぶい赤黄	普通	内面へう磨き 底部回転へう割り	覆土下層	20%
2	須恵器	坏	—	[28]	[66]	長石・石英	黄灰	普通	底部回転へう割り	覆土下層	10% へう記号「一」
3	土師器	甕	[199]	(65)	—	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 内面ナデ	覆土下層	5%

第270号竪穴建物跡(第51図 第25表)

位置 D区中央部のⅢF 777区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

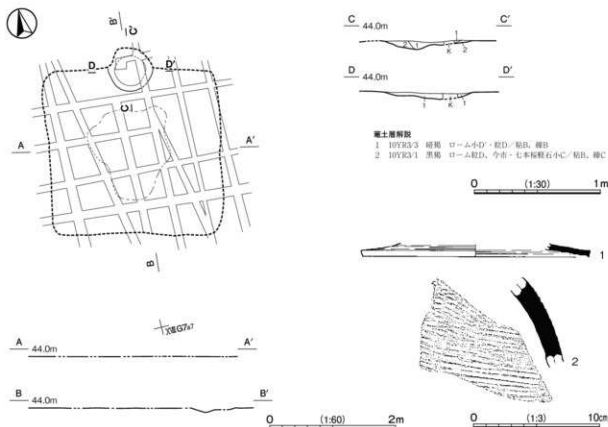
規模と形状 上部は削平され、確認できた規模は長軸271m、短軸262mの方形である。主軸方向はN-14°-Eである。

床 平坦で、中央部が硬化している。

竈 北壁の中央部に位置している。削平と攪乱のため、燃焼部幅が50cmほど、煙道部の壁外への張り出しは35cmほどと推定できる。袖部は確認できず、火床部は床面を7cmほど掘りくぼめている。赤変硬化していない。

遺物出土状況 土師器片10点(坏1、甕9)、須恵器片4点(蓋1、甕3)が出土している。1・2はいずれも竈の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器と隣接する竪穴建物跡と主軸方向を同一にすることから9世紀代と考えられる。



第51図 第270号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第25表 第270号竪穴建物跡出土遺物一覧(第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	壺	[180]	(10)	—	長石・石英	黄灰	普通	口クロナデ	竈覆土	5%
2	須恵器	甕	—	(69)	—	長石・石英	灰黒	普通	体部外面横位平行叩き	竈覆土	5%

第271号竪穴建物跡(第52・53図 第26表 PL 7)

位置 D区北部のⅢF7h5区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.10m、短軸2.95mの方形で、主軸方向はN-3°-Wである。壁は高さ15～22cmで、外傾している。

床 硬化した中央部から、南壁に向かって緩やかに下り傾斜している。貼床は、南西コーナー部から中央部にかけて地山を複数の楕円形や不定形の土坑状に掘り込み、ロームブロックを含む第4～6層を6～25cmほど埋土して構築している。

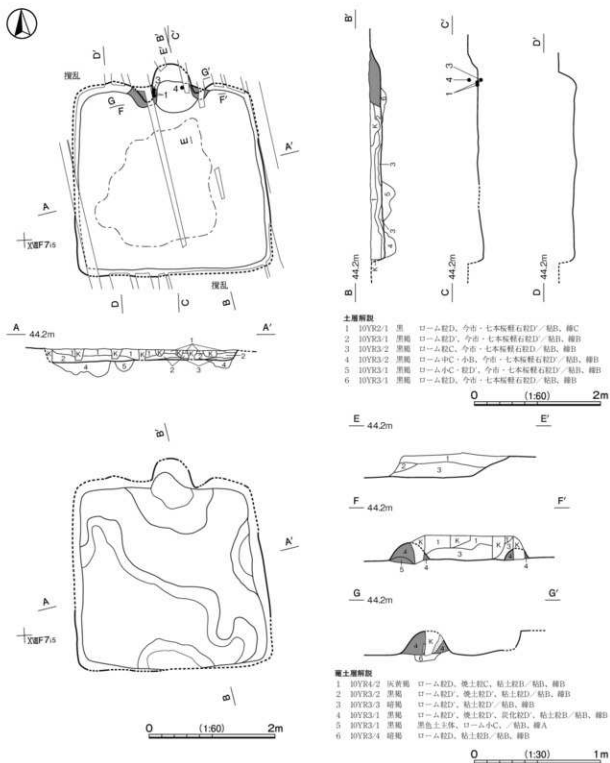
竈 北壁のほぼ中央部に位置している。規模は焚口から煙道部まで78cmで、燃焼部幅は57cmである。燃焼部・袖部は地山を8cmほど掘りくぼめ、第6層を埋土して整地している。袖部は整地面の上に、第4・5層を積み上げて構築している。左袖部は凝灰質泥岩や土師器坏・甕片を補強材として使用している。火床部は楕円形で、床面を5cmほど掘りくぼめている。赤変硬化していない。煙道部は壁外に30cmほど張り出し、緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。いずれの層も含有物の少ない黒色土や黒褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況

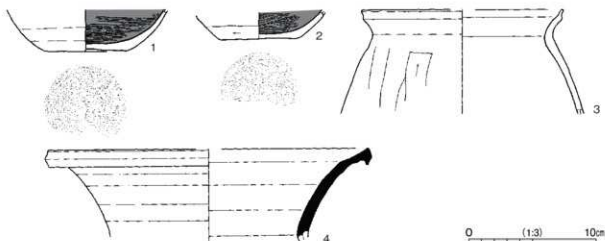
から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 381 点（坏 33、皿 1、甕 347）、須恵器片 20 点（坏 9、甕 11）、石製品 1 点（凝灰質泥岩製支脚）、礫 7 点（凝灰質泥岩）が出土している。ほかに混入した古墳時代の土師器片 16 点、陶器片 2 点が出土している。遺物は主に北部の覆土中から散在して出土している。1・3 は竈左袖部の内部から、2 は南東コーナー部の覆土上層から、4 は竈の覆土上層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。



第 52 図 第 271 号竪穴建物跡実測図



第53図 第271号竪穴建物跡出土実測図

第26表 第271号竪穴建物跡出土遺物一覧(第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	他成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	(33)	63	長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	内面横穴ヘタ磨き 底部回転ヘタ切り 黒色施	竈左袖部	40%
2	土師器	坏	-	(22)	60	長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	内面横穴ヘタ磨き 底部回転ヘタ切り 黒色施	竈土上層	40%
3	土師器	甕	[157]	(81)	-	長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘタ磨き 内面ナデ	竈左袖部	10%
4	須恵器	甕	[252]	(74)	-	長石・石英	にぶい橙	不良	口縁部ナデ	竈覆土上層	5%

第272号竪穴建物跡(第54・55図 第27表 PL 7・20)

位置 D区北部のⅢF 7e4区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外のため、確認できた規模は、南北軸360m、東西軸322mで、方形と推定できる。主軸方向はN-1°-Wである。壁は高さ22～31cmほどで、外傾している。

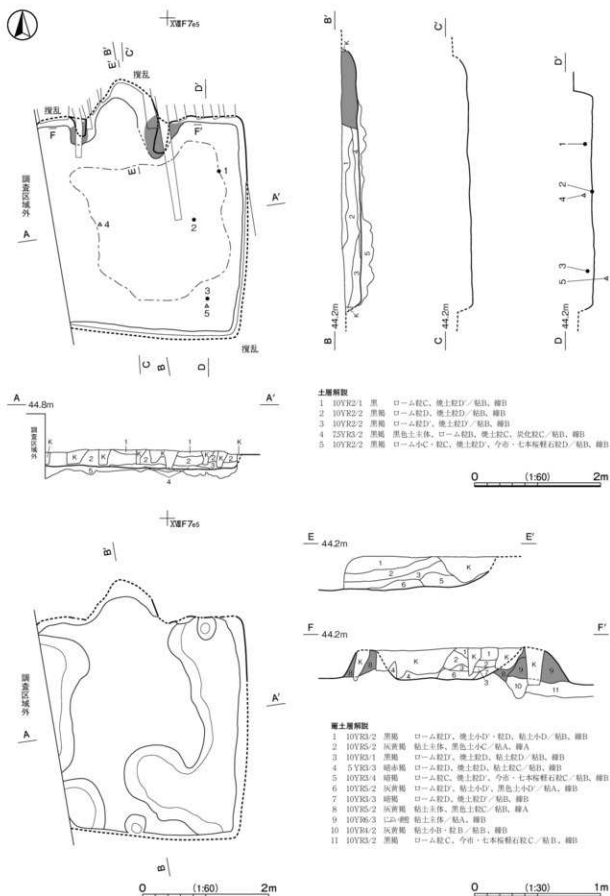
床 平坦で、壁際を除いて硬化している。貼床は、東西の壁沿いを帯状に掘り込み、ロームブロックを含む第5層を3～20cmほど埋土して構築している。

竈 北壁の中央部に位置している。攪乱のため、焚口から煙道部まで120cmほど、燃焼部幅は65cmほどと推定できる。袖部は貼床埋土や地山の上に、第8・9層を積み上げ構築している。火床部は床面とほぼ同じ高さである。赤変硬化していない。煙道部は壁外に60cmほど張り出し、外傾して立ち上がっている。

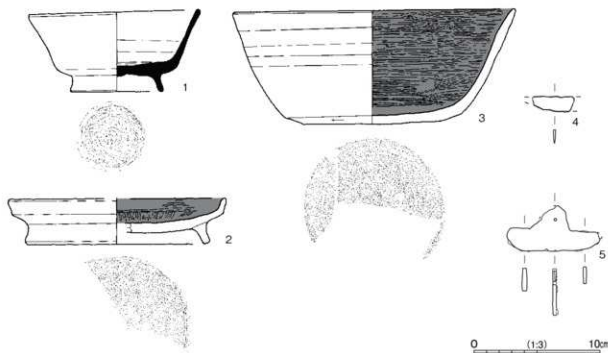
覆土 4層に分層できる。いずれの層も含有物の少ない黒色土や黒褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片521点(坏16、盤1、鉢1、甕503)、須恵器片71点(坏41、高台付坏10、蓋1、甕19)、金属製品5点(刀子1、火打金1、不明3)、礫2点(凝灰質泥岩)が出土している。ほかに混入した古墳時代の土師器片32点、陶器片1点、磁器片1点、瓦質土器片1点が出土している。遺物は主に南東部の覆土中から散在して出土している。1は北東コーナー部、3は南東コーナー部、4は中央部の覆土中層から、2は中央部東壁寄りの床面から、5は南東コーナー部の貼床埋土から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第54図 第272号堅穴建物跡実測図



第55図 第272号竪穴建物跡出土遺物実測図

第27表 第272号竪穴建物跡出土遺物一覧(第55図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼 成	特 徴	出土位置	備 考
1	須恵器	高台付杯	131	6.5	7.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中層	80% PL20
2	土師器	盤	[172]	3.7	[142]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面押減調整不明に付付け 黒色処理	床面	30%
3	土師器	鉢	222	9.2	11.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面横位ヘラ磨き 内面横位ヘラ磨き 外周部下下面・底部回転ヘラ磨き 黒色処理	覆土中層	80% PL20 へり張り1+

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
4	刀子	(33)	(12)	(02)	(195)	鉄	切先部・基部欠損 刃部断面三角形	覆土中層	
5	火打金	(74)	(36)	0.3	(2021)	鉄	頂部山型 孔あり	胎土埋土	PL20

第273号竪穴建物跡(第56・57図 第28表 PL7・20)

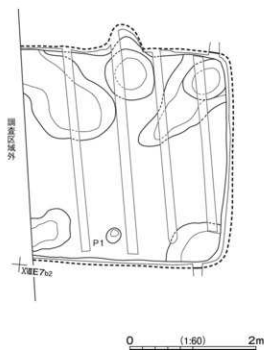
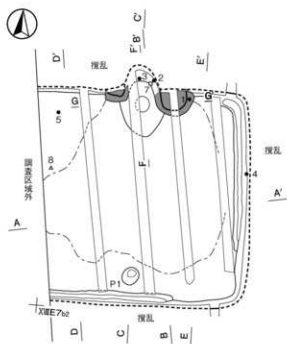
位置 C区南部のⅢE 7a2区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外のため、確認できた規模は、南北軸3.48m、東西軸3.30mで、方形と推定できる。主軸方向はN-5°-Wである。壁は高さ47cmほどで、直立している。

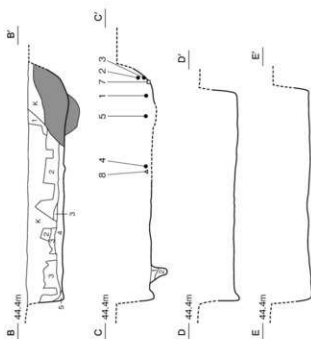
床 平坦で、壁際を除いて硬化している。壁溝は、東壁下と南壁下の一部で確認した。貼床は、各コーナー部を不定形の土坑状に掘り込み、ロームブロックを含む黒褐色土を埋土して構築している。中央部は地山を平らに掘り残して床としている。

竈 北壁のやや東寄りに位置している。規模は焚口から煙道部まで114cmで、燃烧部幅は48cmである。燃烧部・袖部は地山を20cmほど掘りくぼめ、第7層を埋土して構築している。袖部は整地面に上にローム粒子を微量に含む第4～6層を積み上げて構築している。火床部は楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめている。赤変硬化していない。煙道部は壁外に44cmほど張り出し、外傾して立ち上がっている。

ビット 1か所。P1は径29cm、深さ21cmで、竈に対峙した南壁近くに位置していることや床面の硬化状況から、出入口施設に伴うビットと考えられる。



0 (1:60) 2m



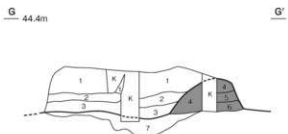
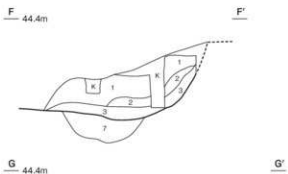
土層解説

- 1 10YR3/1 黒褐 コーム小D・粒D／粘土、礫B
- 2 10YR3/2 黒褐 コーム小D・粒C／粘土、礫B
- 3 10YR3/4 暗褐 コーム小D・粒B、炭化粒D／粘土、礫B
- 4 10YR3/3 暗褐 コーム小D・粒C、炭化粒D／粘土、礫B
- 5 10YR3/4 暗褐 コーム小D・粒B／粘土、礫B

ピット土層解説

- 1 10YR2/2 黒褐 黒色土主体、コーム小C・粒B／粘土、礫B
- 2 10YR4/3 棕色黄褐 コーム主体、黒色土粒B／粘土、礫B

0 (1:60) 2m



土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐 コーム小D・粒B、焼土粒D／粘土、礫B
- 2 10YR4/2 灰黄褐 コーム粒C、粘土小D／粘土、礫B
- 3 10YR3/1 黒褐 コーム粒B、黒色土小D／粘土、礫B
- 4 10YR3/3 暗褐 コーム粒D、粘土粒B／粘土、礫B
- 5 10YR3/2 黒褐 コーム粒D、焼土粒D、粘土中C・小C／粘土、礫A
- 6 10YR3/1 黒褐 コーム小D・粒D、焼土粒B／粘土、礫B
- 7 10YR3/2 黒褐 コーム中C・小B／粘土、礫B

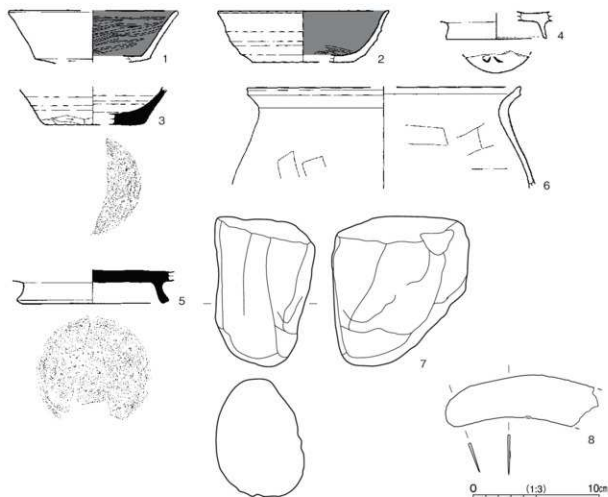
0 (1:30) 1m

第 56 図 第 273 号竪穴建物跡実測図

覆土 5層に分層できる。いずれの層も含有物の少ない黒褐色土や暗褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片170点（坏34、高台付坏4、甕132）、須恵器片15点（坏9、高台付坏1、盤1、甕4）、石製品1点（凝灰質泥岩製支脚）、金属製品1点（鎌）が出土している。ほかに混入した古墳時代の土師器片3点、土師質土器片1点、陶器片1点が出土している。遺物は主に東部の覆土中から散在して出土している。1は北部、4は東壁際、5は北西部、8は西部の覆土下層から、2・3は甕の覆土下層から、6は北西部の覆土中層から、7は竈火床部奥の底面から倒れた状態で、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第57図 第273号竪穴建物跡出土遺物実測図

第28表 第273号竪穴建物跡出土遺物一覧（第57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	晩成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[133]	(41)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面下端回転ヘラ削り 内面横紋ヘラ削き 黒色処理	覆土下層	30%
2	土師器	坏	[126]	40	[80]	長石・石英	橙	普通	内面ヘラ削き 底部穿滅 黒色処理	甕覆土下層	20%
3	須恵器	坏	-	(29)	[7.8]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ削り	甕覆土下層	40%
4	土師器	高台付坏	-	(21)	[8.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ削き 底部回転ヘラ削り後高台貼り付け 黒色処理	覆土下層	10% 彫書 [□]
5	須恵器	盤	-	(2.6)	11.0	長石・石英・雲母・斜紋物質	靑灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土下層	20% 彫刻 [~]
6	土師器	甕	[21.5]	(7.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	支脚	119	8.0	109	762.87	凝灰質泥岩	切石 被熱痕	竈底面	

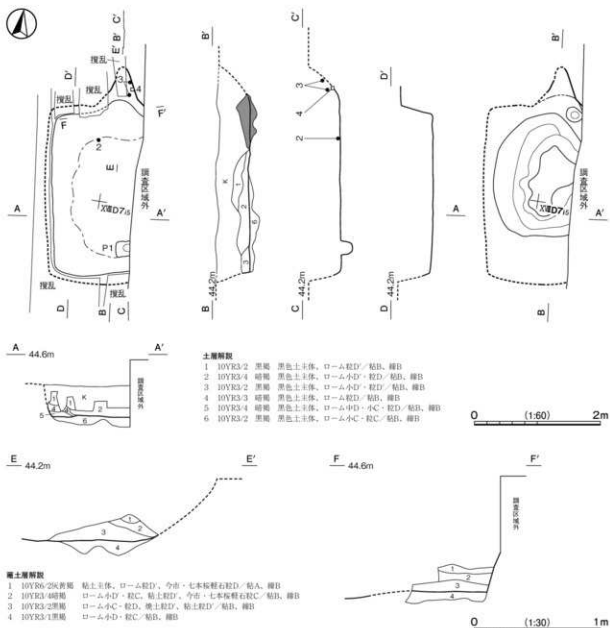
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	甕	(121)	3.4	0.2	(35.19)	鉄	基部欠損 曲刃	覆土下層	PL20

第274号竈穴建物跡 (第58・59図 第29表 PL8)

位置 C区南部のⅧD7h4区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 東部が調査区域外のため、確認できた規模は、南北軸2.77m、東西軸1.52mで、長方形と推定できる。主軸方向はN-9°-Wである。壁は高さ50～53cmで、外傾している。

床 平坦で、壁際を除いて硬化している。貼床は、壁沿いを深く掘り込み、ロームブロックを含む第6層を5



第58図 第274号竈穴建物跡実測図

～15cmほど埋土して構築している。

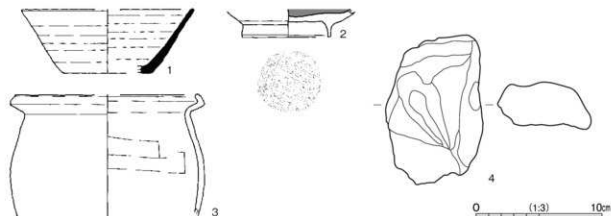
竈 北壁の中央部に位置していると推定できる。左袖部は攪乱され、右袖部は調査区域外のため不明である。燃焼部は地山を10cmほど掘りくぼめ、第4層を埋土して整地している。火床部は床面と同じ高さで、赤変硬化していない。煙道部は壁外に63cmほど張り出し外傾している。

ピット 1か所。P1は深さ20cmで、竈に対峙した南壁近くに位置していることや床面の硬化状況から、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層に分層できる。大半が攪乱を受けているため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片123点（坏21、高台付坏1、甕101）、須恵器片23点（坏12、高台付坏1、甕10）、石製品1点（凝灰質泥岩製支脚）、礫2点（凝灰質泥岩、砂岩）が出土している。ほかに混入した古墳時代の土師器片4点、土師質土器片1点が出土している。遺物は覆土中から散在して出土している。1は竈の覆土中から、2は北西コーナー部付近の覆土下層から、4は竈の覆土下層から倒れた状態で、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第59図 第274号竪穴建物跡出土遺物実測図

第29表 第274号竪穴建物跡出土遺物一覧（第59図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼 成	特 徴	出土位置	備 考
1	須恵器	坏	[13.5]	5.0	[7.2]	長石・石英・細礫・鉄滓物質	灰	普通	ロクロナデ	竈覆土	20%
2	土師器	高台付坏	—	(2.2)	7.0	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	体部・底部摩滅 高台貼り付け 黒色処理	覆土下層	20%
3	土師器	甕	[14.4]	(9.6)	—	長石・石英・赤緑・赤色粘土	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部内面ナデ	竈覆土下層	10%

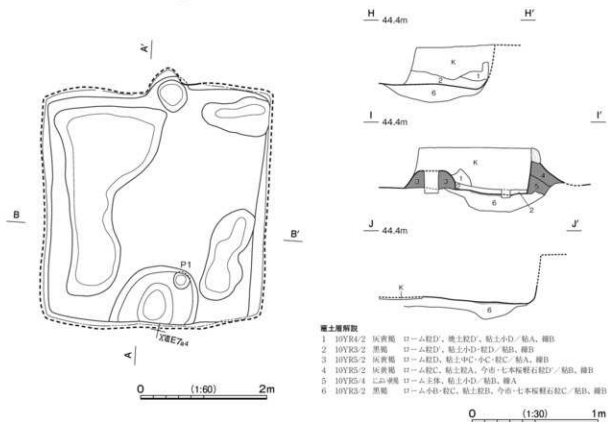
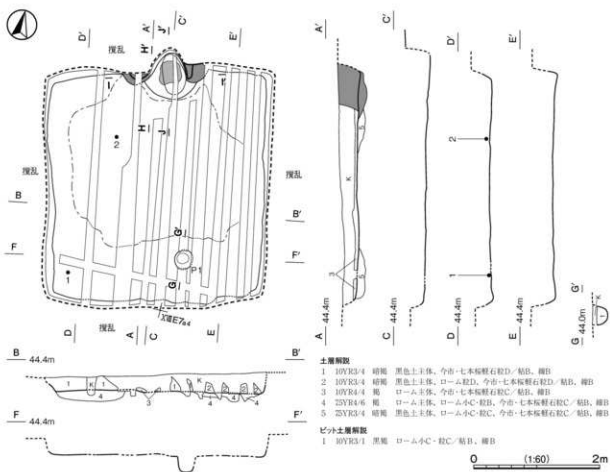
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
4	支脚	11.8	7.7	3.8	211.30	凝灰質泥岩	切石 被熱痕	竈覆土下層	

第275号竪穴建物跡（第60・61図 第30表 PL20）

位置 C区南部のⅡD7j3区、標高44mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 遺構の大半が攪乱されているが、長軸3.84m、短軸3.63mの方形と推定できる。主軸方向はN-13°-Wである。壁は高さ24～40cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、壁際を除いて硬化している。貼床は、壁際やコーナー部を複数の楕円形や不整形の土坑状に掘り込み、ロームブロックを含む第4・5層を5～15cmほど埋土して構築している。



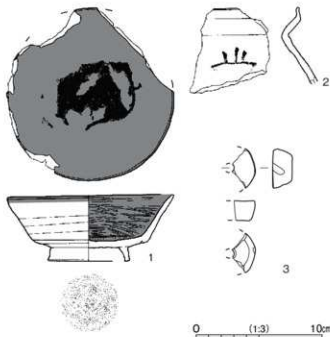
第 60 図 第 275 号竪穴建物跡実測図

竈 北壁の中央部に位置している。視乱のため、焚口から煙道部まで80cmほど、燃烧部幅は52cmほどと推定でき、燃烧部・袖部は地山を14cmほど掘りくぼめ、第6層を埋土して整地している。袖部は整地面と地山の上に、第3～5層を積み上げ構築している。右袖部は、凝灰質泥岩を構築材としている。火床部は楕円形で、床面を4cmほど掘りくぼめている。火床面は第6層の上面で、赤変硬化している。煙道部は壁外に28cmほど張り出し、直立している。

ピット 1か所。P1は径30cm、深さ25cmで、竈に対峙した南壁近くに位置していることや床面の硬化状況から、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層できる。大半が視乱を受けているため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片286点（坏37、高台付坏3、甕246）、須恵器片20点（坏4、高台付坏2、蓋1、甕13）、土製品1点（紡錘車）、切石1点（凝灰質泥岩）が出土している。ほかに混入した陶器片2点、磁器片1点が出土している。1は南西コーナー部の床面から逆位で、2は北西部の覆土下層から、それぞれ出土している。



第61図 第275号竈穴建物跡出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第30表 第275号竈穴建物跡出土遺物一覧（第61図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	134	5.4	6.5	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外周下端回転へう張り 内面へう磨き 底部回転へう張り後高台貼り付け 黒色処理	床面	80% P1.20 内面磨付着
2	土師器	甕	—	(6.7)	—	長石・石英・赤色粘土	にぶい赤褐色	普通	口縁部横ナデ 体部ナデ	覆土下層	5% P1.20 磨着（蓋）

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
3	紡錘車	[40]	16	[08]	(8.06)	長石・石英	凝灰	外面ナデ 一方向からの穿孔	覆土	

第276号竈穴建物跡（第62図 第31表）

位置 A区南部のⅪJ 6g9区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外のため、確認できた規模は、北東・南西軸230m、北西・南東軸227mで、方形と推定できる。北東・南西軸方向はN-62°-Eである。壁は高さ25～32cmで、外傾している。

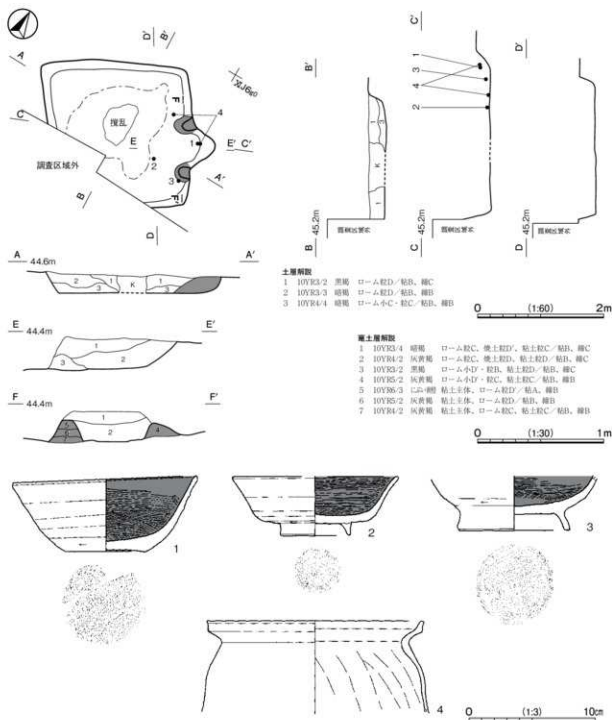
床 平坦で、中央部が硬化している。

竈 北東壁のやや南寄りに位置している。規模は焚口から煙道部まで105cmで、燃烧部幅は46cmである。袖部は地山の上に、粘土主体の第4～7層を積み上げ構築している。火床部は床面とほぼ同じ高さで、赤変硬化していない。煙道部は壁外に38cmほど張り出し、緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。いずれの層も含有物の少ない黒褐色土や暗褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 117 点（坏 22、高台付坏 2、甕 93）、須恵器片 1 点（甕）が出土している。ほかに混入した縄文土器片 1 点が出土している。遺物は主に竈の覆土中やその周辺から出土している。1 は竈の覆土上層から、2 は東部の床面から、3 は東コーナー部の覆土下層から、それぞれ出土している。4 は竈の覆土中層から出土した破片と竈左袖近くの覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉と考えられる。



第 62 図 第 276 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第31表 第276号竪穴建物跡出土遺物一覧(第62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
1	土師器	環	14.5	6.0	6.4	長石・石英	橙	普通 体部外面下縁回転ヘリ割り 内面ヘリ磨き 底面回転ヘリ切り 黒色色澤	覆土上層	60%
2	土師器	高台付杯	[130]	4.7	5.4	長石・石英・赤色砂子	橙	普通 体部外面下縁回転ヘリ割り 内面ヘリ磨き 底面回転ヘリ切り 高台貼付け後ナデ 黒色色澤	床面	40%
3	土師器	高台付杯	-	(4.3)	(8.9)	長石・石英	橙	普通 体部外面下縁回転ヘリ割り 内面ヘリ磨き 底面回転ヘリ切り 高台貼付け後ナデ 黒色色澤	覆土下層	40%
4	土師器	壺	17.0	(7.3)	-	長石・石英	にじみ赤黄	普通 口縁部横ナデ 体部内面ナデ	覆土中層 覆土下層	20%

第32表 平安時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	(cm)			柱穴	土間口	ピット	砂・土				
263	第1699号	N-11°-W	方形	2.99×2.93	10-12	平坦	一部	-	-	-	竪1	-	土師器 須恵器	9世紀中葉	本跡→SK30、SK1703
264	第1699号	N-14°-W	方形	3.70×3.65	25-45	平坦	一部	-	1	2	竪1	-	土師器 須恵器 灰釉陶器 土製紡車 瓦石 刀子	9世紀後半	
265	第1699号	N-28°-W	方形	2.83×2.68	3-8	平坦	-	-	1	-	竪1	-	土師器 須恵器 管状土練	9世紀中葉	SK1710→本跡
266	第1699号	N-19°-W	非矩形	(3.88)×(0.95)	30	平坦	全周	-	-	1	-	-	土師器 須恵器	9世紀後半	
267	第1699号	N-16°-W	方形	3.30×3.05	20-24	平坦	-	-	-	-	竪1	-	土師器 須恵器 不明金属製品	9世紀代	
268	第1699号	N-28°-W	方形	3.57×3.48	5-11	平坦	-	-	1	-	竪1	-	土師器 須恵器	9世紀中葉	本跡→SK29
269	第1699号	N-71°-E	[方形]	[2.94]×[2.52]	32-44	平坦	-	-	1	-	竪1	-	土師器 須恵器 灰釉陶器	9世紀中葉	
270	第1699号	N-14°-E	[方形]	[2.71]×[2.62]	-	平坦	-	-	-	-	竪1	-	土師器 須恵器	9世紀代	
271	第1699号	N-3°-W	方形	3.10×2.95	15-22	平坦	-	-	-	-	竪1	-	土師器 須恵器 灰釉陶器 土製紡車 刀子 火打金 不明金属製品	9世紀中葉	
272	第1699号	N-1°-W	[方形]	[3.60]×[3.22]	22-31	平坦	-	-	-	-	竪1	-	土師器 須恵器 灰釉陶器 土製紡車 刀子 火打金 不明金属製品	9世紀中葉	
273	第1699号	N-5°-W	[方形]	[3.48]×[3.30]	47	平坦	-	-	1	-	竪1	-	土師器 須恵器 灰釉陶器 土製紡車 刀子 火打金 不明金属製品	9世紀中葉	
274	第1699号	N-9°-W	[長方形]	2.77×[1.52]	50-53	平坦	-	-	1	-	竪1	-	土師器 須恵器 灰釉陶器 土製紡車 刀子 火打金 不明金属製品	9世紀中葉	
275	第1699号	N-13°-W	[方形]	[3.84]×[3.63]	24-40	平坦	-	-	1	-	竪1	-	土師器 須恵器 土製紡車	9世紀中葉	
276	第1699号	N-62°-E	[方形]	2.30×(2.27)	25-32	平坦	-	-	-	-	竪1	-	土師器 須恵器	9世紀後半	

(2) 掘立柱建物跡

第28号掘立柱建物跡(第63図 PL 8)

位置 A区南部のⅪJ 6c8区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

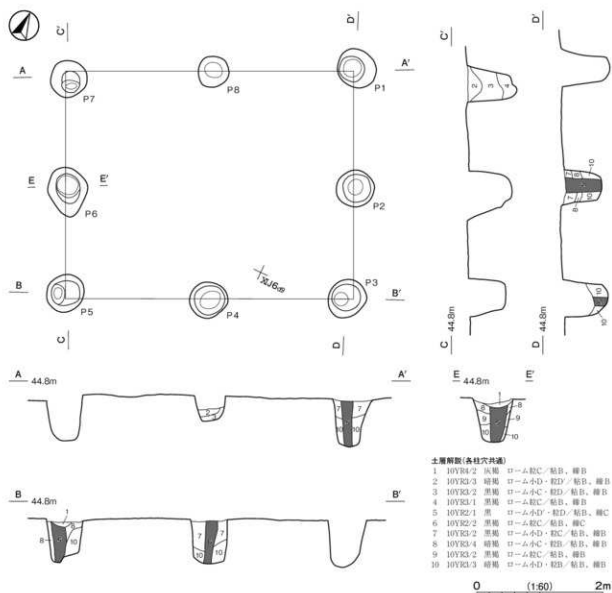
重複関係 第1706号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-65°-Eの東西棟である。規模は桁行4.56m、梁行3.61m、面積は16.46㎡である。柱間寸法は、北桁行が西から2.35m、2.21m、南桁行が西から2.32m、2.24mで、西梁行が北から1.82m、1.79m、東梁行が北から1.83m、1.78mである。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は長径51～80cm、短径49～64cmの円形と楕円形で、深さは41～76cmである。覆土は第1層が柱穴の窪みへの流入土、第2～4層が柱抜き取り後の流入土、第5・6層が柱痕跡、第7～10層が掘方の埋土である。

遺物出土状況 土師器片10点(欠)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片1点が出土している。土師器片は、いずれも細片のため図示できなかった。

所見 詳細な時期は不明であるが、出土した土師器片から、平安時代の可能性が高い。



第63図 第28号掘立柱建物跡実測図

(3) 井戸跡

第11号井戸跡 (第64・65図 第33表 PL 8・21)

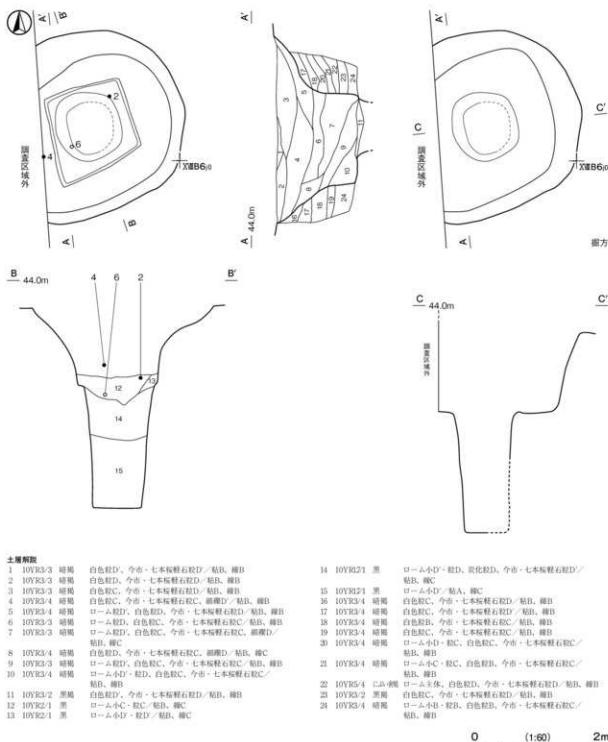
位置 B区南部のⅡB 619区、標高44 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外のため、開口部は推定長径3.10 m、推定短径2.90 mの楕円形と推定できる。確認面から深さ200 cmまで調査したのち、崩落の恐れがあったため、重機を使用して深さ317 cmまで掘削し、粘土層上面で底面を確認した。断面形は漏斗状を呈しており、深さ80 cmで1辺1.1～1.4 mの方形の井戸枠の痕跡を検出した。深さ125 cmより下位は、平面形が径0.7～1.1 mの円形で、底面は平坦である。掘方の平面形は確認面で楕円形、底面で不整な隅丸方形と推定でき、深さ125 cmほどの堅穴状を呈している。底面はほぼ平坦である。

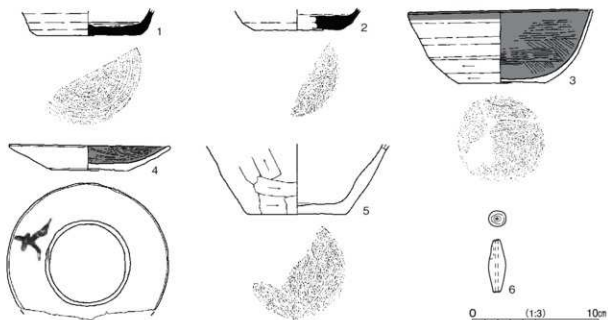
覆土・埋土 24層を確認した。覆土はいずれも含有物の少ない黒褐色土や暗褐色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第16～24層は埋土である。

遺物出土状況 土師器片176点(坏63、高台付坏4、碗1、皿1、甕107)、須恵器片67点(坏43、蓋1、甕23)、土製品1点(管状土錘)が出土している。遺物は主に覆土下層から中層にかけて出土している。1は覆土下層から、2・4・6は覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。



第64図 第11号井戸跡実測図



第 65 図 第 11 号井戸跡出土遺物実測図

第 33 表 第 11 号井戸跡出土遺物一覧 (第 65 図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器 坏	-	(1.9)	8.2	長石・石英・針状物質	灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土下層	10%
2	須恵器 坏	-	(1.5)	[6.8]	長石・石英・針状物質	褐灰	普通	底部ヘラ削り後ナデ	覆土中層	10%
3	土師器 碗	14.4	5.9	6.8	長石・石英・雲母・白色粒状	にぶい黄橙	普通	体部外面下漏回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後ナデ 黒色処理	覆土中層	70%
4	土師器 皿	12.7	2.0	6.0	長石・石英	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り 黒色処理	覆土中層	80% 内21 黒書「大」
5	土師器 甕	-	(5.6)	7.8	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り	覆土上層	10% 木製線刷
番号	器種	長さ	径	口径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
6	管状土師	4.2	1.4	0.2	(7.50)	長石・石英	にぶい黄橙	外面ナデ 端部欠損	覆土中層	

第 12 号井戸跡 (第 66 図 第 34 表 PL 8)

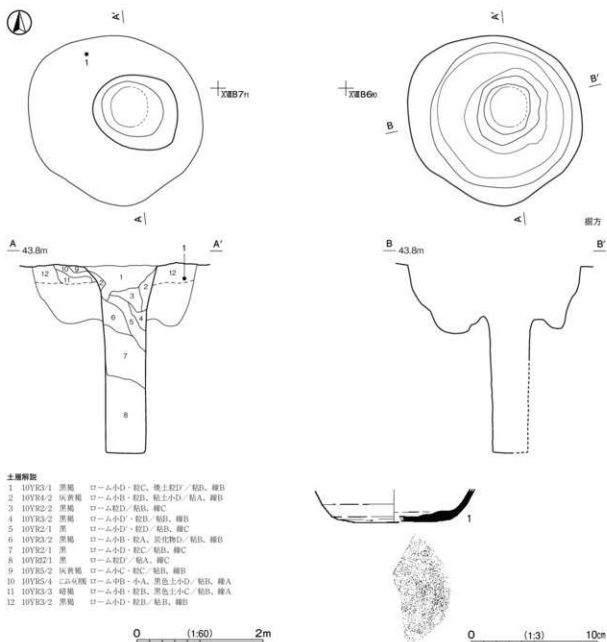
位置 B 区中央部のⅢB 6 Ⅷ 区、標高 44 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は長径 1.35 m、短径 1.17 m の楕円形で、長径方向は N - 70° - W である。確認面から深さ 150 cm まで調査したのち、崩落の恐れがあったため、重機を使用して 295 cm まで掘削し、粘土層よりも上位のローム層中で底面を確認した。断面形は漏斗状を呈しており、深さ 80 cm より下位は、平面形が径 0.6 - 1.0 m の円形で、底面は平坦である。覆土と埋土の境界が明瞭であることから、井戸枠が存在した可能性がある。掘方の平面形は確認面で径 2.8 m ほどの円形で、深さ 100 cm ほどの土坑状を呈している。底面は中央部北東寄りの井戸本体の外縁部を残してドーナツ状に掘り下げており、凹凸がある。

覆土・埋土 12 層を確認した。各層にロームブロックを含み、一方向からの堆積状況を呈していることから、人為堆積である。第 9 - 12 層は埋土で、第 2 層は構築土が崩落したものである。

遺物出土状況 土師器片 1 点 (甕)、須恵器片 1 点 (坏)、礫 1 点 (安山岩) が出土している。1 は埋土から出土している。

所見 時期は、形状と出土土器から、平安時代と考えられる。



第66図 第12号井戸跡・出土遺物実測図

第34表 第12号井戸跡出土遺物一覧(第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	埴	-	(24)	(90)	長石・石英・針状物質	黄灰	良好	底部下縁・底部回転ヘリ削り	黒土	30%

第13号井戸跡(第67図 第35表 PL 8)

位置 D区北部のⅧF 7h7区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

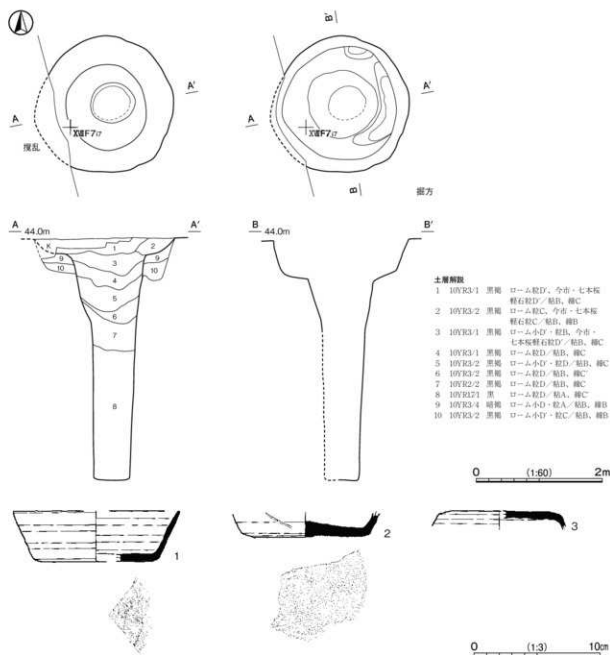
規模と形状 開口部は径2.16mの円形である。確認面から深さ150cmまで調査したのち、崩落の恐れがあったため、重機を使用して383cmまで掘削し、粘土層中で底面を確認した。断面形は漏斗状を呈しており、深さ30cmより下位は、平面形が径0.55～1.2mの円形で、底面は平坦である。掘方の平面形は確認面で径2.16mは

どの円形で、深さ 0.67cm ほどの土坑状を呈している。底面の西半分はほぼ平坦であるが、東側は井戸本体の外縁部の一部を残して溝状に掘り下げており、凹凸がある。

覆土・埋土 10 層を確認した。含有物の少ない黒褐色土が流入した様相を呈していることから、自然堆積である。第 9・10 層は埋土である。

遺物出土状況 土師器片 121 点（坏 10、長頸瓶 1、甕 110）、須恵器片 35 点（坏 25、蓋 3、甕 7）、土製品 1 点（支脚）が出土している。遺物は主に覆土中層から上層にかけて出土している。1・3 は覆土上層から、2 は覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。



第 67 図 第 13 号井戸跡・出土遺物実測図

第35表 第13井戸跡出土遺物一覧(第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[132]	40	[100]	長石・石英・細礫・針状物質	灰	良好	底部回転ヘラ削り	覆土上層	20%
2	須恵器	坏	-	(20)	[102]	長石・石英・針状物質	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土下層	10% ヘラ記号「-」
3	須恵器	蓋	-	(14)	-	長石・細礫	黄灰	良好	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	10%

第36表 奈良・平安時代井戸跡一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
11	図B69	-	[円形]	2.97×(2.33)	317	漏斗状	平坦	自然	土師器 須恵器 管状土師	
12	図B68	N-70°-W	楕円形	1.35×1.17	295	漏斗状	平坦	人為	土師器 須恵器	
13	図F737	-	円形	2.16×2.16	388	漏斗状	平坦	自然	土師器 須恵器 土製支脚	

(4) 溝跡

第47号溝跡(第68図 PL8)

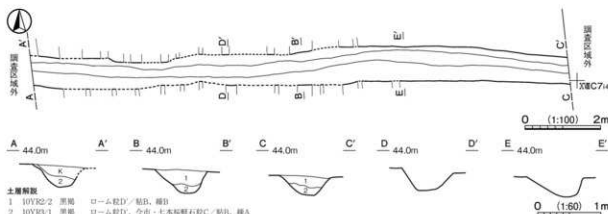
位置 C区北部のⅢC6h0～ⅢC7h3区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 ⅢC6h0区から東方向(N-90°-E)に直線状に延びている。確認できた長さは、14.2mで、上幅0.60～0.92m、下幅0.20～0.38m、深さ30～37cmで、断面形は逆台形状である。壁は外傾している。東西の高低差はほとんどない。

覆土 2層に分層できる。いずれの層も含有物が少なく、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片49点(甕)、須恵器片10点(坏4、蓋1、甕5)、礫1点(砂岩)が出土している。すべて細片のため図示できなかった。

所見 出土した須恵器坏の細片は、9世紀代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。本跡から南に17mほどに位置する第48号溝跡と規模や形状、方向が類似していることから、時期は平安時代と考えられる。性格は、底面に高低差がないことから、区画溝と考えられる。



第68図 第47号溝跡実測図

第48号溝跡 (第69図 第37表 PL.9)

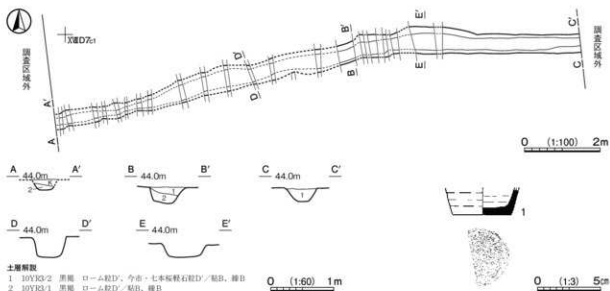
位置 C区北部のⅢD 6c0～ⅢD 7c4区、標高44 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 ⅢD 6c0区から北東方向(N-77°-E)に直線状に延び、ⅢD 7c3区からは東方向(N-90°-E)に延びている。確認できた長さは、14.1 mで、上幅0.30～0.72 m、下幅0.12～0.44 m、深さ17～26 cmで、断面形は逆台形状である。壁は外傾している。底面は、わずかに東方へ傾斜している。

覆土 2層に分層できる。いずれの層も含有物が少なく、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片27点(坏4、甕23)、須恵器片8点(コップ形土器1、甕7)が出土している。1は覆土中から出土している。

所見 本跡から北に17 mほどに位置する第47号溝跡と規模や形状、方向が類似している。時期は、出土土器から平安時代と考えられる。性格は、底面に高低差がないことから区画溝と考えられる。



第69図 第48号溝跡・出土遺物実測図

第37表 第48号溝跡出土遺物一覧 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	コップ形土器	-	(22)	4.6	長石・石英・針状物質	灰褐色	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土	20%

第38表 平安時代溝跡一覧

番号	位置	方向	平面形	規模			断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					
47	ⅢC 6b0～ⅢC 7b3	N-90°-E	直線状	14.2	0.60～0.92	0.20～0.38	30～37	逆台形状	外傾	自然	土師器 須恵器
48	ⅢD 6c0～ⅢD 7c4	N-77°-E N-90°-E	くの字状	14.1	0.30～0.72	0.12～0.44	17～32	逆台形状	外傾	自然	土師器 須恵器

3 中世以降の遺構と遺物

方形竈穴遺構2基、溝跡1条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 方形竪穴遺構

第8号方形竪穴遺構 (第70図 第39表 PL 21)

位置 A区北部のXI G 4 d9区、標高45 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第9号方形竪穴遺構を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.83 m、短軸1.50 mの長方形で、長軸方向はN-2°-Wである。壁は高さ42 cmほどで、ほぼ直立している。

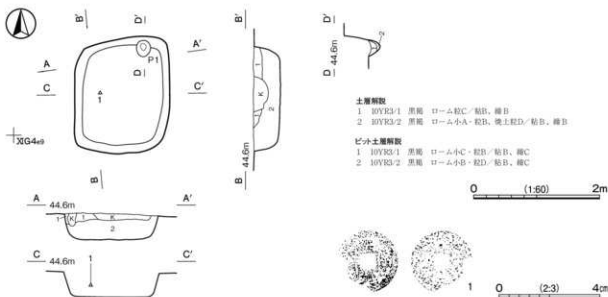
床 平坦で、硬化していない。

ビット 1か所。P1は北東コーナー部に位置している。長径26 cm、短径22 cm、深さ20 cmで、性格は不明である。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 銭貨2点(熙寧元寶、不明)が出土している。ほかに混入した縄文土器片3点、土師器片2点が出土している。1は西壁寄りの覆土中層から出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、出土した銭貨と遺構の規模・形状から鎌倉～室町時代と考えられる。



第70図 第8号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第39表 第8号方形竪穴遺構出土遺物一覧 (第70図)

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
1	熙寧元寶	23.0	0.60	0.10	(1.63)	銅	1068	真書体	覆土中層	PL21

第9号方形竪穴遺構 (第71図 PL 9)

位置 A区北部のXI G 4 d9区、標高45 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.29 m、短軸2.11 mの方形で、長軸方向はN-2°-Wである。壁は高さ24 cmほどで、ほぼ直立している。

床 確認できた範囲は平坦で、硬化していない。

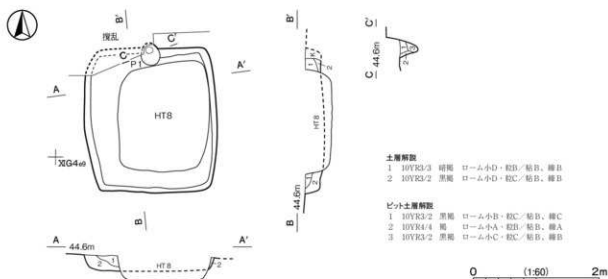
ビット 1か所。P1は北壁の中央部に位置している。径30 cmほどの円形で、確認面からの深さ58 cm、床面

からは28cmである。柱穴と考えられる。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した縄文土器片1点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、重複関係から第8号方形堅穴遺構よりも古い鎌倉～室町時代と考えられる。



第71図 第9号方形堅穴遺構実測図

第40表 中世以降方形堅穴遺構跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形状	規模 (長軸×短軸 (m))	壁高 (cm)	床面	内部施設		覆土	主な出土遺物	備考
							竈	ピット			
8	XG44b	N-2'-W	長方形	1.83×1.50	42	平坦	-	1	人為	土師器 銭貨	HT 9→本跡
9	XG44b	N-2'-W	方形	2.29×2.11	24	平坦	-	1	人為		本跡→HT 8

(2) 溝 跡

第46号溝跡 (第72・73図 第41表 PL 9・21)

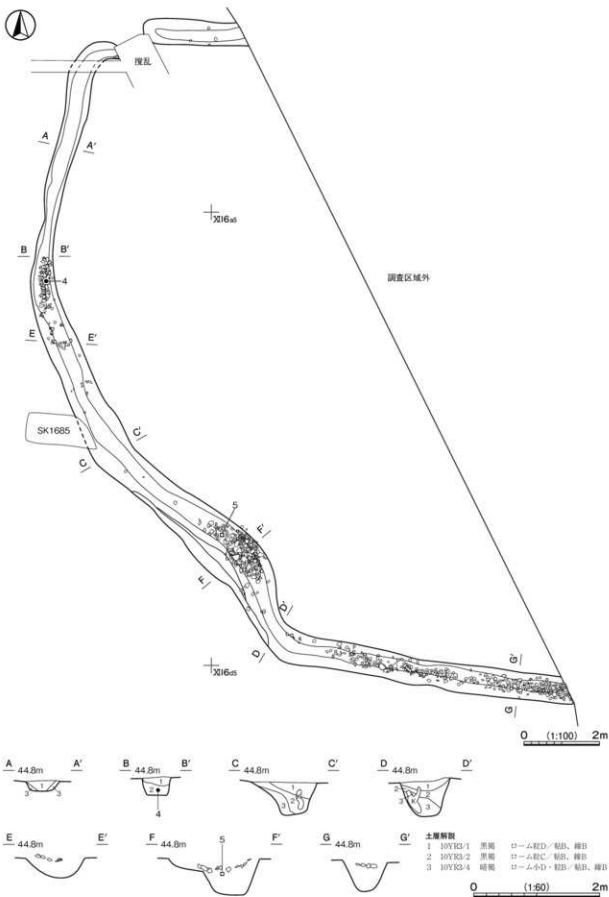
位置 A区中央部のXH 6i5～XI I 6d7区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第257号堅穴建物跡を掘り込み、第1685号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 XH 6i4区から南方向に弧状に延び、XI I 6c5区からは調査区域外に向かって東に直線状に延びている。また、XH 6i4区からは調査区域外に向かって東(N-90°-E)に直線状に延びる長さ2.6mほどの溝を確認した。それぞれの溝の間には、幅80cmほどの土橋状に掘り残した施設があるため、一つの遺構と判断した。確認できた長さは28mほどで、上幅0.30～1.42m、下幅0.15～0.50m、深さ17～56cmである。断面形状はU字状である。底面は、北から南に向かって緩やかに下り傾斜している。

覆土 3層に分層できる。黒褐色土が周囲から流入した様相を呈する堆積状況から、自然堆積である。

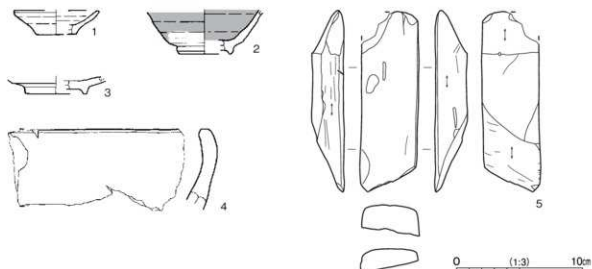
遺物出土状況 土師質土器片4点(皿1、火鉢3)、陶器片13点(碗1、皿1、瓶子1、片口鉢1、甕9)、礫470点以上(砂岩、花崗岩、石英斑岩、凝灰質泥岩、ホルンフェルスなど)、人骨1点が出土している。ほかに混入した土師器片100点、須恵器片10点が出土している。礫は西部、南西部、南部の3か所に集中している。いずれの地点も大きさと石質が多様な自然石で、本跡が埋没していく過程で廃棄されたものと考えられる。また、土器片の大半は礫の集中か所から出土している。2・3は北部の覆土中から、4は西部の礫の集中



第72図 第46号溝跡実測図

か所、5と人骨（写真のみ掲載 PL21）は南西部の礫の集中か所の覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 本跡は、重複関係や出土土器から、16世紀代には埋没していたと考えられる。性格は不明である。出土した自然礫は、井戸跡の掘削時に確認した地山の礫層中に含まれるものと酷似している。



第73図 第46号溝跡出土遺物実測図

第41表 第46号溝跡出土遺物一覧（第73図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	装成	特 徴	出土位置	備 考
1	土師質土器	皿	[66]	1.9	[32]	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土	10%
番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特 徴		産 地	出土位置	備 考
2	陶器	碗	—	[33]	[42]	磁密・灰白	ロクロ成形	高台削り出し 施釉	灰釉	瀬戸・美濃	覆土 10%
3	陶器	皿	—	[14]	[50]	磁密・灰黄	ロクロ成形	高台削り出し 輪 絞の目状の軸筋	内面施釉	灰釉	唐津 覆土 10%
番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	装成	特 徴	出土位置	備 考
4	土師質土器	火鉢	—	[64]	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ 被熱痕	覆土中層	5%
番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴		出土位置	備 考	
5	砥石	14.4	4.5	2.6	(25.78)	凝灰質泥岩	砥面4面		覆土中層		

4 その他の遺構と遺物

時期不明の掘立柱建物跡4棟、方形堅穴遺構13基、井戸跡4基、土坑48基、溝跡3条、柱穴列1条、ピット群3か所を確認した。以下、それらの遺構と遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第29号掘立柱建物跡（第74図 第42表 PL9）

位置 B区中央部のⅡB7b1区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

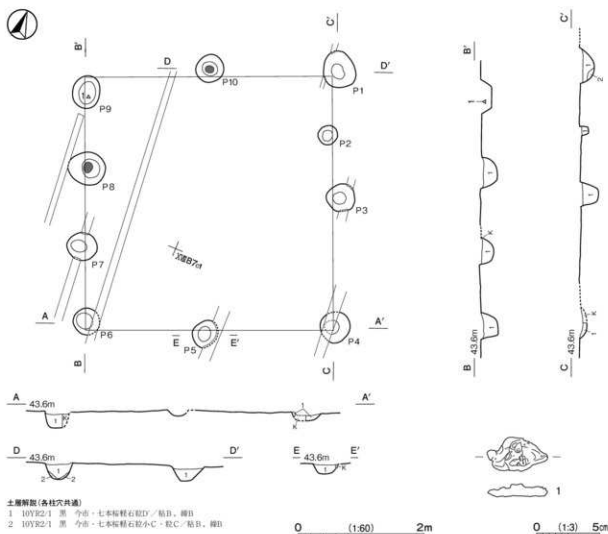
重複関係 第268号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 桁行3間、梁行2間の圓柱建物跡で、桁方向はN-21°-Wの南北棟である。規模は桁行4.01m、梁行3.92m、面積は15.72㎡である。柱間寸法は、東桁行が北から0.94m、0.99m、2.08m、西桁行が北から1.43m、1.26m、1.32mで、北梁行が西から1.98m、1.94m、南梁行が西から1.89m、2.03mである。柱筋はおおむね揃っている。

柱穴 10か所。平面形は長径31～62cm、短径31～52cmの円形と楕円形で、深さ14～29cmである。覆土は、いずれも柱抜き取り後の流入土である。P8・P10の底面で、柱穴の当たりと考えられる硬化部分を確認した。

遺物出土状況 土師器片9点(亮)、鉄滓1点が出土している。1はP9の覆土中層から出土している。

所見 時期は不明である。



第74図 第29号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第42表 第29号掘立柱建物跡出土遺物一覧(第74図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	鉄滓	(48)	(27)	(11)	(1494)	鉄	板状	P9覆土中層	

第30号掘立柱建物跡 (第75図 PL 9)

位置 B区中央部のⅧB 6 d9区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

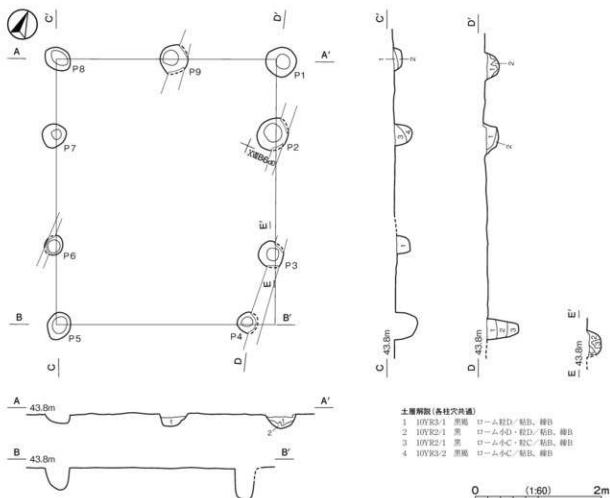
重複関係 第263号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 桁行3間、梁行2間、南梁行1間の竪柱建物跡で、桁行方向はN-23°-Wの南北極である。規模は桁行4.21m、梁行3.49m、面積は14.69㎡である。柱間寸法は、東桁行が北から1.17m、1.93m、1.11m、西桁行が北から1.20m、1.77m、1.24mで、北梁行が西から1.80m、1.69mである。柱筋はP4を除いてほぼ揃っている。

柱穴 9か所。平面形は長径34～55cm、短径29～49cmの円形と楕円形で、深さは14～50cmである。覆土は、いずれも柱抜き取り後の流入土である。

遺物出土状況 土師器片2点(甕)、須恵器片1点(坏)が出土している。

所見 時期は不明である。



第75図 第30号掘立柱建物跡実測図

第31号掘立柱建物跡 (第76図 PL 9)

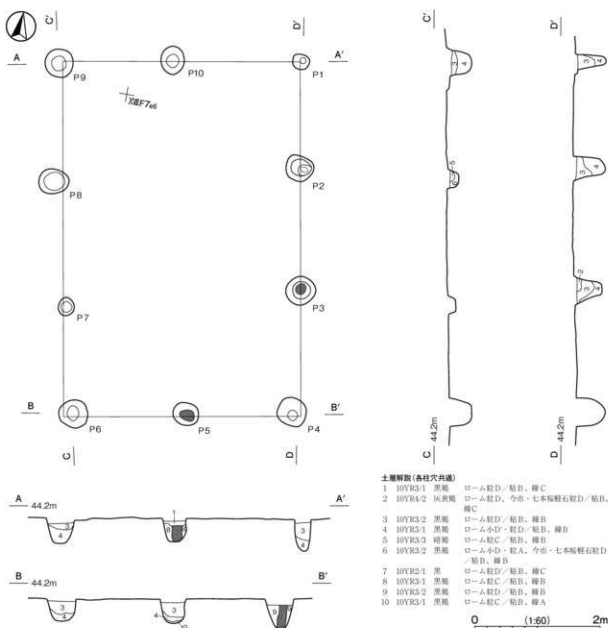
位置 D区北部のⅦF 7 e6区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 桁行3間、梁行2間の竪柱建物跡で、桁方向はN-10°-Wの南北棟である。規模は桁行5.65m、梁行3.80m、面積は21.47㎡である。柱間寸法は、東桁行が北から1.72m、1.92m、2.01m、西桁行が北から1.92m、2.01m、1.72mで、北梁行が西から1.75m、2.05m、南梁行が西から1.98m、1.82mである。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 10か所。平面形は長径29～50cm、短径26～47cmの円形と楕円形で、深さは25～49cmである。覆土は、第1～6層が柱抜き取り後の流入土、第7層が柱痕跡、第8・9層が掘方の埋土である。P3の底面とP5の第10層上面で、柱穴の当たりと考えられる硬化部分を確認した。

遺物出土状況 土師器片6点(甕)が出土している。

所見 時期は不明である。



第76図 第31号竪立柱建物跡実測図

第32号掘立柱建物跡 (第77図 PL10)

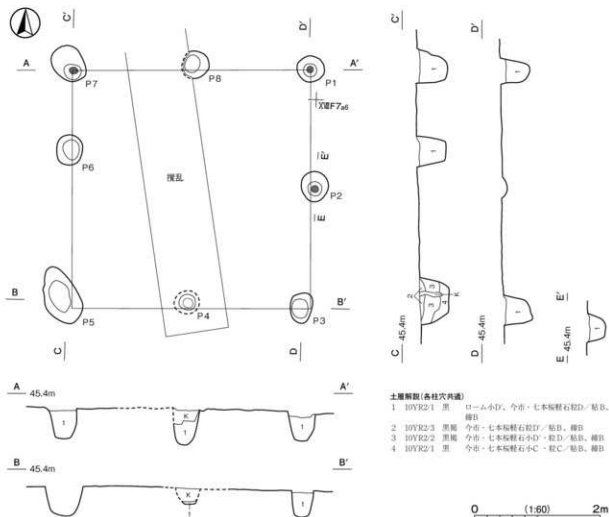
位置 D区北部のⅢF 7a5区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁方向はN-2'-Wの南北棟である。規模は桁行3.78m、梁行3.78m、面積は14.29㎡である。柱間寸法は、東桁行が北から1.90m、1.88m、西桁行が北から1.26m、2.52mで、北梁行が西から1.90m、1.88m、南梁行が西から1.84m、1.94mである。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は長径43～96cm、短径43～56cmの円形と楕円形で、深さは25～49cmである。覆土は、いずれも柱抜き取り後の流入土である。P2・P7の底面で、柱穴の当たりと考えられる硬化部分を確認した。

遺物出土状況 土師器片11点(壺)が出土している。

所見 時期は不明である。



第77図 第32号掘立柱建物跡実測図

第43表 時期不明の掘立柱建物跡一覧

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模	面積	柱間寸法		柱	穴	平面形	深さ(cm)	主な出土遺物	備考
						桁間(m)	梁間(m)						
29	ⅢB7b1	N-21'-W	3×2	4.01×3.92	15.72	0.94~2.06	1.89~2.03	欄柱	10	円形・楕円形	14~29	土師器 鉄滓	SI368→本跡
30	ⅢB659	N-23'-W	3×2	4.21×3.89	14.69	1.11~1.93	1.89~1.80	欄柱	9	円形・楕円形	14~50	土師器 須恵器	SI363→本跡
31	ⅢF7c6	N-10'-W	3×2	5.65×3.80	21.47	1.72~2.01	1.75~2.05	欄柱	10	円形・楕円形	25~49	土師器	
32	ⅢF7a5	N-2'-W	2×2	3.78×3.78	14.29	1.36~2.32	1.84~1.94	欄柱	8	円形・楕円形	25~49	土師器	

(2) 方形竪穴遺構

第1号方形竪穴遺構 (第78図)

位置 A区北部のⅩG5b1区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

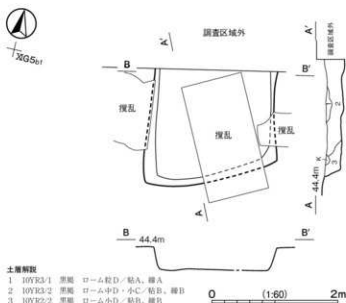
規模と形状 北部が調査区域外のため、確認できた規模は東西軸2.11m、南北軸1.85mで、方形が長方形と推定できる。南北軸方向はN-13°-Wである。壁は高さ23~33cmほどで、外傾している。

床 確認できた範囲は平坦で、硬化していない。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した須恵器片1点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形竪穴遺構と推測できる。



第78図 第1号方形竪穴遺構実測図

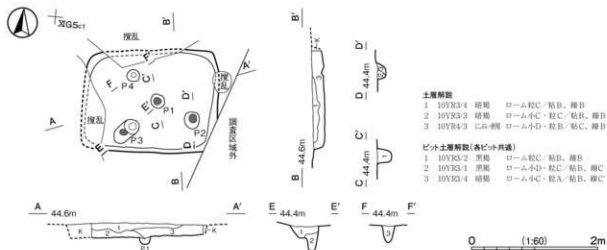
第2号方形竪穴遺構 (第79図 PL10)

位置 A区北部のⅩG5c1区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.18m、短軸1.63mの長方形で、長軸方向はN-84°-Eである。壁は高さ15~18cmほどで、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化していない。

ビット 4か所。P1~P4は径20~48cmで、深さ14~40cmの柱穴である。P1~P3の底面で柱穴の当たりと考えられる硬化部分を確認した。



第79図 第2号方形竪穴遺構実測図

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

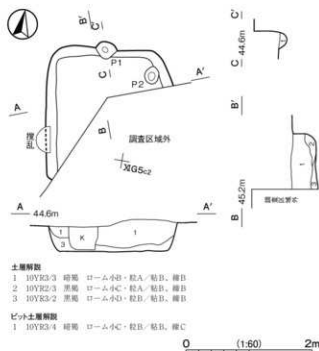
遺物出土状況 混入した縄文土器片1点、土師器片3点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形竪穴遺構と推測できる。

第3号方形竪穴遺構（第80図 PL10）

位置 A区北部のXG 5b1区、標高44 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南東部が調査区域外のため、確認できた規模は東西軸2.04 m、南北軸2.17 mで、方形が長方形



と推定できる。南北軸方向は $N-11^{\circ}-W$ である。壁は高さ35～45cmで、ほぼ直立している。

床 確認できた範囲は平坦で、硬化していない。
ピット 2か所。P1は北壁の中央部に位置し、径35cm、深さ11cmの柱穴と考えられる。P2は北東コーナー近くに位置し、長径30cm、短径20cm、深さ10cmで、性格は不明である。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した弥生土器片2点、土師器片4点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形竪穴遺構と推測できる。

第80図 第3号方形竪穴遺構実測図

第4号方形竪穴遺構（第81図）

位置 A区北部のXG 5i2区、標高45 mほどの台地平坦部に位置している。



重複関係 第46号ピット群P1を掘り込んでいる。

規模と形状 北部が攪乱、南西部が調査区域外のため、確認できた規模は東西軸1.29 m、南北軸1.40 mで、長方形と推定できる。南北軸方向は $N-0^{\circ}$ である。壁は高さ10～20 cmで、外傾している。

床 確認できた範囲は平坦で、硬化していない。

第81図 第4号方形竪穴遺構実測図

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した土師器片3点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形竪穴遺構と判断したが、土坑の可能性もある。

第5号方形竪穴遺構 (第82図 PL10)

位置 A区北部のⅪG 4e8区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1668号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.70m、短軸2.07mの長方形で、長軸方向はN-0°である。壁は高さ30cmほどで、外傾している。

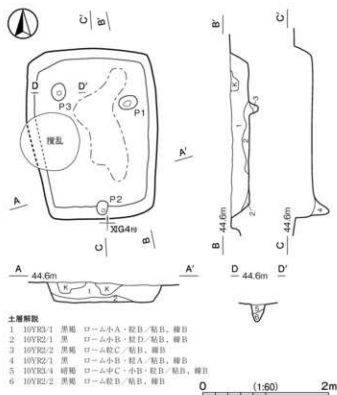
床 平坦で、中央部が硬化している。

ビット 3か所。P1は北東コーナー近くに位置し、長径30cm、短径21cm、深さ17cmである。P2は南壁下の中央部に位置し、長径22cm、短径17cm、深さ18cmである。P3は北西コーナー近くに位置し、長径28cm、短径22cm、深さ26cmである。いずれも配置から柱穴と考えられる。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した土師器片3点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形竪穴遺構と推測できる。



第82図 第5号方形竪穴遺構実測図

第6号方形竪穴遺構 (第83図 PL10)

位置 A区北部のⅪG 4e0区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.48m、短軸2.05mの長方形で、長軸方向はN-2°-Wである。壁は高さ13~23cmで、ほぼ直立している。

床 北壁から中央部に向かって緩やかに傾斜している。北側半分ほどが硬化している。

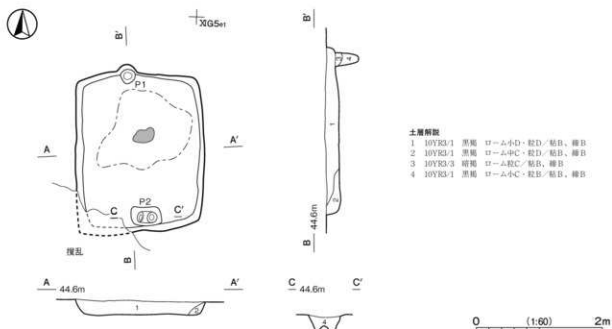
炉 中央部やや北寄りに位置している。長軸37cm、短軸23cmの不定形をした地床炉である。火床面は床面と同じ高さで、赤変硬化している。

ビット 2か所。P1は北壁のほぼ中央部に位置し、径23cm、深さ38cmである。P2は南壁下の中央部に位置し、長軸48cm、短軸30cm、深さ18cmである。底面には深さ7cmの2か所の小穴を有する。いずれも柱穴と考えら

れる。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形竪穴遺構と推測できる。



第83図 第6号方形竪穴遺構実測図

第7号方形竪穴遺構 (第84図 PL10)



第84図 第7号方形竪穴遺構実測図

位置 A区北部のXIG 5g3区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第256号竪穴建物跡、第1677号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.42m、短軸2.10mの長方形で、長軸方向はN-12°-Wである。壁は高さ34~58cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化していない。

ビツ 2か所。P1は北壁の中央部に位置し、長径24cm、短径18cm、深さ39cmである。P2は南壁の中央部に位置し、長径28cm、短径24cm、深さ33

cmである。いずれも主軸の軸線上に位置していることから、柱穴と考えられる。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した縄文土器片4点、弥生土器片1点、土師器片6点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形竪穴遺構と推測できる。

第10号方形竪穴遺構（第85図）

位置 A区北部のXIG4d9区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

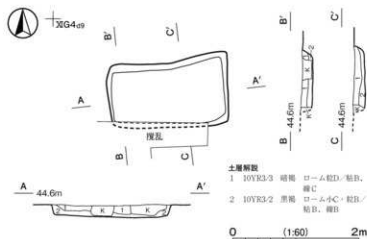
規模と形状 長軸1.92m、短軸1.16mの不整長方形で、長軸方向はN-88°-Eである。壁は高さ15~18cmで、外傾している。

床 平坦で、硬化していない。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した縄文土器片6点、土師器片4点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形竪穴遺構と判断したが、土坑の可能性もある。



第85図 第10号方形竪穴遺構実測図

第11号方形竪穴遺構（第86図 PL10）

位置 A区北部のXIG5h1区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.90m、短軸1.69mの長方形で、長軸方向はN-8°-Wである。壁は高さ6cmほどである。

床 平坦で、中央部から南壁際にかけて硬化している。

炉 北壁近くに位置している。長軸35cm、短軸32cmの不定形をした地床炉である。火床面は床面と同じ高さで、赤変硬化している。

ピット 1か所。P1は北東コーナー近くに位置し、径30cmほど、深さ12cmで、性格は不明である。

覆土 単一層である。ロームブロックを



第86図 第11号方形竪穴遺構実測図

不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した縄文土器片1点、土師器片8点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形竪穴遺構と推測できる。

第12号方形竪穴遺構（第87図）

位置 A区北部のXG 5e1区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第13・14号方形竪穴遺構を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.45m、短軸1.97mの長方形で、長軸方向は $N-90^\circ$ である。壁は高さ38～42cmで、ほぼ直立している。

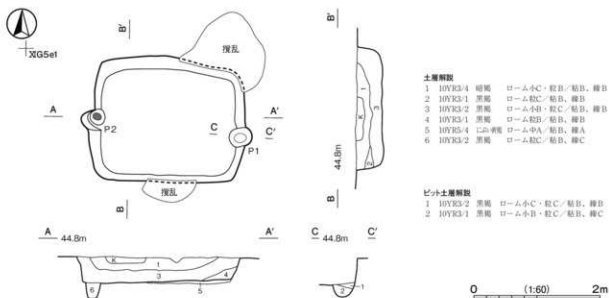
床 平坦で、硬化していない。

ピット 2か所。P1は東壁のやや南寄りに位置し、長径36cm、短径30cm、深さ22cmである。P2は西壁の中央部に位置し、径25cmほど、深さ25cmで、底面で柱穴の当たりと考えられる硬化部分を確認した。配置からいずれも柱穴と考えられる。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。第5層は貼床構築土である。

遺物出土状況 混入した弥生土器片1点、土師器片2点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形竪穴遺構と考えられる。



第87図 第12号方形竪穴遺構実測図

第13号方形竪穴遺構（第88図 PL10）

位置 A区北部のXG 5e1区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第12号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 第12号方形竪穴遺構に掘り込まれているため、確認できた規模は長軸2.31m、短軸1.90mの長

方形で、長軸方向は $N-90^{\circ}$ である。壁は高さ45～49cmで、外傾している。

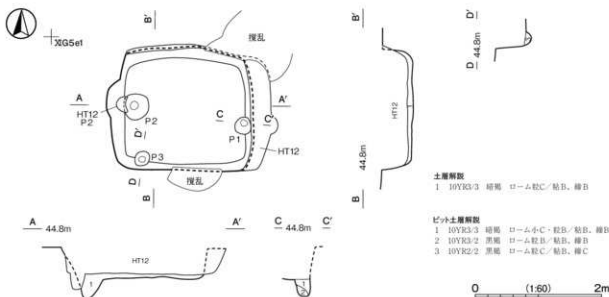
床 平坦で、硬化していない。

ピット 3か所。P1は東壁のやや南寄りに位置し、径25cm、深さ28cmである。P2は西壁の中央部に位置し、径40cmほど、深さ30cmである。配置からいずれも柱穴と考えられる。P3は南西コーナー近くに位置し、長径26cm、短径22cm、深さ10cmで、性格は不明である。

覆土 第12号方形竪穴遺構に掘り込まれているため、1層のみ確認した。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 混入した縄文土器片1点、土師器片1点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、重複関係から中世以降と考えられ、第12号方形竪穴遺構よりも古い。



第88図 第13号方形竪穴遺構実測図

第14号方形竪穴遺構 (第89図 PL11)

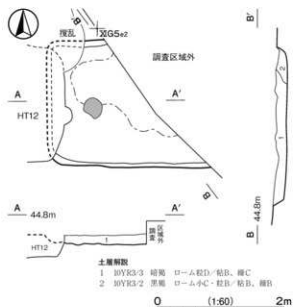
位置 A区北部のXI G 5e2区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第12号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外で、西部を第12号方形竪穴遺構に掘り込まれているため、確認できた規模は東西軸237m、南北軸200mで、長方形と推定できる。長軸方向は $N-90^{\circ}$ である。壁は高さ16cmで、外傾している。

床 確認できた範囲は平坦で、中央部が硬化している。

炉 西壁寄りに位置している。長軸30cm、短軸25cmの不定形をした床炉である。火床面は床面と同一



第89図 第14号方形竪穴遺構実測図

じ高さで、赤変硬化している。

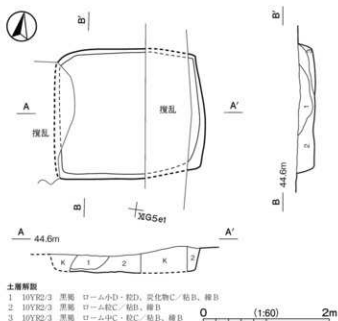
覆土 2層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した土師器片2点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、重複関係から中世以降と考えられる。時期差はあまりないものと考えられるが、第12号方形堅穴遺構よりも古い。

第15号方形堅穴遺構 (第90図 PL11)

位置 A区北部のXIG 4d0区、標高44 mほどの台地平坦部に位置している。



第90図 第15号方形堅穴遺構実測図

規模と形状 西部が攪乱のため、確認できた規模は東西軸2.39 m、南北軸2.06 mで、長方形と推定できる。長軸方向はN-80°-Eである。壁は高さ23～37 cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化していない。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した土師器片1点が出土している。

所見 詳細な時期は不明であるが、規模と形状から、中世以降の方形堅穴遺構と考えられる。

第44表 時期不明方形堅穴遺構跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形状	規模		壁高	床面	内部施設	覆土	主な出土物	備考
				長軸	短軸						
1	XIG5e1	N-13°-W	長方形	2.11 × (1.85)	23 ~ 31	平坦	-	-	人為	須恵器	
2	XIG5e1	N-84°-E	長方形	2.18 × 1.63	15 ~ 18	平坦	-	4	人為	土師器	
3	XIG5e1	N-11°-W	長方形	2.04 × (2.17)	35 ~ 45	平坦	-	2	人為	土師器	
4	XIG5e2	N-0°	[長方形]	[1.40] × 1.29	10 ~ 20	平坦	-	-	人為	土師器	PG46 → 本跡
5	XIG4e8	N-0°	長方形	2.70 × 2.07	30	平坦	-	3	人為	土師器	SK1688 → 本跡
6	XIG4e9	N-2°-W	長方形	2.48 × 2.05	13 ~ 23	平坦	1	2	人為		
7	XIG5e3	N-12°-W	長方形	2.42 × 2.10	34 ~ 58	平坦	-	2	人為	土師器	SI256、SK1677 → 本跡
10	XIG4e9	N-88°-E	長方形	1.92 × 1.16	15 ~ 18	平坦	-	-	人為	土師器	
11	XIG5e1	N-8°-W	長方形	2.90 × 1.69	6	平坦	1	1	人為	土師器	
12	XIG5e1	N-90°	長方形	2.45 × 1.97	38 ~ 42	平坦	-	2	人為	土師器	HT13・14 → 本跡
13	XIG5e1	N-90°	[長方形]	[2.31] × [1.90]	45 ~ 49	平坦	-	3	不明	土師器	本跡 → HT12
14	XIG5e2	N-90°	[長方形]	[2.37] × 2.00	16	平坦	1	-	人為	土師器	本跡 → HT12
15	XIG4e9	N-80°-E	[長方形]	[2.29] × 2.06	23 ~ 37	平坦	-	-	人為	土師器	

(3) 井戸跡

第7号井戸跡 (第91図 PL11)

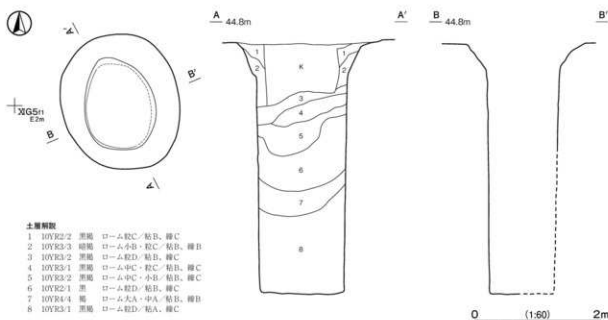
位置 A区北部のXI G 5e1区、標高45 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径220 m、短径186 mの楕円形で、長径方向はN-32°-Wである。確認面から深さ176 cmまで調査したのち、崩落の恐れがあったため、重機を使用して深さ398 cmまで掘削し、ローム層中で底面を確認した。断面形は漏斗状を呈しており、深さ50 cmより下位は、平面形が長径15 m、短径1.1 mほどの楕円形である。底面は平坦である。

覆土 8層を確認した。いずれの層もロームブロックやローム粒子を不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した土師器片11点が出土している。

所見 時期は不明である。



第91図 第7号井戸跡実測図

第8号井戸跡 (第92図 PL11)

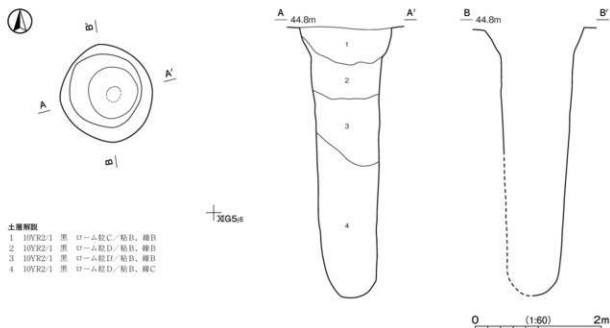
位置 A区北部のXI G 5i5区、標高45 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径150 mほどの円形で、確認面から深さ200 cmまで調査したのち、崩落の恐れがあったため、重機を使用して深さ427 cmまで掘削し、ローム層中で底面を確認した。断面形は漏斗状を呈しており、深さ45 cmより下位は、平面形が径115 mほどの円形である。底部は皿状を呈している。

覆土 4層を確認した。いずれの層も含有物の少ない黒色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 混入した土師器片72点が出土している。

所見 時期は不明である。



第92図 第8号井戸跡実測図

第9号井戸跡 (第93図 PL11)

位置 A区中央部のXH6h2区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

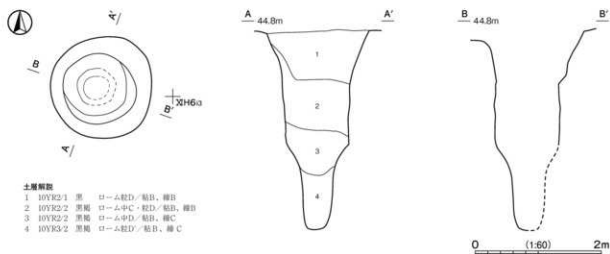
重複関係 第255号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径1.60mほどの円形で、確認面から深さ180cmまで調査したのち、崩落の恐れがあったため、重機を使用して深さ313cmまで掘削し、礫層中で底面を確認した。断面形は羽子板状で、底部は皿状を呈している。

覆土 4層を確認した。いずれの層もロームブロックを不規則に含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した土師器片25点、須恵器片1点が出土している。

所見 時期は不明である。



第93図 第9号井戸跡実測図

第10号井戸跡 (第94図 PL11)

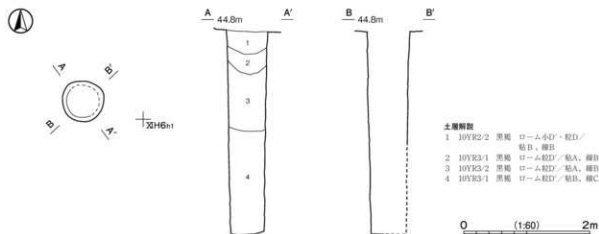
位置 A区中央部のXH5g0区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径0.66mほどの円形で、確認面から深さ183cmまで調査したのち、崩落の恐れがあったため、重機を使用して深さ323cmまで掘削しローム層中で底面を確認した。断面形は長方形で、底面は径0.53mほどの円形で、平坦である。

覆土 4層を確認した。いずれの層も含有物の少ない黒色土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 混入した土師器片3点が出土している。

所見 時期は不明である。



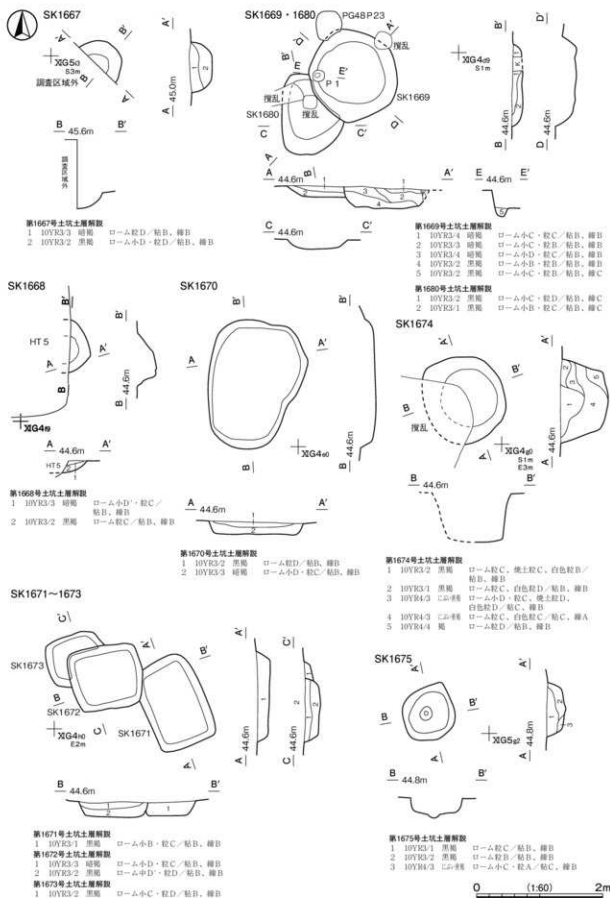
第94図 第10号井戸跡実測図

第45表 時期不明井戸跡一覧

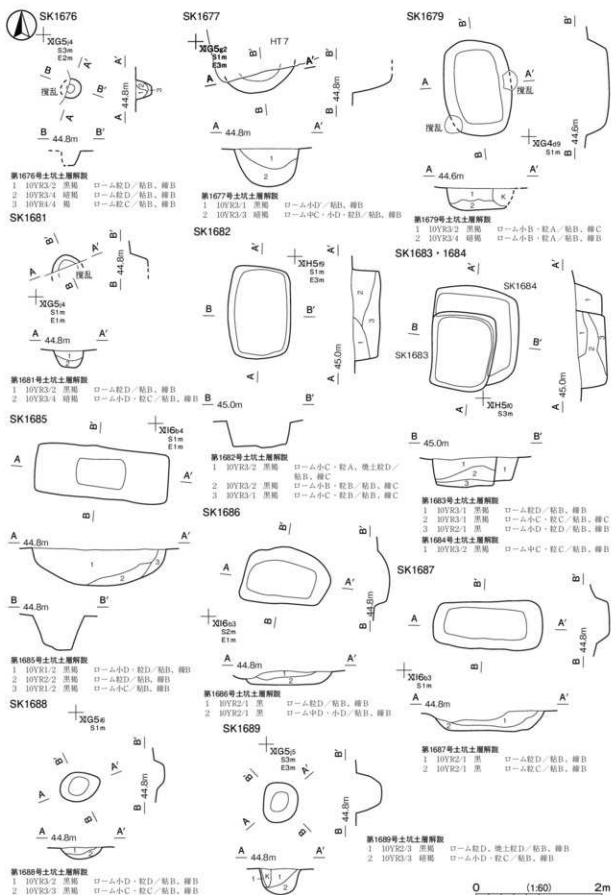
番号	位置	長径方向	平面形	規模		断面形	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
7	XG5e1	N-32°-W	楕円形	2.20×1.86	398	漏斗状	平坦	人為	土師器	
8	XG5i5	-	円形	1.55×1.47	427	漏斗状	皿状	自然	土師器	
9	XH6b2	-	円形	1.65×1.55	313	羽子板状	皿状	人為	土師器 須恵器	SE255→本跡
10	XH5g0	-	円形	0.66×0.66	323	長方形	平坦	自然	土師器	

(4) 土 坑

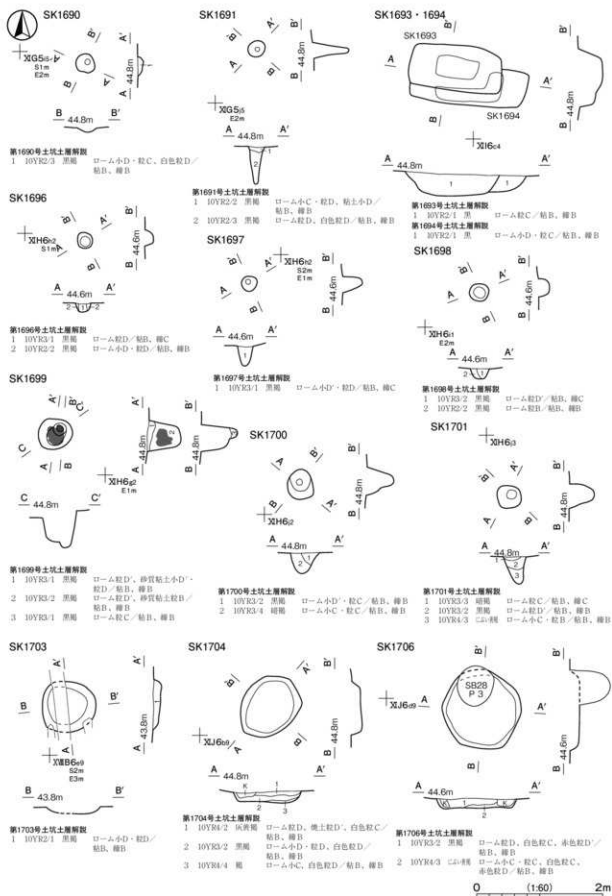
実測図 (第95～99図) と一覧 (第46表) で記載する。



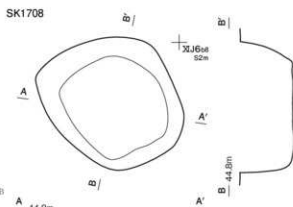
第 95 図 時期不明の土坑実測図 (1)



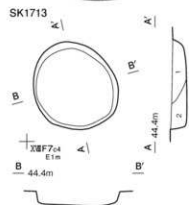
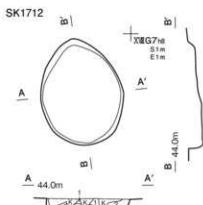
第96図 時期不明の土坑実測図(2)



第 97 図 時期不明の土坑実測図 (3)

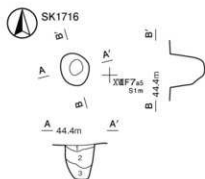


SK1711



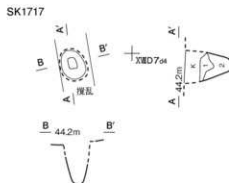
0 (1:50) 2m

第98図 時期不明の土坑実測図(4)



第1716号土坑土層解説

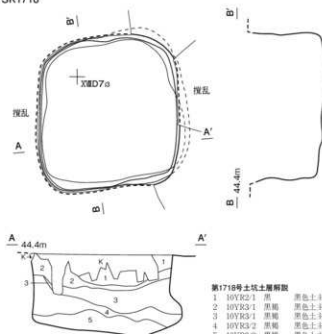
- 1 10YR2/1 黒 今市・七本桜軽石粒D' / 粘B、雜B
- 2 10YR2/1 黒 今市・七本桜軽石粒D' / 粘B、雜B
- 3 10YR2/2 黒褐 今市・七本桜軽石粒C' / 粘B、雜B



第1717号土坑土層解説

- 1 10YR2/3 暗褐 黒色土主体、白色粒D' / 粘B、雜B
- 2 10YR3/4 暗褐 黒色土主体、ローム小D'・粒D'・粒D' / 粘B、雜B

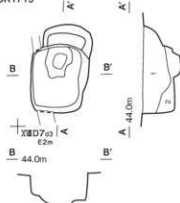
SK1718



第1718号土坑土層解説

- 1 10YR2/1 黒 黒色土主体、ローム粒D'・今市・七本桜軽石粒D' / 粘B、雜B
- 2 10YR3/1 黒褐 黒色土主体、ローム小D'・粒D'・今市・七本桜軽石粒D' / 粘B、雜B
- 3 10YR3/1 黒褐 黒色土主体、ローム大C'・中C'・小C'・粒D' / 粘B、雜B
- 4 10YR3/2 黒褐 黒色土主体、ローム大D'・中B'・小B'・粒D' / 粘B、雜B
- 5 10YR3/2 黒褐 黒色土主体、ローム大C'・中A'・小A'・粘B、雜B

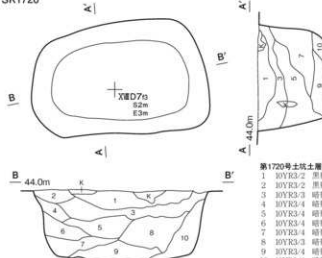
SK1719



第1719号土坑土層解説

- 1 10YR3/2 暗褐 ローム小D'・粒C' / 粘B、雜B
- 2 10YR3/3 暗褐 ローム小D'・粒D' / 粘B、雜B

SK1720



第1720号土坑土層解説

- 1 10YR3/2 暗褐 今市・七本桜軽石小D'・粒C' / 粘B、雜B
- 2 10YR3/2 暗褐 今市・七本桜軽石小D'・粒C' / 粘B、雜B
- 3 10YR3/3 暗褐 今市・七本桜軽石中D'・小C'・粒C' / 粘B、雜B
- 4 10YR3/4 暗褐 今市・七本桜軽石大A'・粘B、雜B
- 5 10YR3/4 暗褐 今市・七本桜軽石大B'・粒C' / 粘B、雜B
- 6 10YR3/4 暗褐 今市・七本桜軽石大A'・粒B、雜B
- 7 10YR3/4 暗褐 今市・七本桜軽石中D'・粒C' / 粘B、雜B
- 8 10YR3/3 暗褐 今市・七本桜軽石中C'・粒C' / 粘B、雜B
- 9 10YR3/4 暗褐 今市・七本桜軽石大B'・粒C' / 粘B、雜B
- 10 10YR3/4 暗褐 今市・七本桜軽石小C'・粒C' / 粘B、雜B

0 (1:60) 2m

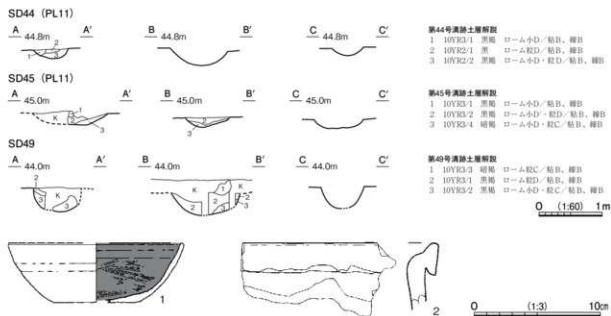
第46表 時期不明の土坑一覧

番号	位置	長短方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1667	XIG53	—	[円形・楕円形]	0.80×0.37	36	外傾	平坦	人為		
1668	XIG4e9	—	[円形・楕円形]	0.83×0.33	30	外傾	円凸	自然		本跡→HT5
1669	XIG4d8	—	円形	1.46×1.38	33	外傾	平坦	人為		SK1680→本跡 →PG48
1670	XIG4d9	N-11°-E	楕円形	2.03×1.44	21	外傾	平坦	人為	土師器	
1671	XIG4d9	N-22°-W	長方形	1.45×1.00	22	外傾	平坦	人為	土師器	本跡→SK1672
1672	XIG4d9	N-78°-E	長方形	1.17×1.02	25	外傾	平坦	人為	土師器	SK1671・1673→ 本跡
1673	XIG4d9	N-76°-E	長方形	0.94×0.79	13	外傾	平坦	人為		本跡→SK1672
1674	XIG4d9	N-21°-W	[楕円形]	1.38×1.27	77	外傾	平坦	人為	土師器	
1675	XIG5d	N-27°-E	楕円形	1.00×0.85	31	外傾	円凸	人為		
1676	XIG5j4	—	[円形]	0.31×0.31	25	外傾	皿状	人為		
1677	XIG5g2	N-76°-E	[円形・楕円形]	1.08×0.31	60	外傾	皿状	人為		HT7→本跡
1679	XIG4d8	N-7°-W	楕円形	1.52×1.07	36	外傾	平坦	人為		
1680	XIG4d8	N-3°-E	楕円形	1.27×0.99	17	外傾	円凸	人為	土師器 須恵器	本跡→SK1669
1681	XIG5j4	N-38°-E	[円形・楕円形]	0.47×0.18	26	外傾	皿状	自然	土師器	
1682	XIH5d9	N-0°	長方形	1.46×1.00	44	外傾	平坦	人為		
1683	XIH5d9	N-4°-E	長方形	1.27×1.02	45	外傾	平坦	人為		SK1684→本跡
1684	XIH5d9	N-4°-E	長方形	1.50×1.35	41	外傾	平坦	人為		本跡→SK1683
1685	XIH6b4	N-86°-W	長方形	2.12×0.81	56	外傾	皿状	人為	土師器	SD46→本跡
1686	XIH6b3	N-81°-W	長方形	1.35×0.91	24	外傾	平坦	人為	土師器	
1687	XIH6b3	N-88°-W	長方形	1.74×0.74	31	外傾	平坦	人為	土師器	
1688	XIG5b6	N-70°-E	楕円形	0.67×0.47	18	外傾	皿状	人為		
1689	XIG5b5	N-15°-E	楕円形	0.65×0.54	40	外傾	皿状	人為		
1690	XIG5b5	N-62°-W	楕円形	0.32×0.28	10	外傾	平坦	人為		
1691	XIG5b5	N-46°-E	楕円形	0.30×0.24	58	外傾	皿状	人為	土師器	
1693	XIH6b3	N-83°-W	長方形	1.46×0.72	38	外傾	平坦	人為	土師器	SK1694→本跡
1694	XIH6b3	N-84°-W	長方形	1.83×0.61	26	外傾	平坦	人為	土師器	本跡→SK1693
1696	XIH6b2	—	円形	0.32×0.30	13	外傾	皿状	人為		SI255→本跡
1697	XIH6b2	—	円形	0.25×0.25	30	外傾	皿状	人為		SI255→本跡
1698	XIH6b1	N-82°-W	楕円形	0.30×0.27	16	外傾	皿状	人為		SI255→本跡
1699	XIH6b2	N-77°-E	楕円形	0.55×0.48	58	外傾	有段	人為	土師器 須恵器 陶器	SD45→本跡
1700	XIH6b2	N-7°-E	楕円形	0.48×0.41	43	外傾	皿状	人為		
1701	XIH6j3	—	円形	0.41×0.38	43	外傾	皿状	人為		
1703	XIH6e9	—	円形	0.85×0.79	12	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器	SD63→本跡
1704	XIJ6a9	N-41°-E	楕円形	1.09×0.85	19	外傾	平坦	自然		
1706	XIJ6a9	—	円形	1.23×1.20	15	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器	本跡→SE28
1707	XIH7g1	N-21°-W	[楕円形]	0.89×0.67	54	外傾	平坦	自然	土師器 須恵器	
1708	XIJ6b7	N-69°-W	楕円形	2.45×2.02	84	外傾	平坦	人為	土師器	
1709	XIH6a8	—	円形	0.79×0.74	26	外傾	円凸	人為		
1710	XIH6b9	N-6°-W	[楕円形]	0.89×0.63	26	外傾	平坦	人為		本跡→SI265
1711	XIJ6a9	N-50°-E	不整形長方形	2.35×1.54	114	外傾	皿状	人為		
1712	XIG7b8	N-8°-W	楕円形	1.70×1.33	22	外傾	平坦	自然	土師器 須恵器	
1713	XIH7b4	N-31°-W	楕円形	1.44×1.30	24	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器	
1714	XIH7b5	—	円形	0.95×0.87	22	外傾	平坦	自然	土師器	
1716	XIH7a4	N-16°-W	楕円形	0.52×0.45	54	外傾	皿状	人為	須恵器	
1717	XIH7d3	N-17°-W	[楕円形]	[0.53]×0.43	74	外傾	皿状	人為	土師器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1718	ⅢD7G3	N-2°-W	[方形]	[2.43] × [2.28]	130	外傾	平坦	人為		
1719	ⅢD7G3	N-1°-E	不整形長方形	1.40 × 0.92	51	外傾	有段	人為	土師器	
1720	ⅢD7G3	N-83°-E	楕円形	2.82 × 1.82	111	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器	

(5) 溝 跡

平面図は遺構全体図（付図）に示し、規模は一覧（第48表）で記載した。ここでは断面図・出土遺物実測図（第100図）と出土遺物一覧（第47表）を記載する。



第100図 第44・45・49号溝跡・第49号出土遺物実測図

第47表 第49号溝跡出土遺物一覧（第100図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	土師器	椀	[13.8]	4.7	[6.6]	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	内面へう跡き 底部へう割り 黒色処理	覆土	20%

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特 徴	軸差	産 地	出土位置	備 考
2	陶器	甕	-	[5.4]	-	緻密・褐灰	口縁部磨り減し 横ナデ	-	常滑	覆土	5%

第48表 時期不明の溝跡一覧

番号	位 置	方 向	平面形	規 模				断 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長さ(m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (cm)					
44	XG556 ~ XH557	N-3°-E	直線状	164	0.52 ~ 0.62	0.16 ~ 0.20	30 ~ 37	U字状	外傾	人為	土師器 須恵器	SI253 → 本跡
45	XH662 ~ XH661	N-11°-E	直線状	120	0.66 ~ 0.90	0.40 ~ 0.60	15 ~ 22	U字状	外傾	自然	土師器	本跡 → SK1699
49	ⅢD7G3 ~ ⅢD7G8	N-12°-E N-28°-E	くの字状	160	0.54 ~ 0.70	0.26 ~ 0.36	34 ~ 36	U字状	外傾	人為	土師器 須恵器 陶器	

(6) 柱穴列

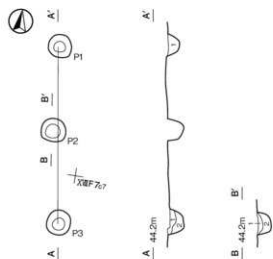
第7号柱穴列 (第101図)

位置 D区北部のⅢF 7b6区、標高44 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南北方向2.82 mの間に並ぶ柱穴3か所を確認した。配列方向はN-9°-W。柱間寸法は北から、1.35 m、1.47 mである。

柱穴 3か所。平面形は径40cmほどの円形で、深さは20～26cmである。覆土は、いずれも柱抜き取り後の流入土である。

所見 東側が調査区域外のため、詳細は不明であるが、掘立柱建物跡の可能性もある。時期は不明である。



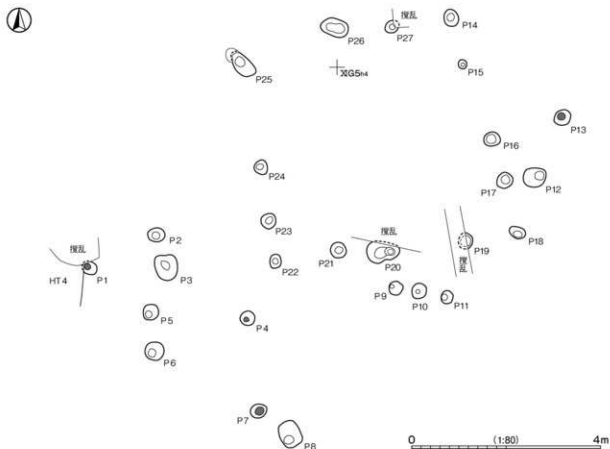
土層解説

- 1 10YR3-2 赤褐色 ローム中砂・砂質シルト、細砂、細砂
2 10YR3-1 赤褐色 ローム小砂・砂質シルト、細砂、細砂

第101図 第7号柱穴列実測図

(7) ビット群

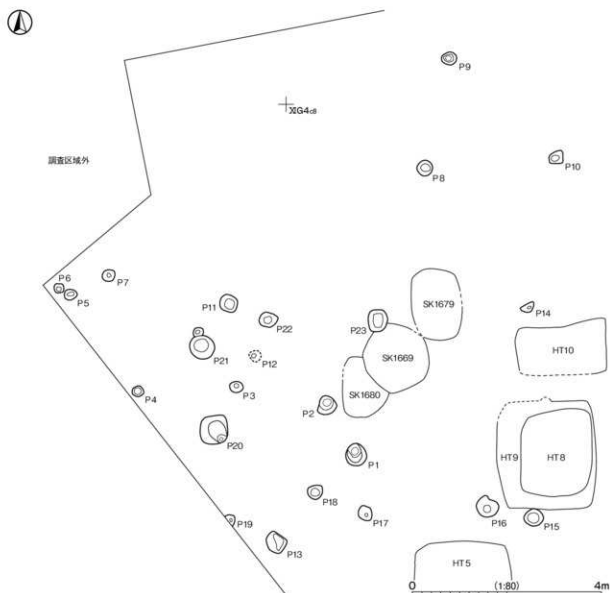
平面図 (第102～104図) と計測表 (第49～51表) で記載する。



第102図 第46号ビット群実測図

第49表 第46号ビット群ビット計測表 (第102図)

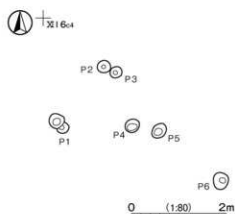
番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	X G5i2	[楕円形]	[33]	29	54	10	X G5i4	円形	33	31	32	19	X G5h4	[円形]	35	[30]	12
2	X G5h3	楕円形	37	29	28	11	X G5i4	楕円形	28	25	71	20	X G5h4	[楕円形]	70	[45]	36
3	X G5i3	楕円形	60	49	24	12	X G5h5	楕円形	50	40	21	21	X G5h4	円形	35	33	28
4	X G5i3	円形	31	30	36	13	X G5h5	楕円形	38	32	62	22	X G5i3	楕円形	30	23	26
5	X G5i3	円形	35	33	21	14	X G5g4	楕円形	45	40	20	23	X G5h3	円形	31	31	27
6	X G5i3	円形	42	40	37	15	X G5g4	円形	20	18	29	24	X G5h3	楕円形	32	28	35
7	X G5i3	楕円形	37	29	68	16	X G5h4	円形	35	32	64	25	X G5g3	[楕円形]	[60]	34	19
8	X G5i3	楕円形	56	44	38	17	X G5h4	円形	35	33	16	26	X G5g3	楕円形	58	37	21
9	X G5i4	円形	30	29	25	18	X G5h4	楕円形	38	25	14	27	X G5g3	[楕円形]	[32]	26	18



第103図 第48号ビット群実測図

第50表 第48号ビット群ビット計測表(第103図)

番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	X/G4d8	円形	47	45	30	9	X/G4b8	楕円形	32	28	65	17	X/G4d8	楕円形	35	30	24
2	X/G4d8	不整楕円形	43	40	35	10	X/G4e9	楕円形	35	26	49	18	X/G4e8	楕円形	35	31	26
3	X/G4d7	楕円形	28	24	29	11	X/G4d7	円形	39	38	37	19	X/G4e7	[楕円形]	25	(15)	30
4	X/G4d7	円形	25	23	37	12	X/G4d7	[円形]	[24]	[23]	[72]	20	X/G4d7	不整円形	70	65	28
5	X/G4d6	楕円形	28	23	43	13	X/G4e7	楕円形	50	38	30	21	X/G4d7	不整楕円形	67	22	41
6	X/G4c6	円形	22	20	37	14	X/G4d9	楕円形	30	20	16	22	X/G4d7	楕円形	40	32	40
7	X/G4e7	楕円形	30	26	46	15	X/G4e9	楕円形	42	36	23	23	X/G4d8	楕円形	48	42	7
8	X/G4c8	円形	35	32	37	16	X/G4e9	不整楕円形	48	37	46						



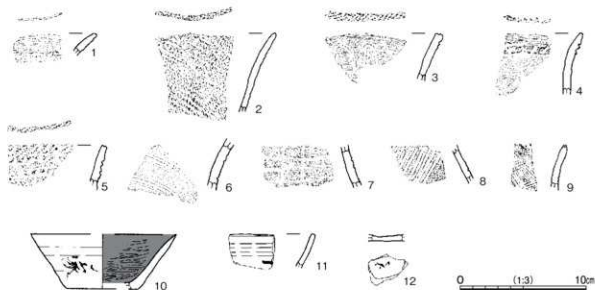
第104図 第47号ビット群実測図

第51表 第47号ビット群ビット計測表(第104図)

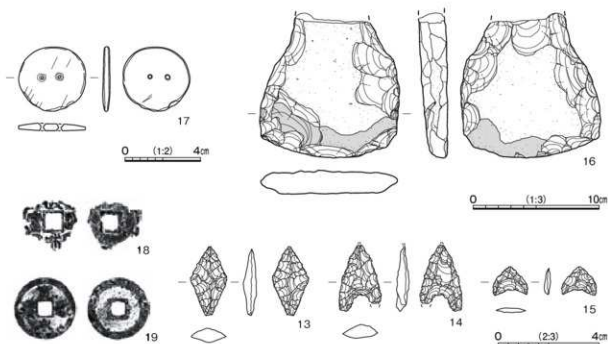
番号	位置	平面形	規 模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	X/G4c4	不整楕円形	50	25	30
2	X/G4c4	楕円形	30	27	21
3	X/G4c4	円形	25	25	20
4	X/G4c4	円形	30	30	27
5	X/G4c4	円形	32	30	21
6	X/G4c4	楕円形	38	33	30

(8) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物の主なものについて、実測図(第105・106図)と一覧(第52表)で記載する。



第105図 遺構外出土遺物実測図(1)



第106図 遺構外出土遺物実測図(2)

第52表 遺構外出土遺物一覧(第105・106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	甕	—	(18)	—	長石・石英	灰黄褐色	普通	複合口縁・口唇部・複合口縁部燃赤文施文	SI258	5% 中期末葉
2	弥生土器	広口甕	—	(62)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	口唇部縦文・口縁部上平部加高1種縦文・口縁部下平部1種縦文施文	SI258	5% 中期末葉
3	弥生土器	広口甕	—	(38)	—	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口唇部縦文施文・口縁部平紋竹管による波状文	SI258	5% 中期末葉
4	弥生土器	広口甕	—	(48)	—	長石・石英	橙	普通	口唇部・複合口縁部燃赤文施文・複合口縁部沈線文・肩目・頸部磨光状工具による波状文	SI253	5% 前期末葉
5	弥生土器	広口甕	—	(34)	—	長石・石英	灰黄褐色	普通	口唇部・複合口縁部・頸部(京平部)縦文施文・複合口縁部沈線文・全・肩目	SI259	5% 前期末葉
6	弥生土器	広口甕	—	(51)	—	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	頸部平紋竹管による波状文	SK1708	5% 中期末葉
7	弥生土器	広口甕	—	(34)	—	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	頸部平紋竹管による縦位・横位平行沈線文	SI257	5% 中期末葉
8	弥生土器	広口甕	—	(30)	—	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	頸部縦位の沈線・斜位集合沈線文・一部赤彩	SI262	5% 中期末葉
9	弥生土器	広口甕	—	(35)	—	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	頸部外面磨光状工具による斜格子文	SI254	5% 前期末葉
10	土師器	甕	[115]	4.3	[5.6]	長石・石英	橙	普通	内面横位へろ磨き 黒色処理	表土	10% 前期末葉
11	土師器	甕	—	(27)	—	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	内面横位へろ磨き 黒色処理	表土	5% 前期末葉
12	土師器	甕	—	(05)	—	長石・石英	橙	普通	底部斜位切取り磨き 内面へろ磨き 黒色処理	表土	5% 前期末葉

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
13	石皿	2.7	1.5	0.5	1.30	瑪瑙	凸基有茶線 両面押圧剥離調整	SI409	PL22
14	石皿	(2.7)	1.7	0.5	(1.64)	チャート	凹基無茶線 両面押圧剥離調整	表土	PL22
15	石皿	1.1	1.4	0.3	0.30	チャート	凹基無茶線 両面押圧剥離調整	表土	PL22
16	打製石斧	(11.5)	11.1	2.3	(394.32)	安山岩	磨光 側縁部両面側からの剥離調整 刃部一部磨光	SI262	PL22
17	有孔円板	3.4	3.6	0.4	8.60	滑石	孔2か所 一方側からの穿孔 両面磨光	SE11	PL22

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
18	皇宗通寶	—	0.60	1.30	(1.08)	銅	1038	篆書体	SK1680	PL22
19	寛永通寶	2.40	0.55	1.50	2.81	銅	1697	新寛永	SK1685	PL22

第4節 総 括

1 はじめに

下大賀遺跡については、当財団が平成24年度から発掘調査を行い、これまでに3冊の報告書を刊行している。今回の調査区は、これまでに報告された調査区から西に0.7kmほどの台地縁辺寄りに位置しており、調査面積は7,044㎡である。遺構は堅穴建物跡24棟、掘立柱建物跡5棟、方形堅穴遺構15基、井戸跡7基、土坑52基、溝跡6条、柱穴列1条、ピット群3か所を確認した。今回の報告で中心となるのは、古墳時代中期と奈良・平安時代の堅穴建物跡である。

ここでは、古墳時代から平安時代の遺構・遺物の特徴と古墳時代から平安時代の変遷について若干の考察を加えて総括とする。時期区分については、茨城県教育財団文化財調査報告第467集（以下「第467集」）に準じる¹⁾。

2 各時代の遺構と遺物

(1) 古墳時代

堅穴建物跡の時期別棟数は、中期が7棟、後期が3棟の10棟を確認した。ここでは、確認した堅穴建物跡を3期に分け、それぞれの時期の特徴を述べる。なお、第467集で設定されている第1～3期、第7期の遺構は確認していない。

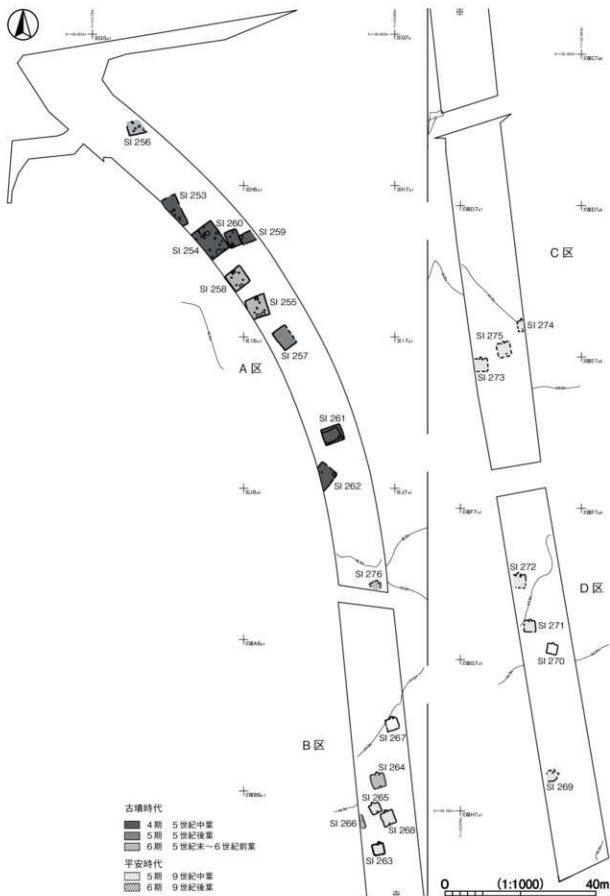
第4期（5世紀中葉）

第253・254・259～262号堅穴建物跡の6棟が挙げられる。この時期の堅穴建物跡は、調査A区の中央と南側に位置している。主軸または長軸方向が南北方向の堅穴建物跡4棟の軸方向はN-24°-50°-Wであり、平面形が長方形を呈する第259・261号堅穴建物跡の短軸はN-27°-WとN-30°-Wである。傾きに幅があるものの、すべての堅穴建物跡の南北軸が西に振れる。堅穴建物跡の規模と形状は、1辺が8.7mほどの方形と、長軸3.80～5.90m、短軸2.90～5.25mの長方形の2つに分類できる。内部構造は、方形を呈する堅穴建物跡には炉が付設されているが、長方形を呈する堅穴建物跡は炉が付設されていないものもあり、これらの堅穴建物跡は倉庫や工房的な建物の可能性がある。第254号堅穴建物跡は今回の調査で確認した堅穴建物跡で最大の規模であり、壁溝から主柱穴に向かって延びる間仕切り溝と南壁際に貯蔵穴をもつのが特徴であり、集落での中心的建物である。また、第261号堅穴建物跡は、2か所の炉をもち、北・東・南側の三方に高床部を有する堅穴建物跡である。この堅穴建物跡については、出土した鉄剣とともに後述する。

当期の出土土器は土師器の坏、碗、高坏、甕、甔、須恵器の甕などである。石器は磨石、敲石、紡錘車、砥石などが、金属製品は鉄剣、刀子、鎌が出土している。第259号堅穴建物跡から出土した滑石製紡錘車は、上面と側面に直弧文状の文様が刻まれている。未製品を含めた剣形模造品や有孔円板などの石製品も2棟（第253・254号堅穴建物跡）から出土している。剣形模造品は、片面に鑄のあるものと鑄のないものが出土しているが、いずれも茎の表現は判然としない。

第5期（5世紀後葉）

第257号堅穴建物跡の1棟が挙げられる。この時期の堅穴建物跡は、調査A区の中央に位置している。主軸方向は、N-35°-Wで、主軸は西に振れる。堅穴建物跡の規模と形状は、長軸5.7mほど、短軸4.2mほどの長方形を呈している。炉も柱穴ももたないため、居住施設ではなく倉庫として利用されている。



第 107 図 古墳時代・平安時代の堅穴建物跡時期別分布図

た可能性がある。

当期の出土土器は土師器の坏、碗、埴、高坏、甕が、石器は砥石が出土している。

第6期（5世紀末～6世紀前葉）

第255・256・258号堅穴建物跡の3棟が挙げられる。この時期の堅穴建物跡は、調査A区の中央と北側に位置している。主軸方向は、西側への振れ幅が20°未満のもの2棟とそれ以上のものとに2分される。堅穴建物跡の規模と形状は、いずれも1辺が5mを超える方形を呈する。内部構造で竈が確認できたものは、第255・258号堅穴建物跡の2棟である。第255号堅穴建物跡の竈は、北壁のやや東寄りに位置し炉と併存している。第258号堅穴建物跡の竈は北壁のほぼ中央部に位置している。いずれの堅穴建物跡の竈も、煙道部の壁外への張り出しはわずかで袖部は内部に向かって長く、竈の導入段階と考えられる。これらの堅穴建物跡は主柱穴と貯蔵穴をもち、壁溝も一部に巡っている。なお、第256号堅穴建物跡は、主軸方向や出土土器の様相から第258号堅穴建物跡と同規模で、竈は北東部の調査区域外に付設されていたと推測される。

当期の出土土器は土師器の坏、碗、高坏、甕、甗、須恵器の甕などで、ミニチュア土器を伴う。石器は敲石、紡錘車、砥石が、石製品は有孔円板、剣形模造品が出土している。

以上、古墳時代の堅穴建物跡の変遷と出土遺物を概観してきたが、有孔円板や剣形などの石製模造品と敲石や砥石などの石器が数多く出土している（第53表）。当遺跡でのこれまでの古墳時代の遺構から出土した石器の数は、第452集では7世紀代の堅穴建物跡から砥石1点、第467集では5・6世紀代の堅穴建物跡から砥石5点と、遺構外から石製模造品の刀子形、剣形、有孔円板、白玉が1点ずつ出土しているだけである²¹。有孔円板や剣形模造品は、その多くが床面が覆土下層から出土しており、祭祀の可能性は否定できない。しかし、これらが出土した遺構からは敲石や砥石も出土しており、第255・258号堅穴建物跡からは、未製品の有孔円板や剣形模造品、焼成粘土塊も出土している。また、当遺跡の今回の調査区に見られる方形と長方形プランの堅穴建物の配置については、栃木県宇都宮市から上三川町に位置する東谷・中島地区遺跡群内の杉村遺跡、磯岡遺跡、権現山遺跡の古墳時代中期においても確認されている。これらの遺跡の長方形プランの堅穴建物には、鍛冶や土器製作などの作業場が含まれている。これらのことから、今回の調査区には、5世紀中葉から6世紀前葉にかけて手工業生産に関わる集団が居住していた可能性を指摘しておきたい³¹。

第53表 古墳時代石器・石製品出土堅穴建物跡一覧

(有孔円板、剣形模造品は未製品を含む)									
時期	遺構番号	磨石	敲石	紡錘車	砥石	台石	管玉	有孔円板	剣形模造品
第4期	S1253				1				1
	S1254		1		3	1	1	2	1
	S1259			1					
	S1261	1	1		4				
	S1262	1	1		1	1			
第5期	S1257				1				
第6期	S1255				2			1	
	S1258		1	1				1	2
計		2	4	2	12	2	1	4	4

(2) 平安時代

平安時代の堅穴建物跡14棟、掘立柱建物跡1棟、井戸跡3基、溝跡2条を確認した。第467集で設定されている第1～4期、第7～10期の堅穴建物跡は確認していないため、ここでは第5・6期に該当す

る堅穴建物跡の特徴を述べる。なお、時期が明確でない第267・270号堅穴建物跡（いずれも9世紀代）は除外した。

第5期（9世紀中葉）

第263・265・268・269・271～275号堅穴建物跡の9棟が挙げられる。この時期の堅穴建物跡は、台地の北縁から離れた調査B区の中央と調査C・D区に位置している。古墳時代の堅穴建物跡の分布域よりも南側で確認した。堅穴建物跡の分布状況から、調査B区に位置する3棟（第263・265・268号）、調査C区に位置する3棟（第273～275号）、調査D区に位置する3棟（第269・271・272号）に分けることができる。主軸方向は、調査B区に位置するものがN-11°-28°-W、調査C区に位置するものがN-5°-13°-W、調査D区に位置するものは東壁に竈が付設されている第269号を除き、N-1°-WとN-3°-Wである。各区に位置する堅穴建物跡群によって、主軸方向が一定の規則性が見られる。限られた調査範囲ではあるが、第467集で指摘されている「3棟一組ほどの最小の集団構成」にも当てはまる。また、東壁に竈が付設された第269号堅穴建物跡はその北側や南側には堅穴建物跡が存在していない。

堅穴建物跡の規模と形状は、1辺が3mほどの方形のものと、1辺が3.5mを超える方形のものに分けられ、1辺が3.5mを超える堅穴建物跡が「3棟一組ほどの最小の集団構成」の中に1棟ずつ存在している。竈は第269号堅穴建物跡を除き北壁に付設され、ほとんどが壁の中央部に位置している。第271・273・274号堅穴建物跡の3棟では、凝灰質泥岩製の支脚が出土し、第268・271・275号堅穴建物跡では補強材として凝灰質泥岩が使用されており、これらの使用は第467集で報告されている遺跡北東部の区域と同様⁴¹であり、県北地域の竈の特徴である。

当期の出土土器は土師器の坏、高台付坏、皿、甕、須恵器の坏、高台付坏、蓋、甕などが、土製品は管状土鍾と紡錘車が、金属製品は鎌が出土している。

第6期（9世紀後葉）

第264・266・276号堅穴建物跡の3棟が挙げられる。この時期の堅穴建物跡は、調査A区の南側と調査B区の中央に位置しており、第5期よりも北側に展開している。遺跡北東部の区域の堅穴建物跡の棟数は第5期と同数で推移するが遺跡中央部の区域では減少している。主軸方向は、調査B区に位置する第264・266号堅穴建物跡がN-14°-WとN-19°-Wである。「3棟一組ほどの最小の集団構成」を構成する建物が、ほぼ同じ方向を指すのは第5期と変わらない。調査A区に位置する東壁に竈が付設された第276号堅穴建物跡の周辺には同時期の堅穴建物跡が存在しない。調査区域が限られているためその東側や西側に位置していることも考えられるが、今回の調査区域内を見る限り、東壁に竈が付設された堅穴建物跡は同時期の堅穴建物跡から離れて位置する傾向が窺える。

堅穴建物跡の規模と形状は、1辺が3.5～3.7mほどの方形を呈し、第5期と変わらない。竈は第264号堅穴建物跡では北壁の中央部に付設されており、燃焼部から凝灰質泥岩製の支脚が倒れた状態で出土している。

当期の出土土器は土師器の坏、高台付坏、碗、皿、甕、須恵器の坏、高台付坏、甕などが、土製品は紡錘車が、石器は砥石などが、金属製品は刀子が出土している。

以上、平安時代の堅穴建物跡の変遷と出土遺物を概観してきたが、遺跡北東部の区域に比べて遺構の密度は低く、大型の堅穴建物や有力者の存在が窺えるような遺物も出土していない。これらのことから、今回の調査区域は古代集落の外縁部である可能性が高い。

3 特徴的な遺構と遺物について

ここでは、第261号堅穴建物跡の形状と出土した鉄剣について、若干の考察を加える。

(1) 形状について

第261号堅穴建物跡は当遺跡では初めて確認された、北・東・南側の三方に高床部を有する堅穴建物跡である。上段と下段では軸方向がやや異なるため、2棟の建物の重複も考えられたが、土層観察や床面の状況、遺物の出土状況などから、その可能性は極めて低いと考えられる。下段の床面部分の建物を、上段の床面部分を含めた規模の建物に拡張した可能性もある。上・下段ともにほぼ平坦で、下段の中央部は硬化しているが、上段は硬化していない。堅穴建物内の空間利用の違いによるものなのか、使用期間と頻度によるものなのかは不明である。炉は2か所確認しており、炉1の長径方向は堅穴建物跡の長軸とほぼ平行で、炉2の長径方向は炉1の長径方向とおおむね直交する。遺存状況から同時に使用されていたと考えられる。2か所の炉が同時に使用される場面を想定すると、1か所は照明・暖房用として使用し、もう1か所は別の用途で使用していたとするのが妥当と思われる⁵⁾。柱穴は1か所確認されただけであり、内部に柱をもたないのは、作業の邪魔になるのを避けるためと考えられる。また、ピットは下段のコーナー部に1か所、上段のコーナー部に2か所存在しているが、貯蔵穴とは判断できなかった。遺物は土師器のほかに、磁石、砥石などの石器や被熱した礫が多数出土している。

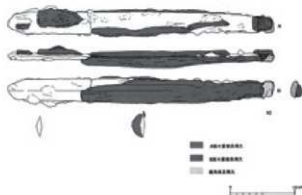
栃木県十三塚遺跡では、古墳時代中期の堅穴建物跡で床に段を有するものが2棟確認されている。二方または三方に中央よりも一段高い部分を有し、コーナー部に貯蔵穴をもっており、本跡とよく似た形状である⁶⁾。

本跡はその形状と出土した石器や礫などの存在から、居住を目的とした建物ではなく、工房的な建物であったと推測される。

(2) 鉄剣について

第261号堅穴建物跡の北西部の上段から下段にかけての覆土下層から、切先を下段に向けた状態で出土している。全長65.8cm、刃部長51.8cm、茎部長14.0cm、最大幅3.8cm、最大厚1.1cmで、切先から茎尻まで完存している。刃部は両鎗造りであり、稜を確認することができる。刃部間寄りの部分には直径2mmの孔が1か所開けられている。茎部には直径4mmの目釘孔が2か所開けられ、茎尻から刃部に向かって緩やかに広がり浅い角間がつく。刃部や茎部に木質あるいは布などの痕跡は認められない。古墳時代前・中期の刀剣類については、池淵俊一氏がその分類と編年を行っており⁷⁾、氏の分類によると本跡から出土した鉄剣は「浅直・斜角間細茎」に該当する。この型式が「主体を占めるのは5世紀中葉以降であり、5世紀後葉にはほぼこの型式で統一」されるとしている。本跡の鉄剣に共伴する土師器は5世紀中葉に位置づけられ、その点からも合致する。鉄剣の生産には高度な鍛冶技術と素材が求められることから、畿内の工房で生産されたものが、当遺跡にもたらされたと考えられる⁸⁾。

鉄剣が古墳時代の堅穴建物跡から出土した例は、栃木県十三塚遺跡⁹⁾や兵庫県播磨一宮伊和遺跡¹⁰⁾が知られている。十三塚遺跡からは現存長41.3cmの鉄剣が、北西壁際中央部分から刃を立てた状態で出土している。鞘と思われる



第108図 栃木県十三塚遺跡出土鉄剣実測図

部分には木質が、一方の端には鹿角と思われる有機質の物質が残る。本跡から出土した鉄剣は刃部と茎部ともに付着物が見られず、堅穴建物跡からの出土であるため、装具の修理・修繕のために外されていたと見るのが自然である¹¹⁾。

当遺跡のこれまでの調査では、この鉄剣を保有していた有力者につながる遺構と遺物を確認していない。また、当遺跡周辺の古墳時代中期の古墳も知られていない。今後の調査の進展に期待したい。

4 おわりに

今回の報告分までの調査結果は総調査面積が38,269㎡で、確認した遺構は、堅穴建物跡227棟、掘立柱建物跡29棟、方形堅穴遺構24基、井戸跡9基、溝跡31条、土坑1,126基などである。調査区域が南北に細長く限られていることから、下大賀遺跡の全容を把握することはできないが、今回は古墳時代中期の集落の性格を検討するための資料が得られたほか、平安時代の集落跡の範囲を推定することができた。

特に第261号堅穴建物跡から出土した鉄剣は類例が少なく、貴重な発見である。また、第87号堅穴建物跡からは、渡来系資料と位置付けられる古墳時代中期の土師器多孔式甕¹²⁾が出土しており、渡来人との関わりが窺える。当遺跡以外にも、久慈川流域には古墳時代中期の土師器多孔式甕が出土している遺跡（森戸遺跡第70号住居跡・第133号土坑、地天館跡第8号住居跡）が確認されている¹³⁾。当遺跡の古墳時代中期の鉄剣の出土は首長層の存在を想起させ、集落の様相は首長層と渡来系工人との接点を彷彿とさせる。

今回の調査結果が、久慈川・那珂川流域における拠点的な集落であった当遺跡をはじめ、周辺地域を含めた歴史研究の一助になれば幸いである。

註

- 1) 野田直直は 2023 年『下大賀遺跡3 一般国道118号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』茨城県教育財団文化財調査報告第467集 ほかに茨城県教育財団文化財報告第399集・第452集を参照されたい。
- 2) 註1に同じ
- 3) 内山敏行(編) 2013 年『東谷・中島地区道路群14 権現山道路南部(SG2・SG5・SG9・SG10・SG15区)・磯岡遺跡(SG9区) 都市再生機構による東谷・中島土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県埋蔵文化財調査報告第360集
- 4) a 註1に同じ
b 駒澤恒郎 2024 年『下大賀遺跡の竈構造の変化』『研究ノート』第21号 茨城県教育財団
- 5) 内山敏行 1998 年『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡 主要地方道宇都宮亀田栃木線「羽生田工区」道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県埋蔵文化財調査報告第214集
- 6) 中村孝史ほか 1991 年『十三塚遺跡 県営圃場整備事業内川沿岸地区に伴う発掘調査』栃木県埋蔵文化財調査報告第115集
- 7) 池田俊一 1993 年『鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—』『古代文化研究』第1号 鳥根県古代文化センター
- 8) 豊島直博 2022 年『古代刀剣と国家形成』同成社
- 9) 註6に同じ
- 10) 伊和道跡発掘調査団 1974 年『播磨一宮伊和道跡』播磨一宮町文化財調査報告書1
奈良文化財研究所全国遺跡総覧によると、抄録に「古墳時代前期の堅穴住居跡4棟を掘出、焼失したと見られる炭化した垂木材等の木片が出土。堅穴住居跡2より、手づくね土器・玉類・双孔円板・鉄剣の祭祀関連遺物が一括出土。」と記載されている。
- 11) 内山敏行氏のご教示による。
- 12) a 註1に同じ
b 酒井清治 1998 年『日韓の甕の系譜から見た渡来人』『橋崎彰一先生古稀記念論文集』真福社
- 13) 菅川貴之 2022 年『久慈川流域における古墳時代中期の渡来系資料』『研究ノート』第19号 茨城県教育財団

写 真 图 版



第261号竖穴建物跡出土遺物



調査区北部全景（南上空から）



調査区南部全景（北西上空から）



第253号竖穴建物跡遺物出土状況 (1)



第253号竖穴建物跡遺物出土状況 (2)



第253号竖穴建物跡遺物出土状況 (3)



第253号竖穴建物跡



第254号竖穴建物跡遺物出土状況 (1)



第254号竖穴建物跡遺物出土状況 (2)



第254号竖穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況



第254号竖穴建物跡



第255号竖穴建物跡遺物出土状況 (1)



第255号竖穴建物跡遺物出土状況 (2)



第255号竖穴建物跡貯蔵穴 1 遺物出土状況



第255号竖穴建物跡貯蔵穴 2 遺物出土状況



第255号竖穴建物跡竈遺物出土状況



第255号竖穴建物跡



第256号竖穴建物跡遺物出土状況



第256号竖穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況



第256号竖穴建物跡



第257号竖穴建物跡



第258号竖穴建物跡遺物出土状況



第258号竖穴建物跡遺物出土状況



第258号竖穴建物跡



第259号竖穴建物跡遺物出土状況 (1)



第259号竖穴建物跡遺物出土状況 (2)



第259号竖穴建物跡



第260号竖穴建物跡



第261号竖穴建物跡遺物出土状況 (1)



第261号竖穴建物跡遺物出土状況 (2)



第261号竖穴建物跡遺物出土状況 (3)



第261号竖穴建物跡遺物出土状況 (4)



第261号竖穴建物跡遺物出土状況 (5)



第261号竖穴建物跡



第262号竖穴建物跡



第1692号土坑遺物出土状況 (1)



第1692号土坑遺物出土状況 (2)



第263号竪穴建物跡



第264号竪穴建物跡遺物出土状況



第264号竪穴建物跡竈遺物出土状況



第264号竪穴建物跡



第265号竪穴建物跡



第266号竪穴建物跡遺物出土状況 (1)



第266号竖穴建物跡遺物出土状況 (2)



第266号竖穴建物跡



第267号竖穴建物跡



第268号竖穴建物跡



第269号竖穴建物跡



第271号竖穴建物跡



第272号竖穴建物跡



第273号竖穴建物跡



第274号豎穴建物跡



第28号掘立柱建物跡



第11号井戸跡



第11号井戸跡掘方



第12号井戸跡



第12号井戸跡掘方



第13号井戸跡掘方



第47号溝跡



第48号溝跡



第9号方形竖穴遺構



第46号溝跡曝出土状況 (1)



第46号溝跡曝出土状況 (2)



第46号溝跡



第29号掘立柱建物跡



第30号掘立柱建物跡



第31号掘立柱建物跡

PL10



第32号掘立柱建物跡



第2号方形竪穴遺構



第3号方形竪穴遺構



第5号方形竪穴遺構



第6号方形竪穴遺構



第7号方形竪穴遺構



第11号方形竪穴遺構



第13号方形竪穴遺構



第14号方形竖穴遺構



第15号方形竖穴遺構



第7号井戸跡



第8号井戸跡



第9号井戸跡



第10号井戸跡



第44号溝跡



第45号溝跡

PL12



第253・254号竪穴建物跡出土遺物



SI 254-22



SI 254-24



SI 254-29



SI 254-31



SI 254-25



SI 254-30



SI 255-1



SI 255-3



SI 255-4



SI 255-5



SI 255-6



SI 255-7

第254・255号竖穴建物跡出土遺物



9



16



14



18



21



第255・256・258号竪穴建物跡出土遺物

PL16



第258・259号竖穴建物跡出土遺物



第259・261号竖穴建物跡出土遺物



6



7



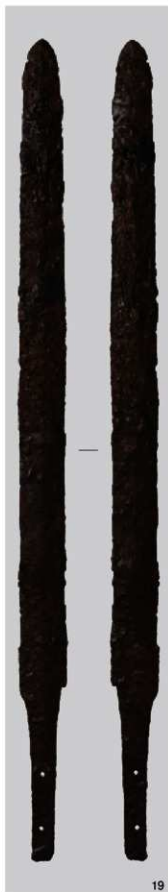
10



20



15



19

第261号竖穴建物跡出土遺物



第262・264号竖穴建物跡出土土器



SI 264-16



SI 264-18



SI 265-1



SI 266-3



SI 266-2



SI 272-1



SI 272-3



SI 272-5



SI 273-8



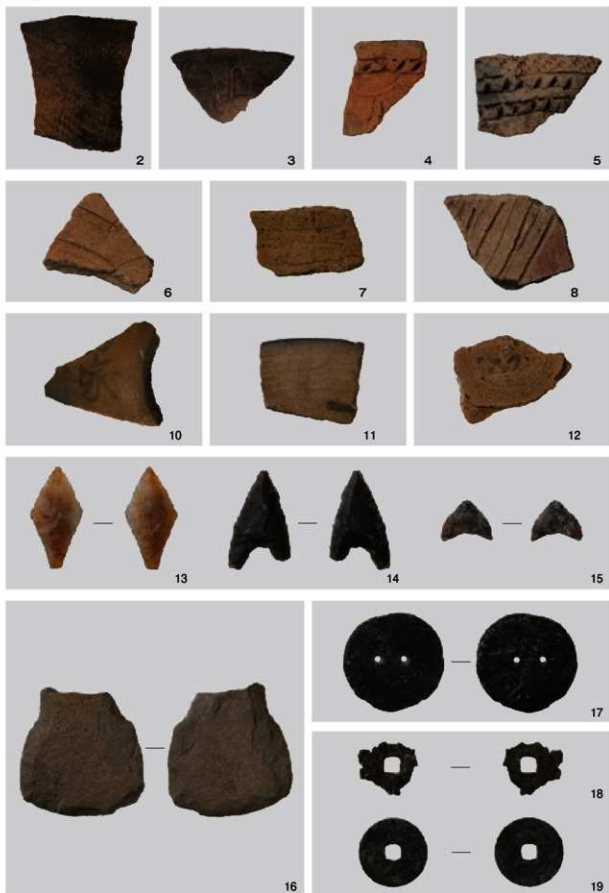
SI 275-2



SI 275-1



第1692号土坑、第11号井戸跡、第46号溝跡、第8号方形竪穴遺構出土遺物



抄 錄

[illegible]

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 11 Pro
	編集	Adobe InDesign 2024
	図版作成	Adobe Illustrator 2024
	写真調整	Adobe Photoshop 2024
	Scanning	EPSON ES-G11000
使用Font	OpenType	リュウミンPro L-KL、太ゴB101 Pro Bold 中ゴシックBBB Pro Medium
写真	線数	カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign 2024でデータ入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第475集

那珂市

下大賀遺跡 4

一般県道静常陸大宮線道路整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

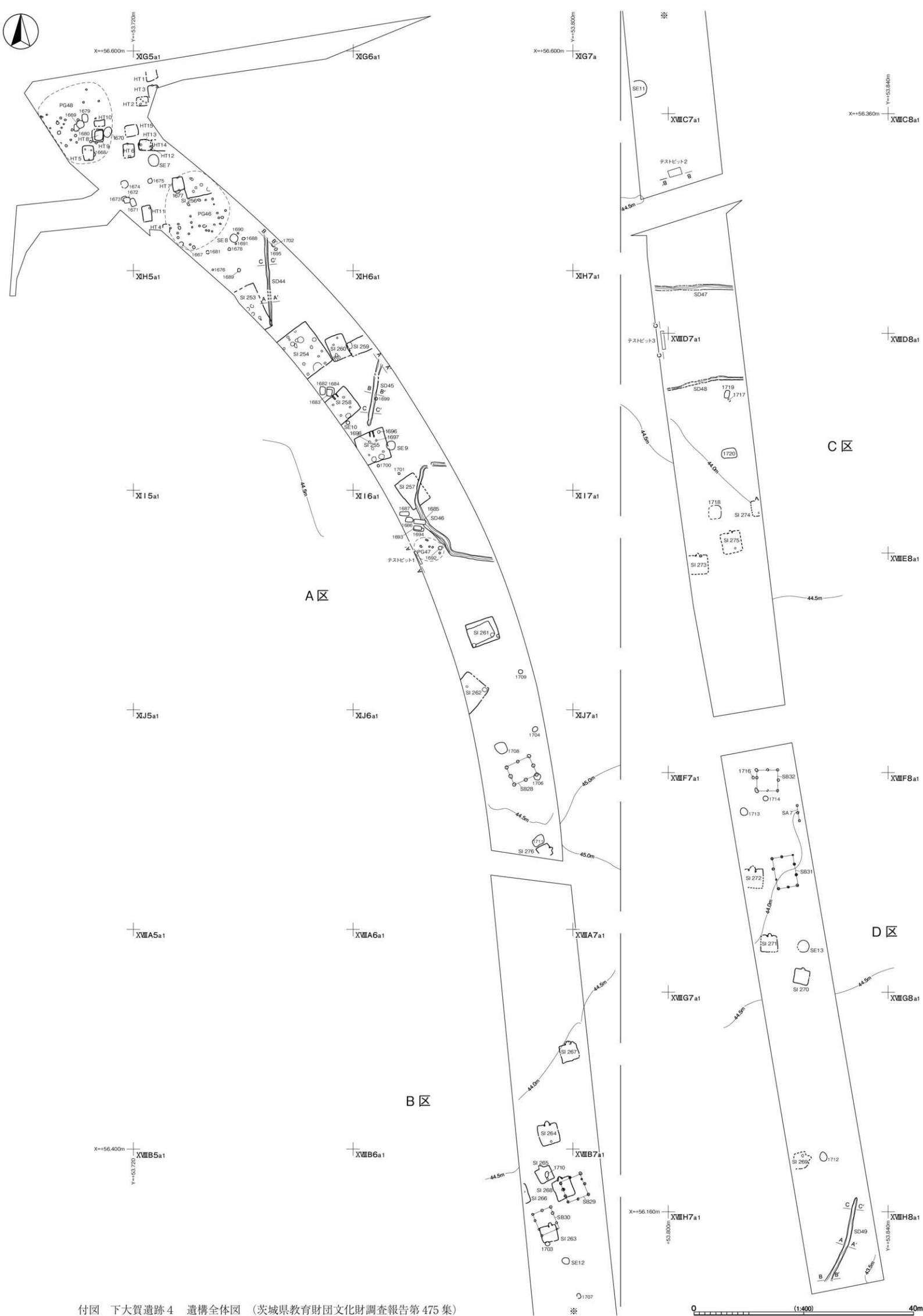
令和7（2025）年 1月23日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <https://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 八幡印刷株式会社

〒970-8026 福島県いわき市平字田町82-13
TEL 0246-23-1471



付図 下大賀遺跡 4 遺構全体図 (茨城県教育財団文化財調査報告第 475 集)